

---

# 空っぽの手のひら

一理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空っぽの手のひら

### 【Nコード】

N2789J

### 【作者名】

一理

### 【あらすじ】

なんか本気でかわいそうな人生を歩んでいた私が楽しかったときの形見のビー玉みたいなんを見つけた。そうしたら太郎君（不細工人形）と一緒に異世界トリップしちゃった。良くわかんないけどこれ以上不幸にはならないでしょうよ、心機一転頑張ろう。つておもっていたら異世界先でもなんか色々狙われるのねしかも世界規模の話とかされても分らないのねとりあえず元の世界帰れなくていいので、幸せください。

## 太郎君と一緒に

私はどうやら不幸な生まれ……いや、かわいそうな境遇にあるらしい

父親は男色に走り、母親は叔父さんとできているらしいし、お姉ちゃんには彼氏を寝取られしかも家には夜な夜な遊びに行っているためめったに会わないし、お兄さんには家を出てからそれっきりだし、家はもう借金まみれだし、父方の祖父母はすでに他界してるし、母方の祖父母は縁切つたらしい……お友達はなんかいつの間にか仲悪くなつてバラバラ……先生はきつと私のこと忘れてると思う、だって私にだけプリント回ってこない……。

つていうか、家はもう崩壊しています。

私が周りを不幸にしているのだろうか？いやあくココまで来ると笑つちゃうね

「私は、何のために生まれてるんだろう」

生まれたから

「私はどうするべきかね」

知らない

「私は、死ぬべきかなあ？」

できるならね

「……はあ」

自問自答でこんな自分に対して冷たい反応しかできないのだろうか。自分なんだからやさしくてもいいのに……

「自分が嫌いなのかな」

真つ暗な（電気を止められた）部屋の中でテレビもつかない、そんなかで彼女

若草 雪衣ユキはぼうつとしていた。

この家に居るのは彼女しか居ない。みんな消えてった。

「あゝ、可哀想かわいそう可哀想かわいそう川獺カウウツ……なんつって」

むなっ

「寂しいから太郎君一緒に寝ようか」

太郎君、ゴミ捨て場に新品の状態で捨ててあった、やけに不細工な顔した謎の生物だ。

とんとん、と階段を軽やかに上がりベットにダイビングした。ごす

飛びすぎてベットから落ちた……うう

「あゝ夜って暇だなあゝ開放感あるけど……朝はな〜んかおもいだよね〜。」

部屋の机の上に飾ってあった写真を見る。今はもう放置しすぎて埃ほこりかぶっている。

「幸福だったときの記憶が小3って終わるの早すぎでしょうよ〜」  
小3のときの最後の家族旅行でどっかの遺跡行ったときの写真しか  
もう残っていない。っていうか小さい子連れて行く旅行先が遺跡っ  
てマニアかよ

「んん〜？確かあたしこん時どっかいったんだよな〜」

色鮮やかな町並みがそろい、綺麗に芸術のように並べ造られた石畳  
の床、橋の下は海で噴水がところどころ鮮やかに吹いていて……ど  
っかの国旗みたいな旗が風に揺れて……坂道が上がっていったらと  
ても立派でおつきな白い花の咲く木があって、そこでアタシは出会  
った……

「誰だったかな、そのこ……男の子ってのは覚えてるんだよな」

初恋だったから

「今は太郎君好きよ〜寝取られないでね」

幼馴染だった隣の幼馴染と中三のとき付き合い始めたが、二歳年上  
の姉にまんまと寝取られた。

特にそんなにショックでもなかったから、結局その程度だったんだ  
ろうなあ

私って、好きとか嫌いとかに疎いから。

「………図太いってことかな太郎くん！」

……いや、寂しい子なだけな気がしてきたぞ

「そのときのお土産……何処おいたっけ？」

太郎君をベットのの上に放置して起き上がる。とりあえず手当たりしだいひっくり返していく……ごん、あ、また頭打った。

「馬鹿になったらどうするんだよ、あ、あつた」

とつても綺麗な淡い翡翠色のビー玉みたいな奴

親に見せたとき何処で盗んできたんだつておこられたっけ、今思えば叱られるつて愛があるからだつたのね……今は怒られるなんてもんじゃなく、会話云々姿すらみないぜ

「もう一度……行きたいな……」

ベットに投げ捨てたままの太郎君を回収する……太郎君良く見るとかめだつたんだね……

「もう一度、実感したい生きてるつて」

そう、もう一度……生きたい、生きてるつて……思いたいよ  
これじゃあ、死んでるのと……おんなじだよ  
あの世界は、優しかった……

ぱあああああ

「わ!？」

いきなり持っていた珠タマが光った。

突如光りだした光は部屋全体を包み込むようにしてまばゆく光り輝き、雪衣の姿をたやすく見えないものにした。  
太郎君を強く握り締める。

そうして光が完全に消えるころには、そこに雪衣の姿はすでに無かった……。

太郎君と一緒に（後書き）

なんかいいタイトルが思いつかなかったです



## 暗部露西亞は良い所

ああ、なんか……すっごく目が痛い

当たり前か、真っ暗闇の中一人寂しく、あ、いや太郎君と二人きりで居たのにいきなり発光されたら目に悪いよねえ  
いきなり電気が復旧したのかと思ったよ。

んなわけないか〜

「うん？あゝあはは……いつの間にか外でてる〜」

しかも昔のヨーロッパの国みたいな石づくりやらレンガづくりやらの家があるし〜服もなんかファンタジーチックなロリ系やらカジユアルやら〜

「……まじすか」

笑ってられませんか

はい、主人公の勝手なあらすじ〜つまり回想〜

部屋で一人言いつてたら昔のことを思い出した。思い出したついでに昔の形見を探した。うん、それで？それで見つかった……それがいきなり光りだしたと

「それが……、これがあ」

ぶっちゃけただのビー玉にしか見えないコレ。が光出したのよね

「……えっとお、ストーリー上どうしたらいいかな」

あ、もしかしてここ昔きたことある場所じゃん！  
旗の模様とかちよつと家が変わってたから分かんなかった……だっ  
てほら、アタシ馬鹿ジャン？

「太郎君どうしようっか」

マジどうしたらいいでござんすか

「お姉ちゃん」

「ん」

これまた不思議な服着てるねボーイ&ガール「チルドレン」、英語  
で書けっつて言われたら書け無い自信があるよ。っっていうかこの  
二人双子なのね。

「春だからって寒くないの？足」

「石畳だからって痛くない？足」

お前たちの語尾は『足』なのかい？違うのかい？わかってるよ、あ  
たしが裸足だから心配してくれてるんだよね？足

「えつとね、……助けてください」

無いプライドを潰して助けを乞うた。このままじゃ私……ホームレ  
スに……！！

いや、元の世界でもホームレスまがいだっただけど

「うーん、カアカに聞いてみる」

「カアカが聞いていっただけいい」

カアカ……カラス？

他の人にジロジロ見られながら連れて行ってもらった場所は飲食店『アンブロシア』と、英語で書かれていたのを主人公が読めるはず無かった。

「僕たちの家でお店」

「アンブロシアっていうの」

「へへ、暗部露西亞……怖い名前」

最後のほうは小さく呟いたので二人には聞こえなかったらしい、手を引つ張って率いてくれる。のは嬉しいけどきみたち小3ぐらいだよね身長からして、あたしこっぴん見えて高3だからさあゝいたんさあ腰が

「カアカ」

「あらさっき出てったばっかなのに早いんなあ、おや」

「どうもです」

古びた感じの木でできた視景色茶色のお店の中で丸机の開いてる席に座った。といっても今日は休日らしく全ての席が空いているが

「あんだあさあ」

「はい？」

貰ったお茶に頬緩めながら話しかけられたほうを見ると真剣な表情の女将さんと眼が合った。やべ、御代もってなイツスよ？アタシ

「ユイでしょ」

「え？」

何で？知ってるの？おばはん？エスパー？

「そうだよ、なんで」

「やあっぱりい！薄幸面してたから分かったわあ！いやあ〜何年ぶりかね〜十年ぶりぐらいかなあ」

「ええ？えけ？」

不思議に吃驚しすぎて『えけ』って謎な言葉発生しちゃったよ。

つかこの二人太郎君取るうとするんですけど！

「覚えてないかなあ？ほおら『マリミア』だよあアンブロシア看板娘ノーナイトラウンーのマドンナさあ」

「え〜？わかんない……」

「マミーって親しんでくれたじゃんさあ」

「う〜？」

「ほらあ〜もう………ミドガルド一の凶暴女つつたら分かるか」

「あああ！……！」

小さい時に来たときに家泊めてくれたお姉ちゃん、切れると怖かったからあたしがそういうあだなつけたんだっけ？ミドガルドってなんだっけ〜……ああ、この世界の名前か

「思い出したマミーかあ」

そうそうと微笑む、昔はあんなに細かったのに今はもう……丸いね。

「コレがアタシのチビ共でえさ、クナとクロだよ」

「マミ……なんでなまってんの？」

「姑さんが酷くなまってるねえ、永く一緒に居たら訛って、最近ポツクリいっちゃったんだけど」

でもさっきの口調からしたら切れると素になるのね

「カアカゝオネーちゃんと知り合い？」

「オネーちゃんココ住める？あたしオネーちゃん欲しかったから嬉しい」

「ユイはどうしたの？迷子かえ」

「うん」

大まかに言ったら迷子

「不思議な子さなあ、何処からきてるんだか……まあいいけど、じゃああたし部屋用意してくるからクナお風呂案内してあげな」

「はい、こつちだよ」

「クロはてつだつち」

「めんど、はい」

クロは反抗期かな？クナに引つ張られながら久しぶりなお風呂場に来た。しかし安心してはいけない、確かココ扉の手前床抜けが酷かったはず。今回も転んで鼻血ブーは嫌だ

「ふふん、覚えてるもんね」

「あ、お姉ちゃんあぶな」

ずぼ、ごん、ぶは！！

「手前じゃなくて二歩前かあ」

覚えてないよ、そんな一々細かく  
日も落ちてきた……お風呂の中でまどろむ……今日一日振り返って  
何も思わないあたしって大丈夫ですか？

……。

……ぶくぶくぶくがぼぼ……！

危うく溺れそうになりました。

## お留守番の太郎君

若葉雪衣です。コレはむさいっくな……噛んだ。不細工な亀の人形太郎君です。

どうでもいつかあ

「ユイ姉おきい」

「起きろよ」

二人かがりでお布団の上で乗っからなくても、危うく吐くところでしたよ内臓六腑をね

「おはよう、クナクロ」

階段を下りていくと沢山のお客さんがいっぱい居て女将さんと昨日はいなかった頭にパンダなつけたさえないお兄さんやひよろいお姉さんが一生懸命働いていた。

これは、働かないとダメ的なパターンですか？

「あ、ちょっとユイてつだっちよくれん？」

ですよー

「喜んで〜ってクロクナは何処行くの？」

『学校』

二人そろってうれしそうに……学校あるんだ〜へ〜そりゃそうか〜

「俺おつきくなったら騎士学校行くんだ！こんな辺鄙へんびな店の跡なんか継がないぜ」

「とかいいつつ戻ってくるだろうクロの代わりに一応お留守番する予定なの」

この二人なんか大物だなあと思いつつ行ってらっしゃいと声をかけ二人と別れた。

アタシ馴染んでいる場合じゃないんだよね

「で・つ・だ・え・つつ」の

うお、魔王の殺気が怖いからさっさと手伝おう。

夕方になった。

「うへ〜つつかれたあ、でもこういう疲れもたまにはいいよね」

「ここに居る限り毎日味わえるよ」

「たまにはつつたじゃんかよお」

毎日はお断り

遅い昼食を口の中に頬張っていると女将は外を見ながらユイに声をかけた。

「居候ユイちよつとクロクナの帰り遅いから迎えに行ってきたくないかえ？多分坂の上のへべの大樹の近くにいるだろうからさ」

「……もおぐもぐ、ごっくん。いいよ！任せてよー！」

居候って暗に言わなくても行っちゃるさあ



ちよつど行きたいと思つてたからさ、あの木にもついちど会いたか  
つたんだ

並木道を上つていく……ふふ、ココ意外と急斜面疲れた

「ふあああいい空気」

あくび出ちゃった

上りきると見事な風花が迎えてくれた。真っ白で雪吹雪のよう……  
ごくたまに青色も混ざっているからイルミネーションのような幻想  
さがあつて、綺麗

「……」

今だけは、誰も邪魔しないで  
アタシの……  
この大切な時間だけは……

「うわあああああああああ」

邪魔された　　くくくって、この声ってクロ？

大樹の向こう側のほうを向くと、マントで姿を隠しているいかにも  
怪しい集団、の目の前には5・6人の立派ななりをした青年団がい  
た。おそらく彼らは騎士団

「二人ともつかまつてる?!」

推測するなら

騎士団が何らかの敵まあ、あのマントの二人組みを捕らえようと試

みるも失敗、のうえマントの二人にたまたま遊んでいたクロクナが人質としてつかまったとまあ〜分かりやすい

助けなきや

「……………運動神経よくないんだけどな」

こそつと、木に隠れるように見守る。

今なら背後取れるしアツタクすれば……………その後斬られそうな可能性あるけど……………まあいっか

「卑怯だぞ!」

「ウルセエさつさとどきやがれ!」

「ん?……………ぐあ!」

クナを掴んでいた男の背中に思いつきり体当たりをする。それにあつけに取られている隙にクロも自分で脱出を試みた。いやあ、成功するもんだね。

しかし、ココの人たちってカラフルな髪と瞳だよな。逆に黒色の髪の人居ないんじゃない?

「捕まえる!」

えらそうなのつぼが下っ端にそれだけ命令する。マントの人たちはあっさりと捕まった。よっわあ〜

「大丈夫?ちび」

「さっすが姉!影薄すぎて分かんなかったぜえ」

こいつ、感謝してないよね〜  
二人にしがみつかれていると、のっぽがコッチをじーとみつめていた。

「えつとおく好みじゃないんだけど〜ちがつか」

「貴様たち、この女を捕まえるのだ！」

「ええええええ！？」

この状態はなんていうの？『お手伝いありがとう賞』とかくれるとかではないよね！？そういうパターンではないよね？！逃げたほうが良さそうだ。あ、囲まれた。

「要領悪かつたくせに〜！」

「五月蠅い！『漆黒の毒婦』教皇様のところへ連れていえげはああああ！？」

最後まで言う前に誰かに蹴り飛ばされた。のっぽ弱〜けっこう飛んで行ったね。

助けてくれた人と眼が合う。

綺麗な白銀から灰色に変わる髪……そしてその瞳は濃いグレイ

「……………」

しかし、この人も私睨んでませんか？

「騎士隊長になにする！反逆者として捕まえる！」

若者は鼻で笑うと両手を広げて見せた

「オレはただか弱いおちびさんが苛められてるのを助けただけだぜ？」

「その女はな！」

「しらねえな相手が誰でアレ、さっきの奴逮捕に貢献してくれた奴に対して、お礼も無くその上手荒に捕まえようとするのはどうかと思っぞ」

「うぐぐ」

「それともそれがオタクら騎士の『騎士道』<sup>モラル</sup>なのか？」

「ぐぐぐぐ！只の平民風情が！覚えてろ」

隊長らしきのつぼを三人で抱えてココよりも上の坂道を上っていった。今思ったけどココって段々畑みたい町層ができてるんだね

「あ、えつとそこの人、助けてくれてありがとう」

なじえ〜？なじえ睨まれるのデスカー？

「トリュー兄ちゃん」

「いつ帰ってきてたの？」

トリュー？聞いたことあるナ

とか思っている双子に目にくれずコツチに真っ直ぐ歩いてきた。え？何？

「馬鹿野郎！！！」

おもいつきりほっぺを掴まれてぶにぶにぶにぶにされる。わっかないかなあ〜こっ、ほっぺの肉をこねられる感触。

「うへええええ〜〜?」

ア、この人身身長高いな

「あのマントの二人は強盗殺人の常習犯だったんだぞ！たまたま油断していたからうまくいったけど、本当なら〜」

「えあ〜〜う、もう分かりましたああ、すみまひえんでったあ」

やっと解放された。

「ア、もう時刻だ帰らなきや」

「トリュー兄ちゃんも来るよねえ?」

「泊まらせて貰うわ」

「え?この人も来るの」

トリューと目が合う

「嫌なのかよ」

意地悪な笑みを浮かべながら手をもぞもぞと動かす。

「わ〜い、うつれし〜なああ」

「なー?嬉しいな〜よっし、行くかチビ共」

そつえば漆黒の毒婦ってなんなんだろう?

マリミアに聞けばいいかな

それがこの人の、不幸だった。

## とりま逃走

アンブロシアに帰ってきた。

「おやあ、トリユージャない」

「久しぶりだなマミ姉」

知り合いらしく仲良さげに会話している。

「おい、何呆けてんだよ」

トリユージャに頭を小突かれて歩き出す。つつかれたついでに思い出した

「マミー、漆黒の毒婦ってなに？」

「聞いたことも無いけど？どうしたん？」

「騎士さんにいわれてたよ」

クロが変わりに答えてくれた。

そうそうと頷くとマリミアうーん、と唸った。

「そろそろ近所に住んでいたゼシルが帰ってくるから聞いたらどうだい？」

「誰それ」

「この町出身の騎士様だよ」

ふーん

騎士って随分と出世コースなのなあ





見たことある灰色の瞳だなんて思ったけど、ケド……

「小さいコロの可愛げは何処いったの?!」

「あのなあ」

この町の案内をにこにこにかわいらしい笑顔で案内してくれていたトリユーが、いまや可愛げのない大人に成長〜?

「かなり失礼なこと思ってくれてるようだな」

「ア、声出てた?」

「……せっかく助けてやったのに、そーゆう態度とるかよ〜へいへい、可愛げなくて悪かったなあ」

「ごめんごめん、イヤア……馬鹿だから忘れてたわ」

なんか皆沈黙した。うん?なんかアタシ墓穴掘った?

「阿呆」

デコピンされた……うああなんか懐かしい

「ゼシルってさあ、ゼシルヴァンだよな、懐かしいなあ泣き虫君」

「よく泣かせてたもんなあ、そのくせアイツ戦ったら一番強くて」

「そうそう、結局三人で泣いたっけ?」

華やかな昔話に花を咲かせていると店の扉の開く音が聞こえた。

「マリミアさん、お久しぶりです」

「あら、噂をすれば、ほらユイ」

「ユイ?」

綺麗な琥珀色の淡い色がその水のような雅で落ち着いた雰囲気をもし出していた。

「うわあ、久振り〜ぜんっぜん面影ないね」

「トリユー……………」

斬

「え？」

目の前には細長い騎士の剣が堂々たる様で目に映った。

「……………漆黒の……………毒婦」

またですか？

え〜、私の幸せってコレでošimai?早くない?

「……………えーと、ゼシル君だよね〜?」

「おい、いきなり何するんだ忘れたのか?」

「忘れてない!確かにボクも会いたかったです、しかし」

射止められるかのような眼差しは心にも痛いよ

「『漆黒の毒婦』を放っては置けない」

「……………分かった、いや、よくわかんないけど」

彼と私の間に机があつてよかった。

足で机を蹴り上げる

「!？」

それに気を取られたうちに雪衣は走り出した。  
階段を上っていく

そして与えられた部屋に入り無駄だと分かっているながら鍵をかける。

「太郎君……」

どうやら私には君だけのようだよ。

扉を叩く音が聞こえる。あと、もめる声も

よし

「話し合いは、よいしょ、嫌いなものよ」

屋根の上に乗る。窓から上がるってすつごく怖いね太郎君。

日の落ちた空は……真っ暗でもう夜だ……

ああ、闇が、星が、月が、まるで私をあざ笑っているようだ……

ふははははは!はあくっつあ

逃げよう……

太郎君と一緒に

## 太郎君と落ちる

「じつゆつときって、どうしたらいいんだろつね太郎君」

今更だけど、アタシの一番大事なものって太郎君だけって、可哀想だなぁアタシ

ある三角屋根の上に行ったところで、夜の湿気で濡れていたの足で足を滑らせさらに骨に尋常じゃない痛みを感じつつ、家と家の隙間に落ちていった。

ぼこ

「痛さとびっくりとで、声が出なかった……良かったよくなによくな……ていうか」

体の自由がきかない

「ゴミ箱にハマルあたし、あははは」

はは、ゴミ箱がお似合いですか？

「太郎君と出会ったあの場所もゴミ箱だったねえ、今思うとなんであたしゴミ漁ったんだろつ、人に見られなくて果てしなく良かった」

過去振り返ればかなり大胆なことばかりしているユイは空を見上げた。

今日は満月

「……あ、声が近い」

ゴミにはまったまま捕獲されるのか……反抗に失敗した犯人みたいで嫌だなあ……  
声がだんだん近づいてくる。  
がさ

「？」

目の前に誰かが立った

「……<sup>パープル</sup>紫色の瞳<sup>アイ</sup>……綺麗」  
「お前」

男が口を開いた

「阿呆か」

はい、そうです

アンブロシア飲食店……

「ゼシル！どういっつもりだ」  
「邪魔をするなら、執行妨害で逮捕すると、俺は言いましたよ。前もってね」

トリユーとゼシルは睨み合う

「カアカ、ユイ姉大丈夫かな」

「さあねえ、なんだかんだいってあの子は大丈夫さ」

「なんで？」

「カアカの直感」

双子は物凄く心配そうな顔をした。

「おい、ゼシル」

「なんですか」

「知ってるんだろ？教えるよ……その『漆黒の毒婦』とやらを」

「……」

「いけないのか」

ゼシルは腰掛けていた椅子の向きをトリユーに変えた。

「漆黒の毒婦、そのままの意味です。『闇を纏いで災いを呼ぶ女』

そして『ミドガルド』に『終焉』ラグナロクをもたらす者です」

「んだそれ？」

「貴方は途中で騎士士官学校をやめたので、重要機構を知らないのは無理ありません、しかしコレでもう分かったでしょう？我々騎士は教皇様より勅命を受けている『漆黒の毒婦が現れた場合速やかに』

「

『殺せ』

真つ暗な森の中雪衣は知らない青年におんぶされていた。

(この人ふわふわな髪の毛で……くしゃみしそう)

そしてひっそりと生活している村についた。

来るまでに色々あったのにこの人それを軽く無視してたなあ  
モンスターとか余裕でいた。

「村の中に魔物？」

「この村は『マヤ族』の集まり場だ」

「女の子の名前みたい」

「祖がそうだったらしい」

「おおマルクム帰ったか」

変な模様のお化粧したご老人が出てきた。性別は見た目では分からない。髪も服も長くまっ白  
アンブロシアの町……なんて名前だっけ？まあいいやあの町が白い  
レンガでできているというなら、ココは木でできる。

「しかも」

木の上

「……ほへー」

「もしや『漆黒の現代神』<sup>アラビヤのカミ</sup>ですか？このようなら場所へよ  
うこそ」

地に足をつけて頭を下げた、新しい用語に驚かされつつも手を伸ばして立てるよういった。

「困ります、アタシ『神』とかじゃないんで」

ただの人間、むしろ無力な子ども

「おい、ちび」

「ユイなんですけどえーと」

「マルクム……とりあえず寝間用意するからココにいる」

おろされて丸太の上で座らされた。この村の子どもたちもよってきた。

「現人神様はどんなお力を持っているの？」

「それはなあに？」

「本当にクロオイ」

一体どうしたものやら

ずりずり……近づいてくる子どもから逃れるために下がる

マルクムが帰ってきた

「あ、おい」

ずる

「それ以上下がると落ちるぞ」



後ろはそう……

ばっしやぁん!!

池でした。

水中で太郎君が浮いているのが見えた。意外と深いよねこの池さ

## 漆黒のアタシ

「服と食事ありがとう、マルクム」

朝日に輝く紫は大阪のおば様たちの頭の色よりも自然で美しい。  
ああ、これぞ地毛の賜物

「と、どちら様？」

焰のように赤い髪とキツツイ眼差しの青年がさっきからずーと、睨  
んできていてもう痛いを通り越して痒い

「ムイト、睨みすぎだ」

「……ふん、こいつが……ねえ」

態度の悪い男だ。家の兄には劣るけど!!

「で、教えて欲しいんですけどゾツチャーさん」

ゾツチャーという名の村長さん。男だつてさ

「『漆黒の現人神』ってなんですか？」

「この世には幾千もの神々が居られる、神と人が分わかつ時が来たとき、漆黒の現人神は現れ、この世に『変革』をおこす」

なんか、スケールの大きい話ですよ  
ついていけない

そんな力持っていない、いるなら自分の人生を練り変えたいよ

「あたしにはそんな力持っていません、魔物にだって、劣ります」  
ここで天狗になってもなあ  
とりあえず、ハードル下げとこつと

「……しかし、貴方からは『気配』を感じる」  
「はあ？」

「ちび、なにもってるんだ」

「いや、ムイトさんだっけユイだってば。何って……」

「ごそごそ」

あ

「ビー玉」

忘れてた

あれ？でも一々ポケットに入れてたっけ？うーん、ミステリーとい  
うよりホラーだなコレ  
投げちゃえ

ぼい

「おい！？」

ムイトが出会った中で一番大きな目を開けてたまの行方を目で追っ  
た。そしてその後走り出し、冷静沈着のマルクムが急いで投げた窓  
から身を落とした。

「わあ、軽やか〜」

「今のは恐らく『偉大な神の御霊』じゃろっ」  
「なにそれ」

あれがなんだって？

「この世と地獄の間にある扉の鍵です」  
「私も探すよマルクム〜ムイト〜」

数分後

「えと、すみませんでしちや」

謝ってる最中に噛んじやった。ムイト怖いよ〜睨まないでよ〜最初  
っから怖かったけど今じゃそんなの比じゃないくらい怖いよ

「だって〜びっくりしたんだもん、普通入れた覚えの無いものがあ  
ったらびびるでしょ」

「吃驚したのはこっちだ、ココまで無知とはな！チビはこれだから」  
「ムイト、ユイは何も聞かされていない」

「そーだそーだ！ついでに無知じゃなくて軽率なだけだよ」

ムイトに無言で頭を掴まれた。アイアンクローというやつですかな  
？といあえず骨にひびが入る前に素直に謝っておこう。そしてもう  
何も喋るまい。

老人はほっとしたように一息ついた。

「つまり、コレが大事なのは分かりました」

いまのところはね。

そして大事なものを太郎君の甲羅の中に入れる。  
太郎君、本当はテエツシユ入れ

「地獄、マントルの世界に住んでいるマグヘイムと、ミドガルドが  
交わらないために、間に神々がつくりし永劫の扉があるのです、貴  
方の持つソレは、永劫の扉を開く鍵なのです」

「……」

「わかってるか」

「全然」

「まあ、とりあえず大事なもんだ」

「それはわかったOKOKよ」

何でそんなたいそうなものアタシが持っているんだろう。ココに来  
たときにでも盗んだか  
それともファンタジーちつくに選ばれし者とか？

「ふとした疑問なんですけど、神々って何処に居るの」

「常におそばにおられます、ただ凡人である我々には見えないだけ  
で」

「胡散臭い」

中学生の純粋な子どもが親に、サンタさん今年は来るかな？って聞  
いて、親にいい子にしてたらね？って言われて流されるぐらいのレ  
ベルで怪しい。

「ちなみに、『漆黒の現人神』は何したらいいのかな」

「神が導きましよう」

だから、オレは大きな男になるぜ！たとえば？……世界を目指す！  
レベルの会話で流されても困るんだよなあ

「まあ、アタシには重い任務なのでエンリョウします」

なんなら珠返すよ

「それがあろうが無かるうと、ユイはねらわれる」

マルクムが言う言葉に身に覚えがあつて、口を閉ざした

アタシハ、ドコヘイツテモ

「漆黒<sup>ヤミ</sup>を纏っている限り」

シアワセニ、ナレナイノカナ

「……あははは、あーはーは、あはははー！」

太郎君を持ち上げる

「それでもいつかあ、人生ごくごく普通より刺激的なほうがいいも  
ん」

「命狙われるんだぞ」

「死にたくないけどさ、何事も動かなきゃ話し進まないでしょう？」

「その珠狙う奴だっているし」

「コレ？」

太郎君から翡翠色のビー玉を取り出す。

「……(じゅじゅ)」  
「おい？」

ぱく

「!!!!!!?????」

「何喰ってんだ！吐け！」

「ン………ごっくん、ぽはぁ」

「な、何している……！」

「のんだ」

ムイトに襟首をつかまれ持ち上げられた、足が浮いて息苦しい

「お前、自暴自棄になってんじゃねえぞ！いつとくけどな、お前だ  
けじゃない、もしものことになればこの世界も崩壊するんだぞ！」

今の状態ピッタリの赤色が目に移った。

「いめん」

素直に謝る

「おいしそうだったから」

きやー

ムイトに窓から投げ飛ばされました。  
女の子なのに〜



## 飛んだ太郎くん

「ユイ、どうだ」

マルクムがコップに冷たい水を入れて持ってきた、若葉雪衣……珠を飲み込んで一日後……高熱発生  
ただいまダウン中

「……食あたりかな」

「聖なるものを飲み込むほうがおかしいんだ！」

ムイトも居たらしく、説教と垂れてきた。太郎君を出して聞こえな  
いふり。

「昨日から気になっていたんだが」

ひょい、と太郎君をムイトに奪われる。

「この珍獣はなんだ？」

「亀かな」

断定はできないけどね

「……不細工だな」

「ムイトの顔そっくりでしょ」

太郎君を顔面に向けて投げつけられた、本気で怒らなくてもいいの  
に。

「ムイト、ユイを苛めるな……一応病人なのだから」  
「えっと、一応じゃなくて、病人」

外ががやがやと騒がしい。外を見ると……金色に輝くドラゴンの群れがこちらに向かってやってきていた。わぁードラゴンのわりには中型犬サイズだなぁとユイは横になりつつ思った。

「ファブニール」

「アレの名前？何しに来たのかな」

「お前に会いにだろう」

「え？照れるゝ違うかゝ睨むなよぉ」

ムイトが白けた顔をしてこっちをみた。アタシのことそんなに嫌いかよぉ

「あれはお前を見極めにきたんだ」

マルクムがムイトのかわりに説明した。

「何を？」

「その力を持つにふさわしいか」

「力持ってないけど」

「なら食い殺されるだけだ」

なんということでしょう、なにやら話がどんどん強制的にこの世界の最強になりなさいといっている。  
あたしは大変だ。

「明日にしてって言うてもだめかな」

「自分で言ってみたらドウだ？来たぞ」

窓から傍らに金色のドラゴンを連れ、全身真っ白のローヴに包まれ、無駄に輝いた金髪、性別不明の子どもがやって来た、そしてこちらをジロジロ見るなり、溜息ついた。

『貧相』

「すみませんね、ところでそのキラキラどうにかありません？目が物凄く痛いんです」

今は朝だよ、倍増しだよ

『お前はハゲに今すぐ髪を生やせと言えるのか？』

「申し訳ありませんでした！！」

子どもは詰まらなさそうにあくびをすると、ドラゴンが子どもを睨んだ。

『我はファブニールの長ルートそしてコレがアマル＝タイア』

「えっと？ドラゴンがルート？でしゃべってるのが……」

『我は人語を話せないゆえ、こやつに翻訳してもらっているのだ。』

そここのところ間違える出ないぞ』

まぎわらしい

「で？見極めにきたんですか？」

『ああ、珠はもう取り込んだようだな……拒絶反応は無いようだな』

「飲むものだったの？」

二人（？）が黙った。

『……飲んだのか？』

飲みましたよ？

『なかなか器量の具わった娘だな！直に飲み込んで拒絶反応が無く  
てよかったな』

「あつたら何かあつたの？」

『内臓どつぱーん』

怖いことをコミカルにしかも簡単に語りますね。

『無いというのなら能力はもう会得できているだろう』  
チカラ

「うん、なんとなく」

大地から湧き出る噴水の水のように体中に滑らかに流れるものがある。それを感じることもできるし……操ることも容易だ  
今はまだ完全には行き渡っていない気がする  
そのための高熱だろう

「本当にお前選ばれた漆黒の者なんだな」

「漆黒シリーズ多いよね……いくつ呼び名あるの？」

「地方によつてもさまざまだ」

「……なんか、なんだろう……うん、なんなんだろう」

漆黒って意外と親しまれてるのかな？

『予言で詠まれているからな、人間どもの間では伝承もあるようだ  
な』

「伝承、へー英雄とかもあるかな」

「英雄視されてるのは、『マヤ族』と『ヴィルエールフ北帝国』ぐらいだろっ」

「そのほかは？」

「悪者だな」

今思ったけどマルクムとムイトって物知りだなあ、おじいちゃん話についていけずにコップ持ったままうたた寝し始めちゃったよ。重要だから起きて〜

「それも仕方ないだろう」

ムイトは当然だと腕を組んだ

「その心は？」

「何だそれは？」

知らないの？掛け言葉だよ……意味はないけどさ

『その話は興味ない』

ドラゴンさんよ、アタシにとっては命にかかわる重要内容なのだよ

『お前は神々に認められた』

「ほんとかいな」

『黄金の林檎を授けよう、コレはおまえの助けになるだろうから喰うなよ』

「え？」

開けていた口を閉じる

「腐る前に食べよっかなって……見た目アレだけど」  
『アレって言うな、すっかり食い意地張ってるな、腐ったりしねえよ神の林檎だから』

その例えって料理初めて作った父親がスゴい方法で料理してるのを見て心配した家族が、それ大丈夫なの？ってきいたら、おう！俺が作ったやつは何でも美味いぞ！って言う並に心配  
今まで作ったことないだろう！みたいなレベルでしょうかね

「まあ、貰えるならなんでも」

太郎君の中に林檎を入れる

『それから我に聞きたいことがあったときにはこの林檎の葉を吹いて呼ぶといい』

「草笛くさぶえ無理なんですけど」  
『知るか』

あげた人にその答えは酷くないですか、あたしは万能じゃないのに！これオート？吹いたら吹ける？ねえねえ

『ではな』

無視かーい、まあいいけど

太郎君の中に林檎の葉を入れる。ヤッパリ金色に輝いているのね

『……………』  
「どうしました？ふあ……………なんとか」  
『ルートでいい、ただ……………』

太郎君凝視

『それに入れられるのって……なんか不快』

「どうして!？」

「むしろなんでお前はそれを受け入れられるんだ!？」

ムイトに逆に怒られた。なんで?なんでなんで?むしろ聞きたいぐらいだよ!確かに不細工だけどさあ!!そこまで嫌われなくとも!あ、そっか

「ムイト、アレだね」

「?」

「ドウゾクケンオ同族嫌悪って奴だね」

無言で太郎君を奪い去られ、窓の外の大空に向かって思いっきり太郎君を投げ捨てられました。

「タロオおおくううううん!!??」

こうして彼は鳥になったでした。

## 小さな光

何かが見える

それは、小さな光

小さい小さい光

とてもとても小さな小さな光

ひとつ、またひとつ

沢山輝いてそこに浮いている

それはそれは小さな光

小さいけれども美しい

だけど

小さいから消えていく

薄っすらと、しかし確実に

それは輝きを失い

知らず知らず消え去った

誰一人気がつくことなくソレは消え去った……。

「逝かないで!!」

伸ばした手の先を除けば木でできた屋根が見えた。

「……………ん？」

伸ばした手をそのままにして横を除いた



マルクムとムイトが背中を預けあう形で眠っていた。器用な……

「んん？」

オデコには温くなったタオルがあった。

「……あ〜とあつた居た居た、太郎君」

太郎君ははるか遠くに置かれていた、あと何故か箱の中に入っていた

「あ〜〜〜手があああああああ」

伸びればあ〜太郎君を取れたのに！太郎君、君が遠いよ……っふ

「……こい！」

体に流れるチカラを發揮してみた

太郎君が飛んできた

「ぶっつ！？」

掴みそこねて太郎君とちゅーしちゃった。ファーストキスは太郎君か、ははん

太郎君をつかんでごろごろ右へ左へ転がる

あ〜落ち着く〜

ええわあ〜

太郎君はいいわ〜落ち着く〜

「はあ〜〜あ」

「じろじろじろ、じろじろ、じろじろ、じろじろん

「いいわあ〜」

「ええい！気持悪い！！止める！」

「ごん！」

「あう！？」

転がる音で起きたムイトに殴られた、酷いまだまだ病人なのに、なんとという鬼！

「痛いよ！」

「気持悪いんだよ！お前その人形に憑かれてるんじゃないのか！？」

「ムイト……素だろ」

「お前が言うなよ！」

「そうそう、素」

「お前も認めるな！変人ということだぞ?!」

からら……

ムイトともめていたら横戸式の扉を開く音がした。見ればマヤ族のお子様たち

「ユイ様だいじょぶ？」

「これ、みんなで摘んできたの」

彩り鮮やかのお花たち

気になるのは全部もこもこの不思議な花びらの花だということだが、まあみみっちいことだから突っ込むのはよそう。

「ありがとう、皆」

「いいえ、だって……ねえ？」

「うん、私達が悪いから」

「なにが？」

子どもたちが見合った

「私達が池ポチャさせちゃったから」

マルクムのふいた笑いが聞こえた。

「え、っと……あははは」

「なんのことだ？」

そういえば落ちましたねアタシ

「わたしたち、体が弱いユイ様のために作ったの！」

ジャーン、という感じで見せてくれた物が、美の女神アフロディ  
ーゼも照れそうなくらい、なんとというかピュアな下着……？

「もこもこ花の花粉で作った下着なの」

「風吹くと飛んでいっっちゃうから気をつけてね！」

着れないジャン。それより

「何で下着？」

「なんでって……」

子どもたちが見合う。そして首をかしげた

「なんで？」

知りません

そのころノーナイトラウン

「なるほど」

無機質な白い神殿内に透き通るような声が響く。

「いかなさいましょう、導師」

「『漆黒の毒婦』……ですか、おもしろい」

若いアルトの音程が笑う

「呼びましょう、彼女が『あの彼女』なら現れるでしょう」

「毒婦を聖なるこの神殿に呼ぶのですか?!」

年老いた声や若い声が響く

「いけませんか」

声が止む

「時は来た、変わり目です……我ら人に、栄光あれ」

導師と呼ばれるものがそういえば、彼の後ろで何人もの者が傳かいた。  
その中にはゼシルもいた……。

置いてけぼりの太郎

ぼおー

「おい」

ぼおー

「おい！」

ぼおー

「おおいつつってんだろ！チビ！！」  
「わっ？！」

ムイトに頭つかまれ宙に浮かしていた水を落とした

「お前が水を持ち上げたら村の女が洗濯できないだろうが」  
「あ、ごめんなさい」  
「ユイ」

マルクムが頭をおくように撫でた、コレけっこう好き

「大丈夫か？」

「うん、なにが？」

「亀が池の中で浮いているが」

ぷか〜

「太郎君!？」

急いで太郎君を手元に取り。イヤア、能力って便利だなあ

「ユイさまが来てから暮らしが楽になったわね」

「マキも果物も森に入らずに取って来て下さるしな」

何でも屋みたいなあ・た・し

「お前は、こんな風に利用されてていいのかよ」

「え〜?でもさ利用されてても人の役に立っつていいなって」

にこ、つと微笑めば何も言わなくなるムイト

ユイを利用することによって暮らしが楽だということには否定できないからだ。

ようするに自己嫌悪から逃れたいための確認だ

「…………お前つてさ」

「ん?」

「いっつも笑ってるよな」

『まるでピエロみたいね』

「……………」

「あ、悪い…………別に気持悪いとかじゃないぞ?気持悪いんじゃないぞ?変人だもんなお前」

「ねえねえそれってフォローなの?」

「事実だろ?」

何故そんな自信满满……しかも何故みんな頷く？  
一緒に笑いながらうつすらと目を細める。

『まるでピエロみたいね』……それはもとの世界の、全く話したことも無い女子学級委員長に言われた何気ない一言だった。

「あら、まだいたの？」

「寝ちゃってたみたい、あはっはっはっはっは！」

学校の教室の夕焼けの綺麗な放課後に初めて会話をした。

本当は家に帰るのが億劫おっくうで寝ているふりをして時間を潰していたんだけど……。

「辛そうね」

どきつとした

知っているのかな？家のこと

「なにが？あゝ首が痛いかもあはは」

「……違うわよ、はあ、ねえ？あなたって」

『まるでピエロみたいね』

「おい？」

「あ？」

首だけ横に向けるといぶかしそうな顔をしたムイトと面白そうに満



開の笑顔を咲かせた子どもたちが、人の顔に興味津々で覗き込んで  
きていた

「なにかな？」

「お前……………大丈夫か？」

「何が？」

「なにがって……………」

ん？なんか胸元冷たいな……………あれ？

「入水自殺でもする気か？」

気がついたら池の中

たらこの歌並みに不思議だなあ

「いいからとつとあがって

」

オイデ

「  
」

ばしゃつ波の波紋が大きく広がっていく

「む、ムイトがオイデっていったあ？！キツザ」

「オイデなんていうかよ！こいつつたんだよ！馬鹿たれが！」

「ユイ、ほら」

二人が優しく手を伸ばした

ああ、懐かしいな

「ありがとう …… いたっ!？」

オイデ、キコエテイルダロウ？オイデ……

ユイの体が白い光に包まれる。自身から発した光に溶けるようにその輝きはどんどん増していく。

「おい！」

「ゆい」

二人に手を掴まれた感覚がある。でもこの能力を抑えることができない……  
なにかに……引っ張られる

「おかーさん」

子どもたちが池を指差す

「ユイ様居なくなっちゃった」

残るのは波紋だけ……

「あ、でもほら」

残ったのは

「タロウ浮いてるよ。」

まさかの置いてけぼりの太郎であった……。

## 怒りのズツキ

外装はまるでお城のように、中はシャンデリアがいくつもついていて、床はまるで宝石で作られたのかのように透き通った床、そして、美しさに比例したこの冷たさ……

「気持悪い」

なんだろう、この……二日酔いのような……胃液全部吐き出しそうだ

「すみません、むりやり呼び出してしまいました」

「？」

動かない体にむりやり鞭うって立てるうかとも思ったが、そんな気力も無く

何とか顔だけ上げた

「……だれ？」

まるでプリンス

薄い茶色の長髪をきつちりと後ろにくくり、服装はなにやら正装で威厳あるし、つねに悠然と笑顔で気品に溢れている……

しかし、一見優しそうに見えるその微笑の裏側が何故か恐ろしい

「ストネット＝アルバージンといいます。久振りですね」

「はい？」

ひさしぶり？

「覚えていないのも無理は無い」

高そうな上等の靴が目の前で止まった。彼はしゃがみこむとユイの顎をつかんで持ち上げた。

（あ、さっきまでの体勢も辛かったのに顎持ち上げられたら息できないんですけど？）

「辛そうですね、貴方にその能力は重過ぎましたか？」

（いやいや、あなたの手ですから）

とりあえず離せよ

苦しそうに苦々しい顔をしていたユイを見て満足したのか、やっと手を離してくれた。でも、いきなり離すから顎うつちやっただじやないか

なんかアタシ痛いばっかだなあ  
だれか休みくれ

「あ、そういえばあの二人」

一緒に来たはず

「蛮族ならそれ相当にふさわしいところに閉じ込めてありますよ」  
「……あんだ、嫌い」

傲慢で残酷な男

睨みあげるとおかしそうに笑った

「昔は好きとおっしゃってくれたのに、女というものは本当心変わ



ふはは、アリのようだ

「この女め」

剣を抜く

やべ、ご臨終？

「お待ちください」

「邪魔をするか！？」

目の前に現れたのは、ゼシル君。

「毒婦を殺せるのはそれ相当の聖なるお方でなくては、我らが手をかければ穢れ死んでしまいます」

「あたしは穢れかーい」

「導師様、これを殺すのはその聖なる者がそろってからのほうがよろしいと思いませんか」

「無視かーい」

顎を押さえたままの導師は微笑んだ、そのポーズはカッコよくないね、いい様だ

「しかしゼシルヴァン、聖なる騎士は今も戦場に居て、戻ることはできない。彼が戻るまでに誰が漆黒の毒婦を見張ると？」

「聖女殿です、聖女エイル＝ブリュンダル」

その場がシィンっとなった。

「誰？」

「彼女なら度胸も志もあります。まさに適任かと」  
「あ、また無視」

導師が考えるようなしぐさを見せた後、首を横にフツタ。

「彼女は気性が荒すぎる、そしてわがままだ」

みんなで頷いた。よほどなんだなあ

「押し付けたところで彼女が承諾するとは思えませんが」

「きつと、承諾すると思います」

「導師、そういえばゼシルヴァンと聖女は昔なじみだと聞きました。信用してもよろしいかと」

中年の濃い赤茶の髪をオールバックに整えているダンディがそういうと、導師も頷いた。

「そうですね、ではそのように計らいなさい」

「はっっ！」

みんなが頭を下げる中一人見上げる

「ストネット……なんとか！」

「貴様導師の名を呼び捨てに!!!」

「良い、アルバージンですが何か？」

「何故あたしを呼んだの？」

ふと、物寂しげな表情を一瞬だけ垣間見せた。

「？」



にっこりと微笑んだ。

「世界の破壊者をほっとくわけには行きませんから、では最後の死刑日に会いましょう」

それだけ言うと歩いていった。

昔あったって聞いてケド……うーん、全く記憶ないなあ

「……ユイさん」

顔を上げるとゼシルと庇ってくれたダンディさんが居た。

「すみません」

「なにが？」

「世界のために貴方を助けるわけには行かないんだ、分かってください」

「いやいや、分かりたくないから、死にたくないからね？あだし」

くっ、て感じに顔を横に向けるなコラ、コツチ見る

「達者で！」

「いやいや、達者じゃないから！？死んじゃうからね！？おいコラ！泣き虫待ててばあー！」

あいつ、猿芝居して消えていきやがった。今度会ったらスト……なんとか導師みたいにずっきくらわせてやる。

「すまない、毒婦」

あ、まだいたのダンディ

「あれを変えたのは、俺かもしれん」

ん？何の話？

「分かってやってくれ」

いや、だから何を？

「それでは」

あ、言いたいことだけ言って歩いていきやがった、アタシドウすれ  
ばいいのかな？  
動けないんですけどねえ？

「ねえ、太郎く……」

ん？

「ああああああ

あああああ！……！……！」

太郎君忘れたアアアアアアアア  
いやあああああああああ！？

！……！！……！！

「太郎君

！？」

やばい、死んじゃうよあたし？！

「太郎君カモオ　　ン!？」

神殿の中の信者たち

「あれはなんなんでしょうか？」

「さあ？祝譜でも唱えているのでしょうか？」

「恐ろしい……」

勘違い

いろいろ勘違いされてもつと人に避けられているユイであった。

「昔むかし浦島は助けた亀に連れられて」

そして壊れた

「ふふんふふふ、ふふふふ」

そして歌詞がもうわからないらしい。

「亀欲しい」

最後に本音が出た。

## 太郎くんと子ども巫女

マヤ族の村のゾッチャーという名の村長の家の最奥の部屋で、小さな少女が太郎君を抱えて部屋の中心に鎮座していた。

「サアヤ、見つかったかの」

「……見つけました、捕まっています。」

「マルクムとヘイムは」

「牢に……」

サアヤと呼ばれる少女はゆっくりと瞑っていた目を開けた。

「……ノーナイトラウン、貴族町の教会……あそこ、嫌いです」

「なにかあるのじゃな」

「うん、強い力を感じる」

とても、大きな力

「それに比べ、彼らの力……衰えていつてるです」

人形を強く抱きしめ、ただでさえ不細工人形が見るも無残な様子になった。

そして彼女は祈った。彼女のために……

「ユイさま、大丈夫かな？」

そのころ、噂のユイ様

「城下町『貴族街』って、ふざけてるねこの看板」

ねえ？って話しかけても無視。ゼシル君って勝手だよねえ

「……………はあっ」

周りには少人数ながらごつい顔をした騎士の皆様ががちりガードして逃げられないようにしている。手枷も首かせもされているか弱い少女が、逃げ出せるわけ無いのに、何を怯えているんだか……………笑っちゃうね、あっはっは、てか笑ってやれ、あっはっは

「何をにやけている！……………不気味な奴」

「最後にげ小さい声で酷いこといいやがったな、中年八ゲ隠しバレバレのモーツアルトヘア野郎」

「モーツアルト？……………が何か知らんが禿げだとお！？」

剣を抜いて睨んできた。オオけっこう怖いぞ

「ハーゲン中尉、言動にお気をつけください。騎士の品質を疑われます」

ゼシルがそう簡潔に言い切ると禿げは悔しそうに剣を腰に収めた。

「ハーゲン……………禿げん……………ぷふ！名前負け」

「うぐぐぐ、き、貴様」

「毒婦」

ゼシルに睨まれる。

「あまり調子にのると、痛い目見せますよ」

なんだよう、昨日は分かってくれて勝手に勝手なこと言ってさ、本当勝手な奴

でも、痛い目見たくないので黙ることにした。禿のおじさんに構うのも飽きたしね。

「それをコツチによこしてもらおうか」

上から声がした。

「トリユーー!!」

屋根から飛び降りる際に周りに警戒していたはずの騎士二人を難なく気絶させた。

拍手したいけどできないから口だけで「おおくぱちぱち」って言うてみたけど、うん、馬鹿っぽいアタシ。

「トリユーーテイテス！貴様ア　　！！」

ゼシルが剣を抜いてトリユーーに突っかかってくる。

刃の交わる音が何度も何度も……目の前で耳の中で響き反響し繰り返される。

何の实感も無くそれを見つめている自分が居た。

「……やめて、ねえ」

体のそこから冷えていく気がした。

「やめてよ」

二人は稲妻のように素早い行動を展開しているが、音が追いついていない。

交わる剣の速さと体の動き、それについていけない音とアタシ

「やめて、やめてよ、やめって」

あんなにも、仲良しだったじゃない

またなの？

また……

またアタシのせいで崩壊するの？

「やめてって、ばああ ……!!!!」

アタシだけが不幸になればいいのに、みんなが不幸になること無いのに！

アタシ以外が幸せに

アタシがいけないのに

アタシは

アタシ

「……」

どかばき

「がは!」「いて!?!」

二人を止めに入ったのは、なんと云うか……ぼん!きゅっ!ぼん!  
のセクシー女性  
きつい感じの目が姉御って感じ

「……………誰?」

「初めまして漆黒の少女、私は聖女エイル」ブリュンダル」

今から向かうはずの監視者

「貴女を束縛するものよ」

これは、死刑宣告ですか?



## 我が儘聖女

彼女の家はごく普通の家と何の変わりもなかった。

この家に来るまでの家のほうが何倍も立派で上々なものが多かったような気がするが、あえて口に出さないでいることにした。

「えっと、誰だっけボインさん」

「ユイ、直球過ぎるぞ」

トリユーに頭を押さえつけられた。だってボインしか目に……

「一応聖女のエイル＝ブリュンダルよ」

「なんで一応？」

「こんな性格だから」

彼女は彼女の座っている椅子の後ろに飾ってある、ドラゴンの肩翼を親指で指した。

「まさか一人で？」

「いいえ、偉大なる騎士ウォーレンと一緒にね」

「誰それ」

「貴女を殺す方ですよ」

ゼシルが素っ気無く言うトリユーが足を机の上に持ち上げて、ゼシルの飲んでいたコップをわざと倒した。

「なあっつっ！……コレだから素行が悪いのは」

「はっはっは、わりいわりい、足癖が悪くてな……下民生まれなも

んで」

氷のような火花が散っているのが見える。昔は男の親友はムゲンナリ〜って仲良かったのになあ

っていつてもアタシと仕事ドッチが好きなのよ！レベルかなあ

……なんか違うな

「二人とも、おやめなさいよ。じゃないと、息の根を止めてやるぞ」

なんともいい笑顔で凄いことを言う聖女様だ。

怖い

「あの〜、アタシ死にたくないんだけどお」

「そりゃそうさ、ははっ」

いや、ははっじゃなくて

「さてと、ねえ、貴女は感じてる？」

「感じていますー！」

「さすがねー！」

「ずっともう気になってました！」

そう、現在進行形で危機的なものをビンビンと、……ちょー今トイ  
レ行きたい。

「そう、なら話は早いわ、今世界は有限廻廊ユウケンカイロウの終焉へと」

「ちょおつと、まったあああああー！！！」

限界だ

こっそり耳打ちする。

「お手洗い、貸して下さい」  
「はぁ？」

捕まっってから一度も人が途絶えなかったから……しかも男の人ばかり傍にいたから、もう言いにくいわ行けないわそんな状況じゃないわ、洩れそうだわで……やばかった。  
じゃー

トイレから帰ってくると険悪だった空気もつと険悪で、聖女さんだけ爽やかに楽しそうに笑っていた。何したんだろう  
トイレ昔式のボットンで怖かったな。下のほうでコオオ！って風吹いてたし。

「ねえ、えーつと、ユイ」  
「なんですか？」

楽しそうにニコニコしている

「今、好きな人とか、彼氏とかいないの？」

あれ？世界規模の話は？

「いまは、フリーですけど？全く関心ないんで」  
「へえ〜」

にたにた、楽しそうににやけている。

ああ、恋愛といえは思い出す。

向こうから告白してきたくせにいざ付き合ってみれば二週間も経たない内に、お姉ちゃんに寝取られちゃったっけ？

心に傷は負わなかったけど、目の前で事後の裸の男女を目撃した中学女子の精神的ダメージは相当だったなあ……トラウマにならないアタシって、やっぱ神経図太い？

「あ、そういえば、マルクムやヘイムたち大丈夫かな」

「男？男の名前？しかも二人？ふふふ〜何々〜？どうゆう関係」

「どうゆうって、恩人かな……」

楽しそうなエイルに比べてリユーとゼシルのテンションは一気に下降していく。かなり殺気が出ていて怖いんですけど？

「そっいえば、助けなきゃ……」

「彼らなら恐らく平気ですよ」

ゼシルは首のネクタイを絞めながら言った。

「『マヤ族』には予言を見ることの出来る巫女がいますから、巫女を怒らせることは教会にとって不利でしかありませんから」

「聖女と巫女って違うの？」

「違うわよ、聖女は『人のために戦い救い栄光をもたらす』巫女は『魔物と共存し神と通じ人に伝える』物、根本的に違うわよ」  
「なるほど」

つまりカレーはカレーでもハヤシとライスの違いですね

「……その顔、多分違うと思うわ」

あれ？

「ところで、世界規模の話は？」

「それより、ユイの事聞かせてよ」  
「ええ？」

世界規模おお！？

「じゃないと、重要なこと教えない」

わがまま！？

聖女がそれでいいのか？！

そう思つて二人を見ると首を横に三度も振つた。

訳：諦める

諦めることにした。

## 太郎くんと記憶

雨の日だった。

天気予報を信じて持ってきていたはずの傘は、誰かに盗られていた。高校入試も終わったし、制服がくさくさなってもいいかなって思って、雨をやむのも待たず、土砂降りの中を歩いていった。出会ったのは、人形

「・・・・・・・・」

買ったばかりで包装の取れていない状態で、捨てられていた新品のお人形。

ゴミの中に埋もれていた。

そこで

「運命の出会いを果たしたのです……」

「あのさ、あなたのこと聞きたいとは思ったけど……ソレハいらなかつたわ」

え？

「コレが一番美しい出会いなのに」

三人はいやいやと、手をふった。

「なあ、ユイ外に散歩に出ないか？」

「逃げる気ですか？」

「誰から、だ？」

睨み合う二人の若者、どうしようかとエイルを見れば楽しそうに微笑んでいた。コップ片手に行ってきたら？とウィンクしてくれたので、行くことにした。

聖女様の家に近くは木々が沢山植えられていて、ぱっとみ清々しい。今日は天気も良くて……

「眠たい……」

「よし、ユイ」

トリユウが楽しそうに雪衣の手を握った。

「うん？」

「逃げるぞ！」

はい？

「え、さっき逃げるとか何とかの会話……してなかった？」

「逃げるって誰からだ？って聞いただけでこっから消えないとはいってないぜ？」

屁理屈だらうケド、笑ってしまった。

「そうだね、アタシも死にたくないし」

「行こうぜ」

握られた手に導かれるように走り出す。  
懐かしい

思い出す……あのころの記憶

ああ、そうだ

「ねえトリユー」

「なんだ？」

「何処連れて行ってくれるの？」

彼はあのときのように優しく微笑んだ。

「楽しいところさ」

そうだったね、そう

貴方は私の初恋の人だったわ……

「ごめんね」

太郎君、忘れたわけじゃないの、今だけ少し余韻に浸らせて恋焦がれた記憶に、縋り付くのも悪くない。



## お茶目

「トリユウ」

繋いだままの手を見ながら相手の名前を呼ぶ、聖女様の家を出てからもうだいぶ経った。

「ルニソーラの店さ」

「誰それ？」

「変な店だな、こうして心の中で呼びかけないと、現れないんだ…  
…今回は機嫌でも悪いらしい」

それでさっきからずっと行先も言わずに歩き回っていたのかと納得

「座ろうか」

横に倒れた木に座る。

「……ルニソーラってどんな人？」

「うーん、大抵ジジイの姿だけど、実際はどんななのか、誰もしらねえな」

「へへ、見てみたいかも」

「気さくなじっちゃんだけ？ま、人を実験台に使うのは悪い癖だけだな」

にかつとトリユウが笑ったのでつられて笑う。

「悪戯も好きだな」

「されたことあるんだ？」

「ああ、あのじっちゃん、変装が得意でなく、前はカーテンになってたぜ」

「それはもう、変装とかそういうレベルではない気が……」

変化じゃないの？

「変なものになって、困ったことになってたりもするぜ」

「へ〜例えば？」

「例えば……」

うーんうーん

「……なんか聞こえない？」

「どこからだ？……この下か！？」

二人で立ち上がって座っていた木を見た。

一瞬白い煙が上がると、そこに長い白い顎鬚あごひげと長髪のおじいちゃんが倒れていた。

「座るもんに化けたら戻りにくいぞって言っただろ」

「じゃって、チューせんかなって」

「スルかつ」

トリユーが倒れたままのじっちゃん、ルニソーラを持ち上げて座りなおさせた。彼がお茶目なルニソーラらしい

「ワシガルニソーラ＝マッグル」

「雪衣です、若草雪衣」

「そうかい、で？何がお望みじゃ？移動か？物か？金か？わしか？」

「じつちゃんなんてイラねえよ」  
「いたいけな爺になんてこと」

腕をくつつけて上半身を振って可愛らしさをアピールしているらしいが、正直微妙だった。

「移動させてくれ、中層町『スリーライトタウン』の『何でも屋アリア』に」

「あ、さきに『マヤ族』の村に行きたい、いけますか？」  
「金さえクレリゃあいくらでも何処でも」

なんかリアルだあ

「俺が払うよ」

「ありがとう」

「小遣い遅れ」

「嫌だよ！」

ホントにちゃっかりしたおじいちゃんだなあ

出していた手を戻すと着物のような服の袖からタクトを取り出した。

「ひよい」

それを振ると足場が光った。目の前が真っ白になった……

「あ、場所間違えてしまった」

最後にルニソールのかかなり不安な発言が聞こえた気がした……  
大丈夫かな……？

って思っていたら、まるで船に乗っていたら大波来て耐え切れず転

覆ってしまったときのような、側転したときのような……ええと、つまり

横に衝撃が来て、アタシたちは倒れた。

……なぜ？

## リュックに太郎くん

ルニソーラの不安な発言で行き着いた場所は

「……………死の樹海？」

朝なのに真っ暗でしっとり湿気しっけている上に、たくさんたくさんの木々が高く多く茂っている。

何より気になるのはその高い木の枝にところでどころ紐が垂れていることだ。

「ツル……………じゃないよね」

「縄、だな」

「じゃのう」

トリユーはルニソーラの首根っこを掴んだ

「『じゃのう』じゃねーだろ、ここどこだよ」

「そうさねえ、見たこともない場所じゃの」

全く保障のない移動職人だった。

本人は全く悪気を感じていないのか先ほどから飄々（ひょうひょう）と悠長に構えている。

こちらら気が気でないというのに

「あ、今なんか生き物の気配が！」

しかしそういいながら後ろをふり向けば、誰も居なかった。草が動

く気配すらない。

「気のせいだったみたい……ありゃ？」

周りを見渡す。なんだかさつきより自然が近いような気がする。  
いや、それ以前に

「トリュー？ルニソーラさん？」

二人も姿を消していた。  
もしかして、アタシだけハブリ？

「……違うか、ルニソーラさんはともかくトリューはそんな子ど  
もじみたことしないもんね」

たまに意地悪だけど

「……」

森は静かで、樹海は生き物の気配を全く感じない。まさしく静寂の  
空間

何処と無く寂しい

がさがさ！

「おわっひゃあ!？」

いきなり沈黙が破られビックリしすぎて変な声をあげてしまった。  
草むらから犬耳のついた人間が現れた

「ん？あ！人間だ」

「な〜んだ、よかつた〜人かあ〜……………獣耳？」

そのぴくぴく動く耳に反応する。

もふつもふ…………茶色の三角形耳…………御尻部分からはみ出た長くもふつもふとした毛皮…………という尻尾

これは正しく、…………獣っ子？

「えつと、萌〜？」

「燃え！？火？！どこ？！消さなきゃ！！」

尻尾がぴんつと空をさした、耳もぴくぴくと微妙に動く

「そこまで過剰反応されると、悲しいかも」

しかも意味違います。

がさー！！

「『エリフ族』めこの野郎……………！！」

「わあああああ！？『ゴブロ族』……………！！」

「『エリフ』『ゴブロ』って何……………？！」

メンスというさつきちよだけとげとげのハンマーのようなものを振り回してきた。

当たれば当然の如く、骨は粉々だろう

「危ない！！」

能力で『ゴブロ』を見えない力でぶっ飛ばした。  
噂のゴブロ、空の果てまで飛んでいった……

死んでないよ？

「……ああ！乱暴者の『ゴブロ族』をやっつけちゃうなんてすごい  
や！」

ワンワンボーイは嬉しそうに尻尾を振り回した。  
撫でちゃダメですか？

「あれ、ねえワン坊」

「ワン坊？」

君のことだよ、それよりも気になったそれに目が釘付けになる

「あのさ、君の背中に背負っているリュックの中にあるもの、……  
それって」

「これ？」

見たことアル深緑色の甲羅で、不細工な顔の亀らしき人形  
間違いない、この世界では二つとは無いだろう麗しの人形  
それは

「太郎君！？」

こんな所で会えるなんて、君とあたしはまさしく出会わなければなら  
ない運命の齒車の中にいたのね！どんなに離れていてもいずれは  
出会う、そうまさしくすばらしきかな貴方は太郎！！



~~~~~中略~~~~~

……でもどうして……？

「それ、どこで……」

がさささー！！

草むらから何かが飛び出してきた

「わ！？何？」

「この野郎　　！！」

『ゴブラ族』の群れが5・6匹（人？）現れた。ゴブラ族って……

全員はハゲなのね

## 復活空振り

いつもいつもあたしはこんなんばっか……

エリフ族のワンワン坊と一緒に駆け出していく、彼らは威勢こそはいいものの丸っこくて硬そうな図体はやはり重いらしく、ちょっと走れば簡単に撒けた。

「ゴブラ族ってなんなの？」

「姿こそはあれですけど、この世で最も賢い種族です」

背後から声がした。

幼い少女の声、驚いて振り返ると利発そうな着物のような服を着た少女が頼りなさげな木の枝一つだけ持ってこちらにやって来た。

「えっと君みたことあるような〜」

「ええ、遠目でちらっとだけ」

「巫女〜」

ワンワン坊が嬉しそうに少女に飛びついた。

「サアヤといいます、現神人様にお会いでき、光栄です」

とても少女とは見えない完璧な御辞儀をされると、こちらまで畏まってしまう。

あ、そんなことより

「太郎君！」

「ああ、そうですね。テナ返しなさい」

「ん？あい」

返事と一緒に太郎君をリュックから出すと返してくれた、でもそれは巫女のほうに  
何故？

おおい、アタシに返せよ

「あの〜」

「取引しませんか？」

「へ？」

こんな少女からこんな難しい言葉が出るなんて……だれだ！教育法  
間違えてるぞ！ゆとり教育万歳！  
サアヤは微笑んだ。

「現人神様が我ら『マヤ族』に栄光と繁栄をもたらさんことを」  
「つまり……どういうこと？」

分かるように説明プリーズ

「簡単な話です、扉の話は聞きましたでしょう？」  
「え……………うん」

覚えてません

「神がこの世界と別つために地獄の門を開ける、『変革』のために」  
「何で開けるの？変革って？」  
「どのようにして世界が変わるのは知りません。一説によれば神が  
死に眠りにつくために地獄に向かうとか」

つまり、お墓に入ります？

……なんか違うな

「神が死んだとき現れるのが貴方なのです」

マジスか？

「なんで？」

もうわけ分からないのですが？

「ソレハ知りません」

しらののかーい

「一時的な神、貴方は選ぶことができます。この世界の行く末を……」

「アタシすげえ、マツハでスゴイ……凄すぎてトイレ行きたくなくなっちゃった」

「お願いします」

「アタシお願いだからトイレ行かせてください」

最近近いんです

「この世界を人と魔物の共存、和解の世をおつくりください」  
「素晴らしい世界だけど！アタシにそんな力ないと思うよ！？」

自分の身も守れてないしね！

「でないと、こんなもの」

太郎君の顔が横に伸びる

「あああああああ！！暴力反対！！！！」

「人形ジャン」

「犬が言うか！？」

「い！？犬じゃない！テナだよ！」

「いいのですか〜」

「巫女が脅していいのか〜！？」

もともと不細工だった太郎君がもつと不細工に

ああ、ダメだよそんなあ〜

「く、中々硬い……」

「無理に破壊しようとししないで!？」

この世界の女の人って自己中多くない?!しかも地味に残酷じゃないですか!?!どんだけですか!?!まじで!?!酷すぎる

「もう少し猶予ちょうだいよ!アタシ色々忙しいからさ!マルクムとヘイムとかも助け出さなきゃいけないしさ!」

さっきまで若干忘れてたけどさ!

「……分かりました。脅すなんてダメですよね」

「そうそう」

「でも、保険にコレは預かっています」

「ヒド!太郎君居ないと安心できないのに!?!」

ないと落ち着いて物事を判断できないのに、落ち着かないのに、

「……そこまで、顔を真っ青にして体中プルプルと震えるなら、返す」

気持悪かったようだ。

「はああうああああ、太郎君や」

会いたかったぜ

「いずれ答えを持って帰ってくると、誓ってください」

「ついでにマルクムやヘイムも連れてこいよ」

「ワンワンのクセに態度でかいな！」

「テナだって！！」

サアヤが物凄く心配そうにこちらを見上げているので微笑んだ。

その心細く不安な気持は、分かるよ、だから

「ちゃんと、またココに戻ってくるよ……多分」

言い切れなかったあたしを許してください

「やっぱり人形を」

「よっしゃああああああ！救出しにいこおおおおお！……」

太郎君パワーで暴走しながら先のことも考えずに走り出した。

森の中勢いだけで駆け回る

その後、彼女の空振りの気合は彼女が崖から落ちたことで落ち着いたのであった……。

「あちゃー」

## 復活空振り（後書き）

これから四日間ぐらい更新できません。また五日後に更新をお楽しみください。

またお気に入り件数がなんと10件もあるということ、かなりありがたく嬉しく思っています。これからもどうか拝読ください！^

^



## 太郎君と悶絶

崖から落ちた上に足をくじきました。

地味に放心していると、しばらくして……詳しく言うなら六分後十五分二十秒ぐらい……ちなみに誤差はあると思う。だって適当だもん。じゃあ言うなよ？……自分突っ込みいたい子

……なんだっけ？

「おおーい、ユイ大丈夫か？」

「え？何が？頭が？」

向こうが心底哀れんだ顔を見せた。冗談だったのに真剣に受け止められても

「足をちよつと挫いたみたい、でも大丈夫！」

「ちよつと待つてる」

そういうとトリユーは滑らかな動きで全くブレずに滑り降りてきた。まるで王子様みたい……うっわ、自分ひくわあ

「ホラ」

近くまで来ると手を差し伸べた。

シツカリとした男の人の手、アタシなんかとは全く違う……

「ありがとう」

その手をとって立ち上がる。と、同時に太郎君を落としてしまった。

「あつと、あ、わわわ!？」

「つと、大丈夫か？」

「わっ!えああ?うん、あ、りがとう……でもさ」

「ん?」

トリューは愉快そうに小さく笑った、バランスを崩して倒れそうになったユイをトリューが支えてくれたのまでは良かったが……近い。

「そうか？」

抱きしめられるチカラが強くなる、近い、近い近い近い

「も、いいから」

「何が？」

分かってるくせに  
セクハラで訴えてしまおうか。コノ世界に裁判所とセクハラってのがあるのか知らないけど

「いい加減に」

「おうおう若いっていいのう、じゃがちとワシ寂しいぞ?」

ルニソーラが頬を淡く赤色に染めながら茶化する。この人空気読めならしい、いやでもある意味助かった。やっとトリューが離してくれた。

「ほい」

ついでに太郎君も拾ってください……ありがとう

「アリガト」

「いえいえ……さて、と」

足が地面から離れた。

「……ん？」

これは、俗に言う……『お姫様抱っこ』という奴ですか？この歳で？いやあ歳は関係ないかな？  
とりあえず

「照れるううう……！……！やめて下ろして離して！恥ずかしいって本気で」

本気と書いて本気マジだってば！

「はっはっは」

トリユーは楽しそうだ。

「このドS ……！！！」

太郎君の首を絞めながら大声でそう叫んだら、ルニソーラは楽しそうに笑った。

「行先はどこかの？」

空気読めてないよお爺ちゃああああん……！！



## 太郎君と悶絶（後書き）

ただいまです。楽しみに待っていてくださった方、そうでない方も、ただいまです。はい。更新また復活します。

一日おきは難しいかもしれませんが、できるだけコレは早く更新させていきたいと思います。

## 黄金の葉で草笛

太郎君と再会を果たし、トリユーたちとも再び合流、次なる行動は

「マルクムとヘイムを助けたいの」

「アンタ不運なんだから止めときなさいな」

久振りです。アンブロシア店

今日は臨時でお休み

いやあ、帰ってきたとたん殴られるとは思わなかったなあ……

「ネーネ心配したよお！ね？クロ」

「うん」

「アリガト、クロクナ」

「ネーネ今まで何処居たの？」

「方々（ホーボー）」

うん、本当に色々な所に行った気がする。そしていろんな人とであつたなあ……いいことは何一つ無かつたけどさ

「ルニソーラ、教団本部の牢屋に侵入できるか？」

「無理」

あつさり否定する、期待を裏切るの早いこと

「ワシ如きでは牢屋ステレットワーフに直行瞬間移動できるのなら、マヤ族の巫女が一人であるの二人を取り返せるじゃろつて」

「たまに思う、この世界ファンタジー」

「あ、だったらさ」

別に突っ込んで欲しくはないけどさ、あたしの言葉を無視しないで欲しいな

クナは「ちよつと待っててね」と言った後二階へと走り出した、少しして大きな本を持って駆け戻って来た。

「なんて本？」

文字、全く読めません。英語？

「『オレのメモリー』」

「うん、返してきなさい」

「ええ?!なんで?」

「なんか読んでは気がして……」

オレのメモリーって、小学生が日記の題名タイトルに決めそうな単純な名前だなあ

「役に立つの?」

「わかんない」

わかんないの〜そ〜なの〜ダメじゃね〜?

「え〜つとねえ?」困ったときは『30P……』

なんかイラストいっぱい書いてるな、なんだろうこのグロ絵……リアルじゃないだけまだましかけど、これ子どもに見せるべき絵じゃないよね、髪の毛長い人が老人の片目抉ってるよ

「あつた、『困ったときは暴れましょう』だつて！」

「クロクナ、もう寝な」

母から遠まわしの戦力外通告を受けた二人は、本をもってすぐすぐ帰っていったのであつた……てかクロまさかの「うん」しか喋らなかつた……

「そうだね、じゃあコレ使ってみようかな」

黄金の葉

コレで吹くと黄金シリーズの彼らがやってくるはず。

人間よりは長生きしているはず、なにか知恵を授けてもらおうなにそれ？ 的な顔をしてるけど説明するのが面倒なので後回し、太郎君の背中から黄金の葉を出した。

「よし！」

ぶひー！

……… やっぱ草笛なんて無理だつたんだよ、しかも空音ならまだやり直してできるけど、ぶひって

ぶひって恥ずかしいよ、しかも音大きいし、何事みたいな顔してたみんなが停止しちゃったよ、どうしようこの空気

「……………」



ぶふ！

……もう一度吹いてみた。

変化は無かった。

## 太郎さんとマリオ

酷い話もあったもんじゃない。

「……………草笛ってこんなにも変な音が出るんだ」  
『違っわ！お前がへたなだけだ』

事実だけどそんな必至になるほど拒絶しなくなっただっていいんじゃないんですか？

「えっと、ドラちゃん」  
『ルートでいい、つつかそれ以外の呼び名やめろ』

相変わらずキラキラキラキラキラ……うぜ

「いたあああい！？」

このドラゴン……飛んできた！？

『この……………根暗がああああああああ！…！』

渾身の力で叫ぶ悪口

「うわヒド！！なんでそんな悪口あつちんぐちん雑言ざつげん言われなきゃなんないの！？  
たかが金色のトカゲのクセに！」

いつもは表情を一転も変えない子どもが、このときだけ鼻で短く笑った。

『笑うな！アマル！タイア』

「もう無表情だけどね」

もう一度飛び蹴りされた。短い足だからある意味体当たりかな

「おーい、話が見えないんだが」

トリューがやつと正気に戻り話しかけてきたおかげで口論は殴り合  
いには発展しなかった。にしても仮にも長が女の子に噛み付くなん  
てありえないよね〜

「ね、太郎君」

……が居ない

「太郎君が居ないいい！？」

「叫ぶんじゃないよ、そんぐらいで」

「おばさんは分かってないなあ、大事なんだよアレ！？太郎君！！  
……はっ！！！」

恐ろしのマリミア降臨

「このまま黙らされると黙るんどっちがいい？」

「黙ります、はい」

でも目では太郎君を探す、最近太郎君攫われる率高くない？大事な  
ものだから？あたしの大事なものってどうして消えていくの？どう  
してアタシの手は空っぽなの？

「ユイ」

トリユーが腕をつかんだ

「動くな、ホラ」

太郎君が出てきた

「どこにあつたの?!」

「お前の髪の毛に絡まってたぞ……重くなかったのか?」

まったく分かりませんでした。

「太郎君」

抱きつく、温もりは無い、力強く抱きしめても、その抱擁が帰ってくることはない。

それでもいい、君が居ればあたしはまだ

『で、なんか用か?』

コイツも空気読めないな

「……ストネットにつかまったマルクムとムイトを助けたいんだけど、なんか方法ないかな」

『突っ込んでこいよ』

ドラゴンの頭にアンブロシアの机をたたきつけた。

浮上していたルートはもろヒットして大地にひれ伏した。というか落とした。

「アタシ真剣に悩んでいるんだけど？捕まったら殺されるし約束は守らないとだし」

『サアヤか……アレも不憫だな、仲間の心配よりもまず優先すべきものがある』

「優先？」

『お前も人間にかまう前に優先すべきものがあるだろう』

首をかしげる。

「太郎君？」

『が、どうした』

違うのか

「どうゆう意味？」

『お前はただコノセカイに来て、ただチカラを手に入れ、ただ忌み嫌われるだけに来たのか？』

「それはユイが選ばれたのに、意味があるってことが」

トリユウの言葉にルートは頷いた。あたしが来れた理由？

『お前は、神を殺すためにココに来たのだ』

はい？

『この世の創造主であり、基礎であり、支配者であり、敬愛すべき神から生まれた我々に、神を殺すことは不可能、故に他所ヨソから連れとくるしかつた。それが『漆黒』と呼ばれるものの勤め、神の血は『漆黒』らしいぞ』

頭が機能停止して、ルートが何言ってるのか、何を言いたいのか、さっぱり分からない。頭が、脳みそが働かない。あ、なんかお花畑が見えてきたあゝあ、ちようちよゝまっつゝあははゝ

「ちよいと、ユイ！現実逃避しない」

マリミアに頬を三発叩かれて覚醒した。

「なんでアタシが神を殺すの！？」

『お前が選ばれた理由も、誰が選んだかも知らん』

なんて無知なんだ

あう、蹴られた

「なあ、あんた……神を殺すって穏やかじゃねえが、神に『何か』あるのか」

『どっかの馬鹿と違ってお前は話が早いな、その通り。この世界は千年に一度絶滅を果たしそのあとまた再生が始まる、それは何処の予言の書にも書かれていることだ』

「はあ、それが？」

『つまり、千年に一度、神が狂い全てを破壊し、正気に戻ってまた人々を産む』

ははあゝ？つまり……無限循環？

△ケルル△

神が千年に一度魔王に変わるってことか？

「それで……アタシが殺さなきゃいけない理由は分かったけど……神様殺しちゃったらなんか大変なんじゃないのかな？」

神さままでこの世界成り立ってるのなら、神消滅とともにこの世界も死ぬんじゃないかなあ？

「それは誰にも分からんことじゃよ、なぜなら千年前の漆黒の者は神を殺しそこねて、元の世界に逃げ帰ったそうじゃからな」

「アタシも帰っていい？」

「『』はあ？『』」

みんなでそんな呆れた声と顔しなくてもいいのに……トリユーだけ何か考えているようで、参加しなかったけど……

「……………っ！」

何かが弾けた……最近良く感じる……この感じ、何かがゆっくりと確実に『消えていく』……

「大丈夫か？ほら、また太郎落としたぞ」

異変に気がついたトリユーはユイを支えた。  
なんだろう、悲しい

「ねえ、ルート」

『ん？』

「アタシは……どうしたらいいの？」

無理なアタシには、どうしたら良いかなんて分からない。何をしたらいいのかさえも分からない。でも、なんだか

「分からないよ」

混乱してる、どこかで冷静に自分を分析しているアタシがいた……。



## 長い名前の意地悪女

気分が悪くなったアタシは部屋に戻る事となった。

そうゆうこともあって、結局あの二人をどう助けるか話が進まないままに終わった。

混乱しているのかな

でも

違う

「なんにも……考えられない」

というより、何も考えていないのほうが正しいのかもしれない。

今の頭の中を色に例えたとしたら『真っ白』

「ねえ太郎君」

アタシは生きているだけで罪人なのかな？

「でも、犯罪したことないんだけどね、あえていうなら小学生にひつつきむし投げたぐらい？」

今思うとしょうもないことしたなアタシ

「ん？」

こんこん

窓からノックの音が聞こえる。

此処二階ですよね？  
いや自分もここから逃亡しましたけどよ

「こわ、居留守使っちゃえ」

黙って身を潜めていると声が聞こえてきた。

「雪衣さん？ども〜吾輩『フェルナンベロベツテ』エクスジエーカ  
ー』アスロテイウス』ナウス』というものですが〜」

「長っ！！??？」

どれが苗字ですか!??

「頭文字だけとって『フェアナ』とお呼びください〜」

「.....」

おもいつきり返事してしまったのであきらめてご対面することにした。

カーテンを開けて窓も開けた

「どちら様??」

中学生一年生ぐらいかな、身長はそこそこ高めで細身、色白で目のくりっとした活発系の顔が特徴的、前髪が長く真ん中で左右に分けていて前髪の先っちょを左右同じようにみつあみでくくっていた。アタシ髪の毛の長さ首までしかないから長い子って羨ましいな。

「『賢者の書』と呼ばれるものです〜、分かりませんよね〜馬鹿ですから」

自分で言うのはいいけど他人に言われるとイラっとくるな

「で、何か用ですか」

「えーと」

目の前で中指と親指がクロスする

「？」

「ズバリ貴方邪魔なので〜お帰り下さい」

ぱきん、そういうと彼女は指を鳴らした

「WHY!？」

気がつくと天井を見上げていた。

「みたことある」

はっていたポスターをはがした後のくっつきりと浮いている汚れの差の分かる天井……………ココ

「あたしの部屋だ」

どうやら帰ってきたらしい。

「マジですか」

ベットから起き上がると小さなプレゼント用の箱があった  
いつのまに、前にはなかったよね？

「うわ、マジすか」

包装を除けて箱を開けたが中身はからっぽ

騙された！！畜生！期待しちゃったじゃんかよ！！

……と

その箱の上に黄色いりぼんのついた可愛いメッセージカードがあった。

『ども、『賢者の書』フェアナです。さつそくですがただ返すというのも味気ないので、実にシンプルな呪をおひとつ貴方にプレゼント』

手に持っていた箱を落とした。

『貴方が何か喋りたくとも貴方が最後に言った言葉しか出ないというくだらない呪いです』

最後に言った言葉？

「……………マジすか」

マジすか

ていうかクダラナイってわかっているならしないでほしいな。そんなオプシオン誰も求めてないし面白くもないからさ

「マジすか……………マジすか！？マジすか」

太郎君って言えないなんてマジすかって言うかこれじゃアタシ

本物の馬鹿みたいじゃん。っていうか病院に行けっレベルだよね  
あぁでも病院では呪いは扱ってないよね？

「まじすか」

なんか、……………楽しくなってきたかも

「マジすか」

ていつか期限いつまでですか？

## 太郎君と話術

お昼になった。

この世界ではどうやらアタシは前いた世界と同じ日数居なくなっていたようだった。

21日間

三週間ピッタリに帰ってきてしまったようだ。なんだろう、元がこの世界なのに落ち着かない

(家出した娘が自立に失敗した出戻りみたいでいやだねえ？太郎君)

太郎君を抱いて1階に行き、リビングの扉を開けた。

(……ただいま)

返事は無い

誰も三週間経っても帰ってきていなかったようだ。三週間前放置していたコップが埃をうっすらとかぶっている。

(ある意味この家の主ってアタシ?)

じゃあローン払わないといけない?

「マジスカ」

あ、そういえばコレもどうにかしないとけないな、どうやって直そう。

「まじすかまじすかまじすかまじすかまじすかまじすか」

とりあえず満足するまでいつてみた。

「まじすかまじすかまじすかまじすか」

疲れた。やめよう

「まじすか」

ヒトリでここにいってもお昼はないし、財布を持って外に買い物に行くことにした。

どうせ今は学校がある時間誰かに会うことは無いだろう。会うとしても奇異な目でしか見てこないオバサンだけだろうし

歩きなれた道に行く

わりかし家から学校は近く、通っている高校が目にはいった。後もう少して卒業だけ……あたし卒業できるのかな、出席日数やばくない？あ、大丈夫か先生もともとアタシの存在忘れてるし誤魔化せればいけるか……

うわ、可哀想だなアタシ

「若葉さん？」

声が出たほうを振り返る。

『まるでピエロみたいね』

「同じ中学だった飛鳥よ、覚えてる？」

(委員長?)

女子学級員長、その名は……なんだっけ

「飛鳥真菜、覚えてないでしょう? 無遅刻無欠席の皆勤さん」  
「まじすか………」

あ

そうだった今、マジスかしかいえないんだった。

「ヤッパリ覚えてなかったのね」

「ま、………」

「いいわよ、別に。私もさつき会うまで忘れてたから」

「マジスか」

それはそれで悲しいよ?

怒っているわけではない逆八の字の眉にやけに似合ったショートヘアに小さいめがね……これぞ才女といった感じの制服に良く似合っている。頭いいところに入ったんだろうな

「あなた今までどうしていた?」

「ま、………」

えへつと笑って誤魔化す

「またその笑顔ね、前から思ってたんだけど貴方って……あら」  
「………(汗)」  
「その人形、何? 大事そうね」  
「ま、………」



コクコクと頷く

「ふうん、まあ人の趣味はそれぞれよね、ところで貴方知ってるの？」

何を？

「貴方のおねえさんヤクザにはいつちやったらしいわよ」  
「マジスカ！」

そりゃビツクリ

「それで、彼……あなたの幼馴染の信生くん？かれ手酷く振られたらしいわよ」

「マジスカ」

信生やっぱり姉ちゃんに弄ばれていただけか……まあ、夢見れて良かったね

つていうかどんどん我が家が崩壊していく、元々だけど、あは！

「まじすか」

「貴方そればかりよね、他に何か思わないの？」

「ま、……」

いい加減何か思ったらしい飛鳥はジーとユイを見つめた。

「ふざけてる？」

太郎君を前に出して誤魔化すように笑った。

「ちょっと来なさい!！」

連行

「ま、マジスか〜!？」

アタシいま超空腹なんですけど!？」

こうしてアタシは彼女の家へと連行されていった。

まじすか〜

## 戦争反対

彼女の家は彼女のように簡潔で必要なものしかありません、という  
感じた、そして彼女の部屋は……意外なことに可愛い小物がいつば  
いだった。

「マジスカ」

「なんでそれしか言わないわけ？それしかいえないの？ねえ？こっ  
ちみる」

先生より怖いよ委員長

「……」

紙とペンがある、少し拝借してこれまでのことを書こうかと思った  
が、リアリストの彼女が信じるだろうか？異世界のことを

『トリップって信じる？』

そう書いて見せたら、彼女はゲームのこと？と信じていないようだ  
った。まあそりゃそうだ

『信じてくれとはいわないけど、一応聞いて（見て）欲しい』

これまでにことを誤字を交えながら書いたら素早く委員長に指摘さ  
れた。後でいいじゃないか

そして全て伝え終わった後会長を見ると、手を出していた

「？」

「実物を出しなさい、その黄金の葉やら林檎やら」

おお、なるほど

太郎君からそれぞれ出す。無駄に輝くそれに彼女は顔を顰めた。

「自作自演という可能性も否定できないけど、貴方がわざわざそうする理由もないし、信じるわ一応」

「マジスカ」

「で、そのふざけた言葉はいつ治るの？」

さあ？

「ここで吹いてみなさいよ、これ」

黄金の葉を出して目の前で突きつけてきた。

「吹いたら来るんでしょ？犬笛のように」

ドラゴンまさかの犬扱い

しかし、来るかどうか試すのも悪くないやろうかと思いき手に取ったが、停止した

「どうしたの？」

『アタシ、草笛ふけないの』

前にブフって言ったし

「大丈夫よ、吹きなさい。てか吹け」

委員長相変わらず強引

息を吸って吹いてみる  
ふふ

「……………」

「……………」

「笑ったの？」

首を横に振る。難しいんだって！

「……………貸してみなさいよ」

委員長挑戦

「マジスカ」

綺麗に演奏しちゃいましたね。彼女はアタシを越えたようです。  
黄金のキラキラが目の前に出現した。  
彼らの後輪だ。

『貴様ああああああ』

殴られた。何故！？

『何逃げ帰ってんだよ』

「マジスカ！？」

あ、今のは逃げ帰ってないよ！？って言いたかったのね



。。。

刃の交じり合う音に僅かに漂う血の匂い、転がる遺体には異臭があり、戦意を喪失して天を見上げて放心しているものも少なくは無く。死んだものを運ぼうと躍起になっている人も居た。見るも無残な光景

アタシのせいで

「……………なんで」

言葉が戻った。この世界に戻って来たからか、それともあまりのショックでなのか

『人間の血は我々聖獣には毒だ』

ルートがこちらを見つめた

『戦争<sup>これ</sup>を止める』

それがアタシの使命なら、アタシにそれができるなら、今すぐにもやりたい。でも拳を強く握り締める。体の中で流れる力を制御できない。このまま力を使えば、彼らは全滅しそうだ。

「できないよ、周波がバラバラなの！このままで使ったら皆死んじやう」

「だったら」

飛鳥に首をつかまれた。

「だったら言葉で止めなさいよ！頭を使いなさい、そんなチカラに頼るんじゃない！」

「！」

そうか、力を使って止めなさい。なんてルールは無い。武力を持って静止させる必要性も重要性も無い。

「わかった！言ってくる」

「言ってくるって、ちよつと！？」

飛鳥は頭を押さえた。

「まさか本当に言ってるつもりじゃないでしょうね！」

『アイツならありえるぞ』

「もう、私までこの世界に来ちゃって混乱してるってーのに！！」

先走った少女を追いかけていく。

「むかしっから人の話をそのまま素直に聞き入れるんだから！……ったく」

『そういえば、お前誰だ？』

「説明は後！」

気丈な少女は漆黒の少女を追いかける。



ホントに叫びまわっている少女を止めるために

「戦争はやーめーまーしょーうー！抗争はーんたーいー！」  
「小学生デモかアイツは」



能力を使って太郎君を飛ばす、太郎君を飛ばして周りの状況を見ようと思っただが、難点を言うなら太郎君の目を通して見る場合には、目を閉じなくてはいけない。しかし

「おおおお~~~~!!安息地は何処オ~~~~!!?」

「それを言うなら安全地　　!!!」

何が違うの？

とにかく今の現状で目を閉じたりしたら、確實何かとぶつかる。

「ん？影？」

目の前に五人ぐらいの兵士いて、その上に大きな影ができた。見ているとズドン!!!と、とつてもとつても大きなドラゴンさんが降りてきたよ

もちろん兵士さん生きていませんよね？

「うわあああああ!?!?下の人おおおおおお!!」

緑色のコケだらけのドラゴンの上には見たことのあるマヤ族の方が操縦していた。こちらを一瞥するとこちらを指差してドラゴンに何かを指示をした。

嫌な予感

「にゃあああああああああ!」

「やっぱり来たああああああああ！どうしようどうしようどうしよう  
しよう逃げよう！どうしよう、横に避ける？右？左？それとも後ろ  
？どどどど、どっちにいい」  
「早く避けなさいよ！！！」

後ろから委員長が突進してきて強く押したおかげで前方にスライデ  
イングをする羽目になった。

「あつっうー！？」

「ほら、逃げるんでしよう？！」

手をつかまれ走り出す、委員長……かっくいー

「男だったら惚れてたかも」

「やめろ」

ドラゴンは空を飛び上がり先回りをしようとしてきた。  
やばい

「つかまる！？」

とっさに委員長を庇うように前へ出ると目の前に見たことのある光  
が現れ、そこから腕が伸びてきた。

「いっ」

聞いた事のある声

腕をつかまされると否応無く引きずり込まれた。

ぐいっ！

「きゃわっ！？」

たどり着いた先はアンブロシアだ、テリトリー少ないなあアタシ

「助けてくれてありがとう、トリユー」

「わしに礼は？」

切なそうにしたルニソーラを無視してトリユーを見れば、明らか不機嫌オーラを放っていた。これはヤバそうだなあゝなんて怒ったような顔したトリユーはユイにつかつかと近寄ると、その白い頬を両手で掴むと、チカラをこめて引っ張った。

「いひやいいひやい！？」

「お前なあー心配ばっかかけて、どんだけコツチがー！」

「ごみえん！だって、痛い！よ、予言の書って子が」

『おう、そのことだな』

ルートが間に割ってはいる。

『そいつが現れてお前を元の世界に返し、争いを起こしたとしたならば、お前は神より先に予言の書を倒す必要がある、こらあくびするなアルマ！』

「結局予言の書って何？」

「クナしってるよ」



クナの悲鳴にビビツタクロは本を落とす。と表紙にとあるページに目が留まり、トリユーが本を取り上げた。

「神は一つにあらざ、幾千にあり、無限に広がる神もおよそ死に消えるときがある」なんか、興味深い一文だな」

「ねえ、そういうのって最後のページに結論を書いているものよ、呼んでみてくれない？」

さすが委員長、異世界きても冷静で上からだ

「殴るわよ」

「え？」

ばれた！

トリユーは素直に最後らへんのページを開いた。とたんに焰が燃え上がった

「っあっつ！！！」

本を落とすとそれがスイッチだったかのように一気に燃え上がり灰と化した。

『貴様が予言の書か』

ルートが睨むように見つめる先には、体を大きな布で巻いただけですか？と聞きたくなるような格好の少女……フルネーム忘れた。の予言の書がいた。

「久振りですね〜あと初めまして〜我輩の名はフェルナンベロベツテⅡエクスジェーカーⅡアスロティウスⅡナウスと言います〜別名『預言の書』」

「ながー!」

皆心が一つになった瞬間だった。

「って、感心してるばいじゃない!何しに来た!」

一応戦闘態勢つばいかなってジ　キー・チェンのようなポーズをしたら、委員長にダサいからやめなさいと言われてしまったので、やめる。

思い出した、略してフェアナだ。

彼女はつまらなさそうに微笑んだ。矛盾した表情だなあ

「我輩が何しに来たか知りたいですか？」

「うん」

素直に聞いたら今度はマリミアに殴られた。

アタシそんなに叩かれてばっかいたら本当に馬鹿になっちゃうよ!?

「我輩、貴方を殺そうと思います」

もろ指差された方向は、もちろんアタシだった

「マジスか？」

ふざけた訳でも呪われたわけでもない、本当の本当、心からのビツ



クリ感情

彼女はいきなり無表情になって手のひらから青白い光を放った。

「!!!!!!」

走馬灯で、太郎君の顔がビククにアップされた。

こんな終わり方……物凄くいやだあああああああ……!!!!

「太郎君!!!!」

あ、でも結局呼ぶのは君の名ね BYユイ

光が体に当たる感触がした。

## 小指のアタシ

光って 熱いものなんだね、知らなかった

「ユイー！」

予言の書は笑った、邪魔な存在を消し去ったから。そこにいたはずの者は、もはやこの世から去った。これで危惧することは何も無い

「貴様あああああああ！！！！」

トリユーが剣を抜き予言の書に襲い掛かる。完璧なる殺意、急所を狙ってくる攻撃に予言の書は怯んだ。

「おやおやく？そんなに彼女が大事なら、盾になればよかったのに」「ぬけぬけと！！！」

予言の書は二歩三歩と後方へと下がると姿を消した。

オマエタチハソコデ オワリヲマツガイイ！！

剣が落ちた音だけが響く。

「嘘でしょ」

飛鳥が床に座り込んだ。目の前でついさっきまで話していた友達が、跡形も無く消えたのだ……信じるといっほつが無駄だ

「ユイー!!」

『くそ、予言の書のやつめ……何のために』

おい

「？」

クロクナが顔を上げた

おい、みんな

「ユイ!? 何処に」

ココ、ココ

『ん? アマル!! タイア何もっているんだ』

永久に喋らないだろうと思われていた子どもが手のひらを開いた。  
そこには小指ほどのサイズしかないユイがいた。

「なんか気がついたらココにいたの」

まるで小指のお姫様の物語そっくりではないですか、あの物語も  
主人公が苦勞していたなあ

「予言の書は一直線の攻撃しかできないの」

だから、とあまるは続けた

「隠すのは簡単だよ」

『そうかお前、星の子だったな』

「なにそれー」

『そんなことより、これでしばらくは安全だな』

まさか生きているとは思うまい

マリミアが倒れた机やイスを直して使えるようにした。

「さあ、安心したところで夕食にしようかね」

「え、アタシの心配終わり？」

「あ、手伝います」

「委員長まで?! 腰抜かしてたのに!」

みんな酷くない?

「ネーねーいつまでちっこいの?」

「さあ」

「手から降りたら良いよ」

ぽい、っとアマルに投げられた。

ごん

ウン、確かに元に戻ったけどさ、かなり強く頭打ったよ。

「ユイ!」

ぐい

「!」

温かいものに抱きしめられた。

「と、トリユール!? 苦しいんだけど」

「馬鹿、アホ、ドジ!」

「めっちゃ言われてますね、あたし」

「心配した……」

小さい声でそんな風に言われたら、アタシも困っちゃおうよ

「ごめんなさい」

心配ばかりかけて、ゴメンナサイ

アタシもしんぱいかけたくないんだけど……ていうか痛い目も死に目もみたくないんだけどね本当は

「ユイ」

「ん？」

オレはお前が

それだけ言うと照れたように彼は歩いていった。

「俺はお前が……何？」

ルニソーラがはあくど首を横にふって消えていった。何やねん

と

同時に美味しそうな匂いが漂ってきた

「ユイ クロクナ〜おりといで〜」

クロクナと手を繋いでユイは歩き出した。

「はい」

アタシには今

皆がいる。

そう思うとにやけずにはいらなかった。

あ、太郎くん忘れてた

## 代償に太郎君

荒れ果てた荒野に兵士は身を守りつつ安息の無い睡眠をとっていた。お互いはなれた位置にはそれぞれの信じる御旗が立てられており、模様も違って主張していた。

白と青を光と象徴とした赤薔薇の軍団。たぶん、教団側だ。

緑色と青色が入り混じるような模様のこの国旗はどこのだらう？マヤ族にこんな騎士たちはいなかったはずだ。

アル陣の中からサアヤが長老と一緒に現れた。

そしてもうヒトリ

赤茶色の禍々しい気配のする隻眼の男

彼から何か嫌なものを感じた。

太郎君、ご苦労様。

「おいで」

手のひらを広げれば何も無かったはずの手のひらの中に太郎君が出現した。

うん、この能力便利。もっと早く気がつけばよかった

「ねーねー」

「おきろー」

クロクナにベットのの上ではなられた。起きてたんですけどー

「おはよう」

階段を降りていくと不機嫌そうな飛鳥がいた。

「委員長不機嫌だね？もしかして……お風呂場で鼻血でした？」

「出すわけ無いでしょ！」

え、じゃああそこを突破したの？さすが委員長……

ふわふわパンを二個とサラダを食べ終えた頃ぐらいにマリミアが皿を片してお茶をかわりに置いた。

お母さんみたい、いやクロクナの母だけど

「クロクナ学校へお行き、分かってるだろうけどこの二人のことい  
うんじゃないよ」

「はい」

「いつてきまーす」

二人……アタシと委員長

「マリミア、トリユーとお爺ちゃんは？」

「なんか調べものって朝方ででつたよ」

「ふーん？あ、ゴメンね巻き込んで」

「何そのついでレベル！」

ばん！と机を叩いた。

どうやら不機嫌の理由はこれらしい



「ゴメンね本当、帰れる保障ないけど」  
「そこは保障しましょうよ嘘でも！」  
「いやあ」

無理かな？

「私今日塾でテストだったのよ!？」

あゝはは、ざまあみる

「何？その微笑」

「あああゝう、いやあゝはは」

首、首絞まっています……ちぬ

「それに、うち親五月蠅いのよ、連絡も無しで……警察呼ばれてないといひんだけど」

「大変だねえ優等生さんは」

「何言ってるのよ」

他人事でごめーんね

「貴女だつてそうでしょ」

「はい？」

なんで？

「はい？……じゃないでしょう、貴女何日ここにいたの？一日や

二日じゃないでしょこれ」

「うん、三週間ぐらい？」

「連絡は？」  
「音信不通」

親が

「……あんだ、それでいいの？」

コロコロ呼び名がかわるなあと心の中だけでのんびり思うユイ  
しかし彼女……委員長の顔が穏やかではなさそうだ。

「あは？」

「笑って誤魔化そうとするんじゃないわよ！親がどれほど心配する  
と思っ……っ！？」

途中で何かに気がついたらしい委員長は苦々しい顔になった。

「こんなこと聞くのって失礼だと思う、でも教えて。いやなら答え  
なくても、いいから」

聞いてくる内容は先に分かった。だから腕の中の太郎君を強く抱き  
しめた。

「家族仲……上手くいってる？」

もちろんだよ。

いつものようにちょっととした笑顔でそういつつもりだった。  
だって同情なんてうっとおしいし、自分が不幸ですなんて主張して  
もそれこそうっとおしいだけじゃない？

「も」

「ほらまた」

頬をつねられた。

「ピエロみたい。辛いのに、隠さなくて良いよ」

笑顔が崩れた。

「あ、はは……隠してないよ？家族仲なんて……もちろん普通だよ」

「本当に？家誰も帰ってないんでしょう？」

「何で知ってるの？」

「町内で噂よ、おじさんは男色に走ってオバサンは実家に帰ってお兄さんは家出お姉さんは裏にいつちゃったって」

おいしい、母はおじ様とランデブーだよ

「……アタシはなんていわれてるのかな？人形の持ったおかしいコ  
？」

太郎君持って普通に学校行ってたから、かなりひかれてただろうなあ。それとも精神異常者？それとも忘れ去られてる？

「ヒトリでずっと家で待ってるって、かわいそうな空っぽの家でたった一人で待ってるんだよって」

「可哀想？」

「私がいっただんじやないのよ？近所のオバサンの話を立ち聞き……じゃなくって、耳に入ったのよ」

「そうなんだ」

アタシって可哀想だったんだ

「知らなかった」

空っぽで可哀想なアタシ

ぎゅっと太郎君を握り締める。

「何歳からのの？」

「小3に崩壊」

もう癖かな微笑んでしまう。ちっとも楽しくないのに、まいったなあ  
あハハ

「……その人形、最後に買ってもらった奴とか？」

「ううん、ゴミ捨て」

ばっしん

太郎君、打ち落とされたり。

「あの、痛い」

手も一緒にはたかれたんですけど

「ばっちい！」

「洗ったよ！」

しかも拾ったとき新品だよ！

「子どものときって、親から十分に愛情をもらえなかったら『退行』  
『暴力』『自閉』など起こしたりするらしいけど」

床に落ちた、というか落とされた太郎君を指差した

「貴女『代わり』で誤魔化してるんじゃない？親の愛情の変わりをこれに変えて」

「太郎君を親の代わり？」

「そう、だから『執着』するのよ、これに」

上から太郎君指差すのはやめて、せめて拾ってください。拾ってくれそうに無いので自分で拾い上げた。

「うーん、よく分からないなあ。寂しいなんて思ったこと無いよ？いたらいたでうっとおしいなって思うし、どうせいずれかは独り立ちするし、いい機会じゃないかなあって」

「そう」

「うん」

「じゃあなんで」

委員長の白い細い腕が伸びてユイの顔を優しく撫でた。

「なんで辛そうなの？」

「さあ？」

戻りたいの？昔のあの頃に？もう戻らないのに？分かっているのに  
継るの？

やめよう考えるのは

疲れるよ

「貴女、辛そうなのに泣かないのね」

「辛くないから泣かないんだよ」

そういつて彼女は微笑んだ。  
だからいつてるのよ、まるでピエロみたいねって  
見えないお面の下で必至に堪えてる部分を隠して、笑って誤魔化して

「……そう」

私じゃダメなのね、そうね……私じゃ貴女を理解することができないものね

「それはそうと、……」  
「？」

ばしん

「それ持ち歩くな恥ずかしい！」

太郎君を叩き落す

「ああああああ！太郎君！酷いよ委員長二度も！」  
「ふ、あーすつきりした」

鬼がいた。

彼女は彼が嫌いらしい。何故？！

## ショート英会話

「あ、そうだマリミア」

「なんだい？」

少し人より遅い食事をするマリミアはパンを口の中にほおばりながらこちらを見た。いやいや話しかけたとたんに口の中にパン入れなくても

「緑色と青色が入り混じるような模様のこの国旗はどこ？」

「ごっふー!!」

「マリミア!？」

だから人の話を聞くとときにパン食べるの? って思ったのに  
思っただけど

「げほげほげほ」

「おばさん、お茶」

すかさず委員長がお茶を渡す  
委員長馴染んでません？

「いきなり何をいいますんさあ」

咳き込みながら二回か三回深い息を吸った後誰にも聞こえないように囁くように言った。

「ヴェルエールフ北帝国だよお」

「え……あ……。もう一回言って?」

溜息つかれた

「それがどうかしたんさ?」

あ、もう一度はいつてくれないのね

「マヤ族と結束して教団側と戦ってたから  
」!」

それを聞いたとたんマリミアは眉をひそめた

「マジかい?」

「そこは本当かい?って言うべきでしょう  
」何それ」

いや意味は無いけどさ。茶化しても前に進まないの素直に聞いて  
みた

「なんか困るの?」

「戦争が大きく長引けば、あたしら庶民にもその被害は回ってくる  
んさ。特にこの町は教会の支配下にあるからね」

「戦争!?!」

委員長が悲鳴に近い声を上げた。

「へー」

「へーじゃない!」



ばし「oh-」  
太郎君落とされた。

「まさか町が戦場になったりとかはないですよね？」

「ウン、まあ普通は……それでも大変ちゃ大変だけど、相手が『ウ  
イルエールフ北帝国』だからね」

「大物なんですか？」

落とされた太郎君を拾う

「この国よりも大きいよ、ナシヨナリズムが多いからね」

「何それ」

「国家主義！」

ばしん「oh-」

太郎君落とされた。

「あつと、そろそろ準備始めるから、あんたらあは二階上がった  
いで」

「外でていい？」

笑顔で睨まれた。

ハイ、大人しく二階に上がります委員長と一緒に二階に上がった。

貸してくれている部屋にはいる

「はああ」

ベットにダイブする

後から呆れた顔の委員長がゆっくりと雪衣の隣に座り

ぶん！

太郎君を投げた。

「why!？何故？なぜ太郎君を投げるの？っていうか苛めるのおおおおお!!!」

「shut up!!」

英語で聞いたら英語で返事が返ってきた。ただし説明は一切無い。とりあえず人形を拾いにいった。

「ねえ若葉さん」

「ん？」

なんとなく床に体操すわりで飛鳥を見上げる。

アタシに合わせるように彼女も腰を曲げて目線をあわせ、あたしの手の上にそつと優しく自分の手を置いた。

153

「私と逃げましょう」

「どこに？」

「戦争に巻き込まれないところよ」

あるのかな

「……」

「私達がここにいたらきつと迷惑になるわ」

「なんで？」

がし

「させるか!」

太郎君を死守するが、彼女も太郎君の頭を掴んだまま離さない  
おのれ

「私には今この状況が何でこうなってるのとか、何で異世界に来て  
しまったのか、夢じゃないのか、どうやって帰るのかって色々考え  
てるわけだけど……っ！」

「へえ……っ！すごいね！」

ぐぐぐ

「分からないけど、ここにいちやいけない気がするの」  
「どうして!？」

アタシはココに居たいよ？  
辛いことも死に目にも危ないことも傷つくこともあるよ？でもここ  
にいたいよ

「帰らなきゃダメでしょう!？」

「なんで?!」

「いるべきじゃないからよ!」

「つつあ!?!」

太郎君奪われたり

oh NO!!!

がら！窓を開けると全身全霊をかけて思いっきり投げ飛ばした飛鳥。  
投げた後のその素晴しきやり遂げた顔

「ああああああ!?!太郎君うん!?!??」

彼は風になった。

大丈夫お墓の前ではなかないから……って違うか

「うわアアアン、委員長のいじめっ子!!」

「ふ、勝った」

委員長。もはや目的忘れていた

彼女は太郎君の天敵となった。

## 太郎君の知らざる内密

朝、まだ日も上がらないうちに彼は部屋を出た。

「おや、トリユーもう起きたのかい？」

「マリ姉こそ」

「忙しいからね、何処行くんさ？こんな朝早く」

「ちよつとした用事でな、んじゃ」

アンブロシアを出て、歩きなれた道に行く。

坂道を歩けばこの町一番の大樹『ベベ』についた。

その木にもたれるように立っている青年がいた。

「よう、ゼシルヴァン」

「来たかトリユーテイテス」

二人は黙ってにらみ合った。

「こんな朝早く呼び出して、なんだよ」

「君に聞きたいことがあってね」

「ユイのことか」

「ええ」

ゼシルは腰につけていた剣を抜いてトリユーに突きつけた。

「忘れましたか？前回エイル＝ブリュンダル聖女の家で君はユイを連れて逃げた」

トリユーはそういえばというようなお茶らけた仕草をして見せた。

「逃げたんじゃなくて、散歩に夢中にんってただけだぜ？」

「君の散歩は随分と長いんだねえ！！」

剣が交わる。

「反射神経だけは、あいからわず。頭の回転も早ければねえ」

「お褒めに頂き光荣、とでも言ってみようか？泣き虫ゼシル」

早朝の街中に金属が何度も交わる音だけが響く。二人を見守るのは  
べべの木のみ

まるで稽古をしているように二人は止まることなく、相手に一撃も  
攻撃を与えることもできず同じことを繰り返す。

「お前、ユイ取られて悔しいんだろっ？！」

「なんのことやら。あの後聖女にいびられた腹いせですよ！！」

かの聖女は我ままの上に横柄で、言葉よりも拳が行動に示す女なの  
だ。

あれでも聖女

「嘘付け！」

きいん！

ゼシルの剣が飛んでいく

「集中力散漫で何言ってるんだよ」

「つく」

「何イライラしてんだ」

トリューは刃を押さえた。

「……………」

夜が明けていく

「もうすぐ戦争が起こる。それも今世紀最大の大戦争」

「何言ってるんだ」

「戦争なんだ、ヴィルエールフ北帝国との」

「っ！？」

この大陸で最も大きな国家は三つあり、そのうちの一つはこの国で、もう一方がヴィルエールフ北帝国である。長らく休戦状態であった大国同士がぶつかるということは、小国も巻き込まれ結果的に世界大戦になるのだ。

「……………なんで、話がそんな大きくなってんだ？」

「漆黒の……………せいだよあれが災いと呼ぶ」

「ユイはそんなんじゃないやねえ」

「分かってる。本当は……………」

ゼシルは下を向いた。

「頼む、ユイを守ってくれ」

「言われずとも」

男だけの内密話、譲れないものもあるが、思っべきものは同じ。

そこだけは、変わらない



敬語になるなる皆さんです

投げ飛ばされた太郎君を拾いに窓から下に下りる。

裏路地の間に挟まれていた。どんな投げかたしたんですか委員長？

「あーあ、ゴミ箱にはまってる」

ひどいやつだあ委員長はあ（訛り風に）

まあ、おふざけはおいといて

顔を空のほうへ見上げた。

「良い天気」

私は良い天気は嫌いだった。

休日も嫌いだった。

行事も嫌いだった。

だって、一緒に喜んだり楽しんだりしてくれる人がいなかったから。

「委員長はいい人だね？太郎君」

もし、太郎君に言葉が発せられるなら、きっと全身全霊をかけて否定しているだろうな……なんて考えて少し鼻で笑ってしまう。

「ココに人は皆好きだよ、まだ知らない人もいっぱい居るけど、きつといい人いっぱいだよ」

なんとなく歩き出す。向かっている場所は分かっている。

「昔アタシにも友達は何人か居たんだ。三人で仲良く一緒だった。だから学校が好きだった」

でも

「その唯一の友達が二人が、仲悪くなっちゃったんだ」

突然迎えたお別れ。その理由は男だった。

「好きな人が一緒にいたんだって、二人だけの秘密だったらしいの。でも、秘密を打ち明けたこの前でもうヒトりの友達はその子に告白したんだ」

仲は地に落ちた星の如く、大地に穴をあけ、周りに多大な外傷を及ぼした。

そしてアタシも巻き込まれた。

「結局、先に告白した子は彼氏の子を身ごもって退学して、もう一方はクラスの女子からの『先こされ女』として噂され、それに耐え切れず転校していつちゃった。」

そして残されたあたし。

あ〜んど、独り言を言うアタシ。

「……あ」

とある坂道を上りきると見事な風花が迎えてくれた。真っ白で雪吹雪のように。そしてごくたまに青色も混ざっているからイルミネーションのような幻想さがあった、とても綺麗

「ベベの木……」

小さい頃アタシを迎えてくれた優しい場所  
……に

「なんでトリユーとゼシルがいるの？」

「いやいや、コッチのセリフだから」

あ、そうですね。え？なんで？

「気がついたらココに〜なんて、はははは〜」

「……………」

なんだろう、この居た堪れない空気。

「ボクはこれで失礼します」

「ゼシル君」

はし！

……………子どもみたいに服の裾を掴んでしまった。いやあしかし、ココの人は平均的に背が高いなあ、うん、まあアタシ平均のちよい低めだしな

「……………なんですか？」

なんでそんなひきつつった声だすんさ  
別にズツキしないよ、今は

「騎士だから、戦争に行くんだよね」

「ええ」

やっぱり

「死なないで」

「！」

「あたし、ちゃんとゼシルと話したいから、昔みたいに」

「な、……ば、馬鹿じゃないですか？ボクは死にませんよ。そうですね」

背を向けていたゼシルがきちんとこちらを向いて手を取った。

懐かしい、やっと真面目に向き合った気がする。

「騎士の名にかけて、貴女の御傍に帰ることを宣誓しましょう」

「ありがとうございます」

小さく微笑むと向こうも照れたように微笑んだ。あーなんか良いムードだなあ〜なんて

「ハイ、お疲れさん」

ばし

「いた！」

トリユーに握っていた手を切られた。なんだろう、きーった見たいなノリ

うん、分かってたさ

良いムードになったら誰かがぶち壊すことぐらい、分かってたさ！別に期待してないし

「あ、最後にご利益として太郎君の頭撫でていきなよ」

「太郎君？」  
「そう、太郎君」

太郎君出現

「……エンリヨウします」  
「そんな謙虚にならなくとも」  
「いえ、ほんとうに結構です」

きつぱりと断られた。  
そんなにいやつすか？

「……」  
「……」

ふたりしてゼシルが坂を上がっていくのを見送る。

「ねえ、トリユー」  
「ん？」  
「さっきの言葉さ」  
「ああ、死ぬなって奴か？アイツなら平気だろう」  
「うん、そうなんだけど……」

下を向く

「アタシ死亡フラグ立てちゃったかな？」

彼は黙りました。

「……よし、帰るか！」  
「ええ？無視！？」

トリユーはすたすと歩いていく。

「あ、ちょっと待ってよ！」

酷い酷いよ

「あ、トリユーも触っとく？タロウク」  
「結構です」

最後まで言う前にはばかられた

「えっと……なんで敬語？」  
「気のせいです、さあ帰りましょう」  
「え？あゝはい？うん、あははは」

めんどくさくなくて二人で笑って帰ることにしました。  
そして帰ったとたん

「なに外で出てんだゴラアアああああああ！！！」

マリミア姐さんに渾身の一撃を喰らい、六臓六腑吐き出しそうになりました。

自業自得なのは分かってるけど、胃を狙うのは止めて下さい。

すみません、もう二度と勝手に外出しません。そう、心に決めたあたりであつた。

とりあえず、殺される前に土下座しよう。

**敬語になるなる皆さんです（後書き）**

お気に入り件数20到来！！感謝感激雨霞です（古い？  
皆様にはご愛読していただき真にありがとうございます。感涙もの  
です。はい。

皆様の中では早くマルクムと Heim 助けるよと思っているかもしれ  
ませんが、当分助けられません。かわいそうに  
とりあえず、マイペースに話を進めて行こうと思います^^  
これからもご愛読くださいませ

あ、ちなみに感想なぞあればどうかお書きください。飛び上がるほ  
ど喜びます。はい。





まあ、自分の夢に突っ込んでもしかたがないよね。  
あ、何だろうこの影？

後ろを振り向き、上を見上げた。

……やばい、生命の危機！アタシのピンチ

「きゃあああああああ！！！！太郎君の大波い！！！！」

太郎君の波に飲み込まれる。

ああ、苦し……くはないけど、重い……ああああ……

ぱっ

電気がついた。

「おお！？」

なんだココ！？三畳間のちゃぶ台に天井にはランプが！？テレビも  
アンテナついてる！？  
ええ？何、何ココ！！

「ああ！お父さん」

って、髭はえた太郎君じゃないかあゝい！

「は！目の前にお茶……ああ！！！！お母さん」

って太郎君かーい、何で着物着てるの……！？

何この設定、いや過ぎる！

太郎君と家族ってそんなに嬉しくないね!?

「あたしどうしたらいいんでしょう」

なんとなく正座

もう何がなんだか、まるで現実味のない……って、いやはや、夢の中なんですけどね。こんなに夢と分かっているのに疲れる夢は無いでしょう。にしても、現実のようにアタシは今てんでこ舞いで参っちゃうよね。

「神さまとか、戦争とか、漆黒とか、どうしたらいいんだろうあたし」

新聞読んでいた太郎パパが顔を上げた。あ、メガネかけてる……  
・・・老眼?

『進みなさい』

「え?」

手をクイクイと忙しなく動かす。

『進みなさい、失敗を恐れず、傷つくことを恐れず』

「太郎君……」

誰かにそつと優しく手をなでられた、見れば太郎ママ……いつの間にお化粧したの?

『まずは、心からつくろつ。やればできるんだから やろつ  
という心をつくりなさい』

「心……」

『そう、誰だって、心があればなんだってできる。心があることはそれは素晴らしい人類の奇跡』

『心はいつだって人を幸福にする』

大丈夫、自分を信じて

「ありがとう……太郎君」

って、感動してるけどこれ夢ですよね？

……まあいつか

## 太郎君と夢（後書き）

サブタイトルの変更をしましたが、内容は変更していないので安心してください。まぎらわしくて申し訳ありません。

## 出来る限りの

「ネーネ何してんの？」

クナは人が一生懸命かいていた紙を奪って覗き込んだが、あたしの世界とこの世界の文字は違うため、へんな字。の一言で返された。

「うん、記憶の整理、かな？」

だって今までなんか言われたこととか重要語句とか、全部ギャグで流しちゃったから

「とりあえず、書いてあたしのやるべきことを見つめなおそうって思っ」

「ネーネ偉いねえ」

「覚えてんの？」

クロは痛いところ突いてくるなあ。  
ええ、ほぼ覚えてませんよ

「うん、今考えちゅー」

「ちゅー」

いや、キッスのちゅーじゃなくてね

「違うの？じゃあ誰とちゅー？」

「思春期なんだよね、うん。邪魔しないでね」

しょうがないよ、思春期だもん。ということにしておこう。うん

紙の上にかかれている文字は少なく白紙が多い。

「えーと、オーベンの片目？だっけ……もうココから怪しい。で……黄金のドラゴン……あ、関係ないか。うーん」

文章能力無いから何をドウ書けばいいのやら。

委員長を見れば皿洗いを手伝ってるし

まるで勉強頑張るできない妹を無視して先を行く完ぺき主義の姉の  
図みたいだなあ

……実際アタシの姉は常にアタシを見下して男漁りに精を出して親  
に反抗ばかりしてたけど

「うーん」と

・偉大な神の……ビー玉？

・地獄とどっかの扉を開ける鍵？

・ゆうげんかいろの終焉（聖女ボインが言った言葉）

・神殺し。変革。またはこの世の終わりのため？

・予言の書に殺されそうになった

・委員長どうしよう

・太郎君

アタシどうしよう・どうしよう・こまったなあ」

ああこまったなあーと書き続けていると、紙を無駄にするなどマリ  
ミアに怒られた。

「おやあ？そういえばトリュー」

「ん？」

「ルニソーラのじっちゃんまは？」

「知らねえけど？」

「あら、あなたの後ろくつつくように歩くのみたんだけどさあ？気のせいかね」

「老化？」

マリミアの拳が持ち上がったので見ないふりをしつつ、紙を見つめる。

うむむ

「まあ、あの爺さん気まぐれだし、帰ったんじゃないか？」

「そうだねえ」

しかもお茶目だしね。

「ねえカアカ」

「ん？なんだいクナ」

「新しい本買って？お気に入り燃やされちゃったんだもん」

そういえば予言の書とやらに燃やされちゃったね。あはアタシも死に掛けたなあ  
はっはは〜

「あ」

そういえば

「予言の書についてあの本かかれてたじゃない？」

「うん、クナ覚えてるよ、えへん」

そりゃすごい、じゃなくて



「最後読もうとして燃やされたじゃん？あれってもしかして見られちゃ困るからとか？」

「あー、そうね、その可能性も無くはないわ」

おお、委員長が認めてくれた。でも太郎君は認める気がないらしく、視界の隅にも入らないように目を逸らしている。そこまで拒絶しなくてもいいのに……

「でも、本が無いからな」

トリューは残念だと表現するように肩を上げた。

「クナ覚えてるよ？97回読んだから」

「すごい！全く面白くなさそうなお本なのに！！」

クナに睨まれたよ〜ん

しかしそれなら話は早い

「どうだった？」

「うんー！」

………？

「思い出すから！」  
「覚えてないんかい!!」

まあ所詮小学生ぐらいだもんね〜しょうがないよ〜アタシだって伊呂波歌全部いえないもん。  
ジユゲムはいえるんだけどね。

「ウン、じゃあ思い出したらいつてね」

期待はしません。

「うん、ねーねも頑張ろうね」

それは遠まわしの厭味ですか？

「ウン、ネーネモガンバルヨ」

やったるうやないですかあああああああああ！  
まずは何をするか決めよう。  
うん、それがいい。

.....。

「マミ姉〜飲み物〜」

太郎君を持ち上げてお茶を待つ。つまりアタシは……諦めた。

## 太郎君と停留

『依存症』

自身に心理的あるいは身体的に障害となるものがあると、安定を図るために、自分より力の強い他者や事物に接近・同一化をしようとし、自分の欲求をどうにか満たそうとする。

フロイトは自己の得たいものが得られないとき他の方法で欲求を満たそうとし、解決しようとする方法を『代償』と呼んだ。

……。

「た・ろ・お・くん　あははは」

う・ざ・い

彼女……委員長こと飛鳥真菜はイライラしたような顔でブツ細工人形を愛でる若草雪衣を睨んだ。

ちなみに彼女の横はトリユーが座っていて、あまりの飛鳥の殺気才ーラに危険を感じ、若干距離をとっている。

「ああ　癒されるわあ」

「……で、この字が……聞いているか？」

「あ、ごめんなさい。せつかく教えていただいているのに」

「いや、いいけど」

クナとクロが目の前で飛鳥を眺めた。コロコロと変わる表情に興味を示していた。

今日はアンブロシアも二人の学校もお休み、特にこれといった物騒な話も無く、平和そのものだった。  
なので

「ええ〜わあ〜太郎君いいわあ、あは、あは」  
「……………（ぶち）」

がったん！！

「うつるっさあああああああああいい！！！！」

飛鳥はそういうとユイのところまで素早く駆けて行くと腕に抱いていた太郎君を奪い取り、床にたたきつけた。

「うぎゃあああああああ！！」

ユイはそれを見て絶叫した。

「この、この！！」

「ああちよつと！ぶみぶみしないでよ！委員長酷い」

暴れる二人を見てトリユーは嘆息をついた。

「元気なのはいいけどさ」

と言うとクロもクナも二人そろって笑った。

「そもそも！そんな風にソレで遊んでんじゃなくて、何かしたの対策を考えなさいよ！」

「例えば？」

「前回の紙はどうしたあああああああ！！！」

踏んでいた太郎君を持ち上げユイにたたきつけた。

「わお！？」

肩で息をするほど叫んだ委員長はつかれきった様子で椅子に座った。ソレを見たクロは小さい声でクナに耳打ちした。

「女っていきなりヒステリーになるよな」

「ふふ、何でか知ってる？」

「知ってるのか？」

「女だもん」

はい？

ユイは埃だらけの太郎君の体を叩く。

「何をイライラしてるんさ？」

マリミアもキッチンから出てきて飛鳥の肩をそつと撫でた。

「…………ごめんなさい、騒いで」

消沈しきつた顔で下を向いた。

「私、連絡無しにコッチにの世界に来てしまって、それで帰れなくて、帰れる方法も無くて…………それで、ちょっとイライラしてたみた

い

例えこの世界が良い国でも、やはり生まれた世界のほうが良いと思うのは当然のこと。

覚悟もなしに来てしまった飛鳥にとって、その焦燥は増していった。

「……………そっか、ゴメンね」

ユイは飛鳥の頭を撫でた。

「大丈夫、帰れるよ……………あ、うん、そうだ帰れるよ委員長！」

「え？」

そもそも、一度向こうの世界に戻された彼女を連れ戻したのは黄金のドラゴン、ルートなのだから、もう一度渡ることは可能だろう

「呼んでみよう！」

黄金の葉を取り出す、ぼふ！相変わらず酷い音だ……………しかし向こうは現れた。

『あん？』

「物凄い態度悪いね」

『ああ、体調不良で言ったろ？人間の血は毒だって、早くどうにかならないか？』

「うん無理かな」

久振りの蹴りを受けた。

「ソレよりお願いがあるんだけど」

『無理だ』

「即答!？」

ルートはやれやれとしんどそうに机の上に降り立った。

『俺らからして言えば、いま毒霧の中ですごしているような状態でじわりじわりと弱ってたんだ。お前の望みをかなえるほどの力は残っちゃいない』

「委員長を元の世界に返すだけでいいの」

『ソレこそ無理だ。異世界に渡るのに、どれほどの力があることか』

「そこを何とか」

「もついいわよ」

飛鳥はユイの肩にそつと触れた。

「ゴメンナサイ、私わがままを言って困らせたわね」

「でも」

「いいのよ、やるべきことがあるなら、ソレを優先してちょうだい」  
「……。」

『血の匂い濃くなってきている』

「ヴェルエールフ北帝国は『マヤ族』を引き入れこの国を内側からじわじわと崩す気である」

「ルニソーラ!」

よっこいしょと飛鳥の座っていた椅子に座ると一息ついた。

「ヴェルエールフ北帝国は一昔、神が人類を滅ぼす終焉のときに、唯一存在することを許された国じゃ。故に選ばれた存在と勘違いしている輩が多い」

「唯一？」

「うむ、理由は知らんがマヤ族に続く神が滅ぼさなんだ国での。ちなみに聖女エイル・ブリュンダルもあそこ出身の母を持つのでそれで聖女に選ばれたのだが」

ちよつとした豆知識？

「それはともかく」

あ、どうでも良かったんだ？

「この国をどうやら『漆黒の者』を隠しておるとて難癖つけて戦争にこじつきたいだけの様じゃ」

「アタシ？何でアタシ？」

「漆黒の崇拜している国の一つじゃからな。向こうにとって漆黒の者は神の使者だと思つておる」

「うーん、その差がわかんないよね」

災いの毒婦やら変革の使者やら……神殺しやら  
アタシにどうして欲しいのやら

「マヤ族は純粹にこの世界を救いたいようじゃが」

「救う？」

「神が人類を滅ぼそうとするのは神が死ぬからじゃと思つてる」

「はあ？死ぬ前に人を殺すの？」

「そのようじゃな」

わけ分からん

「うむ」



ルニソーラはいきなり天井を見上げた。

「ワシはワシなりに情報を集めてきたが……」

頷く

「わけ分からの」

亀の甲より年の功……の長年生きてきたおじいちゃんもどつちやらお  
手上げのようだった。

## 木乃伊取りが木乃伊

「マヤ族に聞いたら分かるんじゃないかしら」

「確かにマナの言う通りだが、向こうさんは今この国の敵なんだぜ。無理だな」

トリユーはそういったが、ユイにはあてがあった。

「……ねえねえ、ルニソーラ」

「ん？」

「今なら教会に入り込めるんじゃない？」

導師ストネットは指導者として戦争の最前線にいるとしたら……

「油断している今がチャンスだよ！マルクムとムイト助けだせるんじゃないかな！」

「導師が最前線にいるわけ無いだろ？」

「いや、じゃが巫女と対峙しているならありうる」

巫女の力は飾りではない。

「よっしゃ！じゃあ突入　　！！」

すぱん！

「痛」

地味になんか後ろから頭叩かれたんですけど……

「あの、痛いんですけど」

トリユーは何故か持参しているハリセン片手にジト目で睨んできた。

「お前自分が狙われてるの覚えてるよな？」

あゝ

「……いや、でも今アタシ死んだことになってると思うから」

「それは予言の書だけな」

「ああ、……じゃあ、あのー今がチャンス？」

「何が？」

「ええ？」

駄目だ、何を言っても無駄な気がする。

「でも、助けないと」

アタシが行かなきゃ駄目な気がする。そもそもあたしのせいである二人は捕まってしまったのだし……贖罪ってわけじゃないけど、そうしないとアタシがアタシ自信が納得できない。

「ルニソーラ」

「あいよゝ」

おじいちゃん、こつゆつ時だけ空気読んだ。

「あ！待てユイ！」

トリユーが薄らいでいく

結局そうしてアタシは移動した。

「しめしめ、誰もいないみたい」

そして、ココがどこかも分からない。

「無鉄砲に来て、また怒られるんだろうな」

ソレも覚悟の上、ってことで移動

無駄に広い教会の廊下には、必ずカーペットが敷いてあった。金持ち

「牢屋の王道は地下室だよな」

「そうじゃな」

とことことこ(ユイ)

のろのろ(ルニソーラ)

「おじいちゃん、遅い!？」

「すまんのぉー」

手を繋いで引つ張るように歩く、でないとい日が暮れる!

地下室と思って地下に続く階段を探し出すのはいいけど、そもそも階段すら見つからないんじゃないじゃ中々難しい。

「ふう〜マップ無いかな〜」

「あるわけ無いでしょ、ちなみにココ法力のセンスがない奴が入ったら無限ループするようになってるの、気づいてた?」

「マジで〜?知らなかつ……」

「ご無沙汰です？」

「ぼいん!？」

「だから直球に胸だけの特徴を名前で言うのやめてくれない？」

聖女エイルがユイの後ろで仁王立ちしていた。

「何してんの？」

しかもなんだかフレンドリー

「とある人を助けに」

「ソレって、マルクムとムイトって奴？」

「そうだけど」

何で知ってるんだろう。油断ならない……ジリジリと後方に下がる

「なに身構えてんのよ、私も助けに行くところよその二人を」

「え？」

なんで？

「不思議そうな顔してるわね、私もともとヴィルエールフ北帝国生まれよ」

「知ってるけど」

「あら、意外。まあそういうことだから向こうに帰るわけよ、その旨を向こうに知らせたらホラ今さ、マヤ族と手を組んでるでしょう？」

「うん」

「救出して来いって」  
「へー」

なるほど〜つまりここで襲われる心配はナイと

「てことは、ココ裏切るの？」

「まあ、そうなるわね。私ココにいたの表向き聖女だけど裏向き人質だったし」

「はあ？」

「戦争しないため、お互いがお互いの重要役預けてたってわけ」

彼女はそういいながら歩き出した。

「ほら、案内してあげるわよ」

「あ、ありがとう」

わがままで暴力的で自己中心的な駄目駄目な聖女だと思ってたけど、じつわはいい人だったんだね！ユイはすっかり警戒心を解いてエイルについていった。

そして十分と経たない内に牢屋に着いた。

「二人とも！」

「ユイ？」

「アホ女！？」

あほおんな？

「誰がアホ女だ！？せつかく助けにきたのに」  
「頼んでねえし！」

エイルは牢屋の鍵を開けた。

「さ、さっさとずらかりましょうか」

あ、そういえば。とユイは思った。

こっちはこっちで二人の用はあるのだが、エイルは二人を連れ戻さないといけない。

これは困った

「ねえエイルさ」

がし

………ウイ？

「さ、これで貴女のそのめんどくさい力使えなくなっただわ」

あらホントー力の流れが分からなくなっちゃったよー  
つて………

あらあ！！！？？？

「え？あのーエイルさん？」

「まさか、このままノコノコ帰れると思った？」

はい

移動呪文でも発動しているのか、周りに光のシャボン玉が空へ浮かんで消え浮かんでは消えていた。

ややあ、これは由々しき事態ですな。

とか思っても本当に状況はよくはならない。

移動しながら彼女は思った。

またみんなに怒られるなって……。



## 太郎君と老人

眼中に無しといった感じでおいて行かれたルニソーラと太郎君。

二人は、まあ正しくはルニソーラが太郎君を見つめた。

「うむ」

と、頷いた。

頷いただけだった……。

「紹介するわねユイ、北帝国国王であり、私の従兄弟 ジョルナン  
「デイダ」

大きいですね。この家系は身長が高いようで、羨ましい。

しかし移動魔法って便利だね、普通一週間以上もかかる場所を一瞬  
で移動できるんだから。

「ところでココ何処？」

赤い横浜の港町くなんつつって

でも窓の外から見える風景は赤いレンガで造られた町並みで、朝だ  
けど夕焼けのような美しさを彩っていた。

「ここが敵国。」

「ご苦労エイル。そしてユイ我々は君を歓迎しよう」

「はあ、どうも……あの一ついいですか？」

眼帯の男は愛想よく微笑んだ。

「アタシいつまで縄でぐるぐる巻きなんですか？」

英雄視されてるんじゃないかなかったつけ？アタシ漆黒

「おい！どうゆうつもりだ！」

ムイトが怒鳴る、彼らもまた縄で縛られていた。これでは監禁場所が変わっただけだ。

「って、アタシには関係ないけど」

「なるほど、マヤ族を謀ったってわけか」

「まあ、そう取ってもらっても構わない」

ジヨルナンは挑発的な笑みを浮かべた。

「といても、もともとマヤ族は我々の国眷属……それがいつの間にかミットガウンに変わっていたというだけの話」

「ミットガウンって国だったんだあそこ、じゃあノーナイトラウンって町の名前か……うーん、町の名前のほうが立派な気がする」

今は関係ないですよ、はいすみません。みんなでこっちみないで。

「えっと、 a h a h a h a」

とりあえず笑って誤魔化してみた。

だって真面目に内容も聞いてないから何がどうやら分けわかんないんだもんね

ジョルナンは王座に座ると顎でどこかを差した。  
すると兵士がやってきて連れて行かれるあたし

「ユイ！この、離せ！」

「おい！何処に連れて行く気だゴラ！？」

「マルクム！ムイト、……のアホおおおおおお！！」

連れて行かれたアタシ。扉の向こう越しに「なんでやねええええええええええん」っていう関西弁の突込みが聞こえた気がするけど。うん、聞こえないフリ

あたしのそばにはボイン……エイルがいた。

ロングスカートからはみ出る白い脚が美しい。アア羨ましい。男のハート射止める女の武器

話脱線した気がする。

「あたしたちをどうするつもり？」

「知らないわよ」

しらないわよって……貴女

「あのねえ、貴方だけに言ってあげる。物覚え悪いから」

「いやあ照れる」

「褒めてないから」

耳元で小さい声で囁く

「私は中からココを潰す。敵を欺くにはまず味方からってね」

それだけ言うと「また会いましょう」とだけ言って、颯爽と去っていった。カッコイイといえはそうだけど……

(……結局、貴女はこの味方なの?)

そして結局どうなるアタシ。

## ウィディングドレス

もしかしくとも、アタシなんかピンチ？  
でもでも、これ、なんかおかしくない？

なんで

なんでなんで？

うーん

「なんでアタシウィディングドレス着てるんだろっ？」

なんで？

放り込まれた部屋で一日過ごし早朝とともに沢山の女官さんが現れ、  
風呂に放り込まれたアタシ。  
そして気がつけばこの格好。

誰と結婚するの？神さま？

まさか！太郎君？！

「ンなわけないか」

ソレより脱出と、逃げ道を探すが、窓の外は……ココ何階建てです  
かっていうぐらい、高い。これは駄目だ。窓から抜け出そうものな  
ら落ちて死んでしまう。他に窓はないし。扉も一つだけで施錠され  
ているらしく開けない。

「……THE脱出ゲーム」

時間制限アリ

とりあえず何か探そうとしたとたん。鍵の開く音がした。  
たーたーたーたーくん、いきなりゲームOVER

「失礼する」

はいつてきたのは眼帯ダンディのジオルナン国王だった。  
人の姿を見て顎に手を当てた。

「もう少し装飾を豪華にするか」

それはアタシが地味ってことですか？

「あおう」

ん？と微笑まれた。何だこの似非紳士

「アタシ、誰と結婚するんですか？」

よくある生贄とか？漆黒の女は神の花嫁とか、そんなめちゃくちゃな設定じゃないよね？

ああ、そわそわしてきたら手が震えてきた。

（太郎君……）

「決まっているだろう」

ジオルナンに頬を触れられた。冷たい、硬くて太い手  
トリューとは大違い。

「私と君だ」



しかし、なんともまあ、自信過剰な男だ。こつゆう人のことなんていうんだっけ？野心家？

あー野心家と書いてヤバイ人と読む……てまた脱線

「では、また明日」

「へ？」

「今度は民衆……神父の前で会おう」

結局結婚する気ですか

「あ！？ちよ」

さつさと消えてしまった。

アタシの意思は無視ですか？イヤアいつものことだけど。

「……逃げなきや」

窓を開ける。

結婚だなんて、今それどころじゃない。

「私には、やることあるんだ！」

きつとそれは大変なことだけど、アタシは前に進もうと思う。  
今、ココで立ち止まるわけには行かないんだ！



## 太郎君と約束

能力は使えない、体力は無い、頭も悪い。  
どうやって脱出したものか……

「って考えてカレコレー時間」

なーんにも思いつかない。

「はあああ」

ベットにダイブする。ウイディングドレスを剥ぎ取られまた別の服に着替えさせられたが、これまたフリフリ……ロングドレスっぽい

「これで窓からじゃア無理だしなあ」

ふかふかの布団……あーいい天気ですね  
眠たくなってきちゃった……はは、アタシって駄目な子

「……………」

消えていく光

弱弱しい光

微力な光

全て

「……消えないで……」

布団を無意識に握り締める。

もがいて、もがいてもがいて、必至に、しがみついて  
お願い

生きて!!

布団から起き上がる、まただ……涙が頬を伝う。

「どうして?」

悲しい。

なんなの?この気配。悲しい、ツライ、どうして……最後には消え  
てしまう?

「どうして?なんで?」

分からないものに、どうしてアタシは苦しむのだろう……

「太郎君、太郎君、太郎君」

無いものの名を呼んでしまう。押しつぶされそうに心細い。怖い、  
寂しい、苦しい

「太郎君、太郎君、太郎君、たろ……みんな、みんな」

消えないで、死なないで、居なくならないで  
どうして? どうして? どうして?  
分からない

「……アタシは、どうしたらいいのかな?」

何も無い天井を見ながら何度目かの疑問を口にした。  
これじゃ、ずっとこれじゃ駄目だ。

自分で、決めないと!

床に正座する。

「お願い、オーヴェンの片目……力を貸して!」

体の中で乱れた魔力を探る。

消されたわけでも封印されたわけでもない。ただ中の流れを乱され  
ただけだ。

委員長はこの能力に頼るなといったけど、ごめん。使う

「人それぞれの思惑があるんだと思う、でもアタシには関係ないこ  
とだと思っ」

漆黒をだしにしてくれているけど、漆黒のアタシは先に進ませても  
らう。

夢で励ましてくれた太郎君のためにも!

体あったく火照ったのが分かる。

「行こう！」

光が彼女を導いた。そこにユイの姿は無かった……。

## 太郎君と約束（後書き）

ここからはギャグ要素が少なくなると思いますが、どうぞ最後まで  
拝読ください

## 書の叫び

太郎君が光った。  
ビツクリしたクロが椅子から落ちる。

「なにしてんだい？」

「カアカ！太郎が光った！」

ルニソーラが長い自慢の白い顎髭をなでながらソレを眺めて、一言

「眩しいのお」

じゃあ見なきやいいのに。

「……あれ？」

ユイは真っ白の空間に居ることに気がついた。  
どこだろうここは？

なぜですか

声が出た。

「わ！」

何も無い空間からフェアナが現れた『賢者の書』

「な、ななな!？」

「予言の書、または賢者の書……フェアナです。お久しぶりです」

につこりと微笑んだ後彼女の手が伸びてユイの首を掴んだ。

苦しい、酸素がすえなくなる。

「殺したはずですよ〜」

殊更微笑みながらいうからもつと恐ろしい。

「う、な、んで」

苦しい

「……もう一度だけチャンスあげます」

首を絞める力が少しだけ弱まった。気持だけだが

「この世界に一切関与せず黙って帰るか、ここでほかの者と同時に死ぬか」

「……………」

「さあ〜」

「……………あ、んで?」

「はい?」

彼女の腕をつかんで睨み、威圧を跳ね返すように叫んだ

「なんで死んで欲しいの!？」

恐ろしさよりも、不思議さのほうが勝った。

「人間がそんなに嫌いなら、なんで人間をもう一度産むの!？」

「!」

「ねえ!？みんなみんな殺すほど嫌いなら、何故もう一度産むの!」

「……うるさい!黙れ!嫌い嫌い嫌い!何故産むのか?そんなの我輩だって知らない!」

首を掴む手がさらに強くなった。なんとかオーヴェンの力で自分を守っているが。苦しいものは苦しい。しかし、不可解

「なんで、そんなに」

見て分かるほどの憎しみ。

一体何が

「無神論者が!恥知らず、産んでもらったありがたみも持たず、偉いのは人間だとほざき、戦争抗争紛争と争いを起こし、血を流し大地を汚し森を破壊し」

こんなときにあれですが……戦争抗争紛争って全部意味同じじゃないですか?

あー、酸素が

「それと、なにが」

「お前たち人間が、神を殺していることに気がつきもしない!」



え？

「お前の、この国の役割を教えてあげましようか？」

忌々しい笑顔。

恐ろしい、何をココまで黒くさせたのか……

「狂った神を殺し、地獄に落とすことだよ」

人間だ。

アタシたち、人間だ……だから、アタシは……

漆黒なんだ。

## 決意と太郎君

いきなり光り輝いた太郎君を胸に抱いたままクナは熱心に何かしているクナのところへといった。声はかけない、怒られるから。

「……………」

黙って覗き込めば必至にペンを走らせて紙に何かを書きつくしていた。

「なにしてるんだ？」

つい気になって声をかける。がりがりがりと髪の毛の痛む音だけが響く。

(つまんないの、てか無視かよ)

お兄ちゃんは寂しいようだった。

「できた！」

がしゃんとペンが机の上をお転がり落ちていった。

「なにが？」

「クナ、あの本の最後全部思い出したよ！」

彼女は難儀なことに書かないと思いつけないタイプの子だった……。

クロはとりあえず目の下にクマをつくっているクナに眠ることをお勧めした。

「これやるから」

「うん、ありがとう。おやすみ」

太郎君移動

「よし、遊びに行こう」

太郎君という呪縛から解放されクロは外に遊びに出ようとした。だが

「うわ」

沢山の人だから

お祭りや行事などで集まっているわけではないということは一目瞭然だった。みんな、母国を捨て他国に亡命する気のようにだった。

クロは頭を垂れて家の中に入った。

マリミアと飛鳥は掃除を切り上げている最中だった。

「かあかー」

「なんだい？」

今まで安泰だったアンブロシアも今ではお客さんは一人もいないし、バイトの子も皆やめていつてしまった。

「俺らは逃げないの？」

「なんで、にげんさあ」

「戦争だろう？」

「平気よ」

掃除用具を片している母と真菜を見ながら、開いている席に座って母親を覗き込めば、マリミアの茶色い優しい髪の色のみつあみが肩に流れてクロはなんとなく嬉しい気持になった。

「時には戦い、時には見守ることも大事なんさ」

マリミアは温かい珈琲を用意するとクロの隣の椅子に腰掛けた。

「私たちは待つので、それで、帰ってきたみんなをココで出迎えるんですよ」  
「そうですね、それが私達にできることですよね」

微笑んだ母に肯定するように二人の若人は同じように微笑を返した。

「そういえば、トリユーさんやルニソーラさんは一体何処に行っただんでしょうか」

「町の様子見と戦争の状況を聞きに行っただよ」

「ちえ、こんなんじゃないぜ」

お店の開くベルの音が響きそちらの方向に目を向ければ噂のトリユーが帰ってきていた。

「ただいまーっと、中々状況は悪いぜ。マヤ族がこちらの内面に詳しくだったからコッチが今圧倒的に不利だ。聖女も裏切ったって話で持ち切り出しな」

「あらあ……聖騎士殿は？」

「ウオーレンってやつのことか、あの人は戦場駆け回ってそれどころじゃないらしい」

トリユーは真菜の用意した珈琲を受け取りながら小さく溜息ついた。

「向こうの情報は何一つはいつてきやしない」

「心配だね、ネーネ」

聖女に攫われて敵国にいるユイ……憂えずにはいられない。

「待ってるよユイ」

トリユーは知らず知らず拳を強く握った

「必ず、助け出すからな！」

決意と太郎君（後書き）

気持と現実のすれ違い（笑）

## 孤児のアタシ

幾多の神さま

それはそれは沢山いらし召された神さま。

小さな神さまから大きな神さまそれぞれの神さまがそこに在りそこに住みそこに鎮座していた。

しかし神さまといっても不老不死ではない。

万能とはいえ万物には必ず終わりがやってくる。

死

という終焉が

そこを守る神が死ねば代わりの神さまが死んだ神様を吸収し、新たな神としてそこに重鎮した。

ある場所でも神が死んで、別の神が吸収し新たな神がその守となつた。

それを久遠のかぎり永久にずっとずっと続いた。

そして幾多もの神がいたのに、いまでは数少なくなり、世界の均等が取れなくなつた。

神は全知全能

しかし不老不死ではない

世の末路を愁い悩みどうしようもなく、神さまは狂つた。

そしてその結果全てを滅ぼし全て一から作り直した。

すべてはコスモポリタンを目指して。

しかし何も変わらなかった。

「神は何度も、何度も、何度もソレを繰り返した。この悲しみお前たちに分かるのか！お前なんかには、分かるのか！？」

書は叫ぶ、真っ白の空間が灰色に黒いろに染まっていく。

ヤミがまるで呼んでいるようにうごめくのを虚ろな気持でユイは眺めた。

ずっと待って、堪えて、信じて、裏切られて、悲しんで、諦めて、望んで泣いて……繰り返して  
そうやってズット神さまはそうしていたのだろうか

「はなして！」

オーヴェンの力を使い、やっとフェアナの腕から解放された。  
咳をして酸素を肺に送り込む。

「げほげほ、ごほ！……ねえ、フェアナ……神さまは？その神さまは何処にいるの」

「お前には関係ないですよね？それとも何ですか？神にでも会い許しても請うのですか？」

書は怒ったように嗤った。

「もう一度いいます〜大人しく帰れ」



彼女の手のひらに光や雷が迸る。

これはヤバイ、前回殺されそうになったときの攻撃に似ている。殺す気だ

「死ね」

光の閃光がほとばしった、ユイは何とか能力を使って受け止める。

「あたしを殺したって変わらないじゃない！」

「神を殺すものは何にしたって許さない！神は消させない！お前は不吉！神の存在そのものを消す！」

消す？

「この世界の者には神には手を出せないようにDNAに刷り込まれている、でも他所から来たお前は違う、特に無心論者のお前はっ」

力が強くなる

何を言っているのかあいからわずさっぱりだった。

確かに神さまとかサンタクローズとか信じていない、でも無心論者とバツシングされるほど無心でもないし、無心論者の何が悪いのか分からない。

「お前は、神に見捨てられた孤児のクセに」

「!？」

気を緩んだ隙に猛襲に耐え切れずに吹き飛ばされた。感覚の無い浮遊空間でも攻撃は当たるし、痛い。現実をしらしめられる。

「きゃあああああ！」

体が放電を帯びていて少しでも動くと思痛が走った。

「知らなかったんですか？お前は、お前の世界の神に見捨てられたのですよ。」

楽しそうにあざ笑う 賢者の書  
神に見捨てられたあたし？

「心の奥そのどこかで、神を憎んでいるんじゃないですか？だから選ばれた。だから神を消すことができるんだ！そんなことはさせない。」

もう一度攻撃が来るのか白い光や雷が集まっていく

「くっ……、！？」

手のひらをかざしてもう一度防御をしようとしたが、力が出なかった。かざしたが何の反応のない空っぽ手のひらの先に微笑むフェアナが見えた。

「力が」

「終わりですね。」

予言の書は微笑んだ。  
構えられていた攻撃が噴射された。

光が、ユイの体を隠すように包み込む。

本当アタシ、空っぽだね

音が遮断された。

## 太郎君と訊問

眠るクナの腕の中で何かが光っていた。

「んー？……なに？」

目をこすりながらクナは起き上がり、光っている物体を見た。

「太郎君？」

それは光を強く放つと、そこから消え去った……。

「……太郎君？」

クナはもう一度ソレの名を言ったが、それはもう何処にもなかった……。

。。。

音の無い感覚、浮遊感、死の気配

アタシは、誰？

ココはどこ？

そこで震えているのは誰？

もう押さえきれないだろう様子だが、必至に何かを抑えていた。背中しか見えない、そもそも、それは 人 なのだろうか？ 白い塊？ 金色の塊？ 何色？ 形すらもおぼつかない。

「なあ、人は死んだら何処に行くと思う？」

え？

そこにいるのは誰？

振り返ればよく分からない人形があった。人形……？ 見た覚えがあるきがする

「なあ、人は死んだら何処に行くと思う？」

さっきと同じことをもう一度繰り返した。アルトの声が耳に心地よく感じた。

そして、それはいつかどこか聞いたことのある声だ。

……天国？

「それはなんだ？どこにある？」

どこ？なに？わからない知らない

「ではもう一度最初の質問をしよう」

―？



ユイはハッキリした意識の中で叫んだ  
キモさ倍増！しかも声が野太いオッサン声じゃなくて女性と男性の  
中性的なアルトなのがもつと不思議

「あつはつはつは！太郎君じゃないぞ？体を借りてるけどな」

「つ、つまり太郎君に憑依してるってこと？誰なの？きみ」

まるで上から糸で吊るされているように太郎君は一定にそこに浮い  
ている。

「そこは、シークレットということぞ」

ええ！？

「ようするに必要ないということ。はい、話戻すぞ」

戻された。

「人は死んだら何処に行くと思う？」

え？そこから？

「天国」

「以外で答えよ」

「ええ！？」

太郎君厳しいのね

「あの世」

「しばくぞ」

しかも凶暴の上に短気!?

「え?」

それまで不変だった景色が雨フル一步手前のような色に変わった。

「ええ、なに?」

「いったたる精神世界だつて」

え?聞いてませんけど?

「時間押してるんだ、こっちは手っ取り早く終わらせたいんだ。思つた以上に阿呆だな」

「ヒドい、質問内容が全く意味分からないのに」

「神は死んだら消える。神には肉体が無いからな、いや正しくは肉体 という呼称する固体が無いだけだが あいやいや、そんなこともどうでもいい」

いよいよ時間でも押しているのか太郎君が揺れている。

「人は死んだら魂となり、記憶を清浄し再び新たな肉体に宿る」

「そうなんだ」

「うわ、殴りたっ」

「なんで!?!」

相づちうつただけなのに!

太郎君がずいっと目の前に寄ってきた。

「わ」



「つまり神は人とは根本的に異なるが、全て万物における共通したものは持っている。ソレが分かれば万事ことは上手く行く」

「ソレって何？」

「それは……自分で考える阿呆」

アホアホ酷い……

「これが無ければ 生きている とは言いにくいかも知れんな。なくとも生きてる奴はいるが本当の意味では…… ああもう、つい話すぎるな」

太郎君のチャックが開くと中から金色の林檎が飛び出てきてユイの顔にぶつかつた。

物凄く硬い上に痛い

「いたあい〜」

「答えが分かつたら、どうにかなるかもしれんし、ならないかもしれない」

どっち？

「それはお前の腕のよりどころだな」

「結局、何なの？どうしたらいいの？」

「退嬰的たいえいてきだはくしじやうな薄志弱行はくしじやうなのも大概にしる」

近い、近いです太郎君、ゴメンナサイ許してそれから離れてください。  
い。(汗)

「くっくっく、お前の選択次第でこの世界は滅びるが、ま一栄一落の理しりだしり気にするな」

「気にする……」

「モタモタしてていいのか？早くしないと、手遅れになるぞ？じゃあな」

それだけ好き放題言っていると太郎君はいきなり重力に負けたように大地に落ちてツーバウンドした。

「えーいきなり?!まだ聞きたいことあるのに〜!!太郎君!!」

太郎君の肩を器用につかんで二・三度ほど揺らしたが意味は無かった。

全く反応なし、仕方ないので右手に持っていた黄金の林檎をもちあげ、唇に近づける。

「……お願い、もう一度、アタシに戦う勇気をちょうだい」

そう、もう一度

もう、逃げないから……

太郎君と訊問（後書き）

進んだり、進まなかったりの主人公  
もうすぐラストパートが近いかもしれません

## 神とアタシ

「神さま〜？何処行っただのです？」

フェアナは何も無い空間をさまようように「神」をさがす。

神は今、まるで後もう少しで火山噴火するというような、そんな危険な状態だった。

ぶるぶるぶる

「！」

そこに何かが居た。

寒いのかまるで携帯のバイブのように止まることなく間を空けることも無く、ぶるぶると背を向けて震えていた。フェアナはソレに歩み寄るとそつとその背中に触れた。

「可哀想な神さま……我輩は、ずっと御傍に……」

例え神さまが何度もおろかな人間を信じ同じことを繰り返そうとも、書であるフェアナは神を裏切らない。神のそばへ、そう神が滅びるまでずつと

「！？……なに！！」

周りの空間が歪んだ。何かに引き寄せられるように流れていく……周りを覆っていた雲が完全に消え去り、周りは晴天の空が見えた。太陽も近い

「お前は！」

そこに立っていたのは、ユイだった。

片手に不細工人形、もう片手に黄金の林檎

「貴様！黄金の林檎を……喰ったのか！？」

「一口だけ、……微妙でした」

「五月蠅い！感想など聞いてない」

あ、すみません

ユイは一口しか食べていない林檎を太郎君の中にもう一度しまっ。どうやら空の上らしいが能力おかげか浮いていることができた。

「やっぱり、さっきの誰かは 神さま だったんだ」

ぶるぶるぶるぶると震えている。

「近寄るな！」

フェアナは黒い雷をユイの上に落としたが、ユイはソレを見向きもせずに歩き出した。

「来るな！くるなああああああああ！！」

フェアナの抵抗は激しかったが、不思議と怖くなかった。それどころか攻撃の動きが読めようになった。能力はもともとこちらのほうが上だから攻撃も当たらない。難なくフェアナの目の前にたった。

「予言とか賢者とかじゃなくて、フェアナは 神の書 だよな」



死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

死にたくないよ！

「怯えてたの？神さま」

死にたくない！死にたくない！みんなみんな死んだ  
毒にやられて死んだ、死んだ死んだ死んだ死んだ死んだ！

幾多も居た神様が今ではたった一人  
死への恐怖と仲間のいない虚無が神を震わせるのだろう。

神は死んだら何処へ行くと思う？

どこへ？

神は死んだら、消える

何処にも行かない、行けない  
どうしようもない悲しみに苛立ち恐怖し焦り狂う。

「死にたくない……？どうして？」

人間よりも長い時を経て長い時を生きて、誰もいなくなった場所で  
只一人生きて、何もできない大地を見つめ人間のおろかさを見つめ  
絶望しながら、人間に仲間を殺されて、ただなす術もないのに何故？

「どうして生きたいの？」

アタシの質問がおかしいことは分かってる。でも、聞きたかった。あたしは、そこまで……孤独と悲しみをこらえてまで、生きたいとは……死にたくないとは思わなかった。

「アタシは、死んでもいい……それがアタシの運命なら。そう思ってた」

朝起きて学校に登校するまでに不慮の事故で死なないかなって自分の死を軽々しく願っていた。

生きたいだなんて、考えもしなかった

「長い時を飽きるまで生きたんじゃないの？長い間失望させられたんじゃないの？なのに、どうしてそんなに生きたいの？ねえ?!」

神が立ち上がりこちらを振り向いた。ああ、なんて立派な馬……

死にたくない、生きたい、貴女は何故死にたい？

声が、ガラスに反響させたような美しい声が響いた。

「っ」

答えることができなかった。

短い時しか過ごせないのに、何故生きようと思わない

「生きようと思わないわけじゃない」

死を望むのならば、同じことでは無いのか？

「同じ……」



そうか、アタシは……死にたかつたんだ……人知れず、誰もあたしを知らない場所で  
でも、生きてる  
神は人とは根本的に異なるが、全て万物における共通したものは持っている。

「これがないと生きていけない……」  
これ？

これは、なに？同じ  
生きていても死にたいと思っっている死んでもいいと思っっているあたしに

もうすぐ死期の近い、死んでしまふのを拒み生きたいと望む神様……

似ているようで違う

「そうか」

心が違うんだ

「アタシ、平気なフリしていたけど、傷ついてたんだ」  
傷つく？

「そう、

アタシね父親は男色に走り、母親は叔父さんとできているらしいし、お姉ちゃんには彼氏を寝取られしかも家には夜な夜な遊びに行っているためめつたに会わないし、お兄さんには家を出てからそれつきりだし、家はもう借金まみれだし、父方の祖母はすでに他界してるし、母方の祖母は縁切つたらしい……お友達はなんかいつの間にか仲悪くなつてバラバラ……先生はきつと私のこと忘れてると思う、だって私にだけプリント回ってこない……。なんてしばしば」

そんなことがたった18年の月日でおきてアタシの心が耐え切れるわけが無かったんだ。

でも、アタシはソレに向かって戦わなかった。今も昔も、重要な…  
…恐ろしいことがあったら、戦わずして逃げてきた。

それが、アタシがアタシを保つ方法だと思ってたから

「でも違った、ねえ神さま貴女とアタシは違っているようで……やっぱり一緒だよ」

そつと神さまの頬をなでる。

「神さま、向き合おうよ。逃げずに……」  
……

太郎君から黄金の林檎を取り出す

「これ、一口食べちゃったけど、全部食べて？」

これは……不死の食物

「大丈夫、アタシ達は一人じゃない、仲間がいるから……」

まばゆい光がアタシ達を包み込んだ。

そして、何も見えなくなる直前に神さまの穏やかな声が聞こえた。

ありがとう……ユイ

見えないと分かっているけど、アタシは微笑んだ……こちらこそ、ありがとう

## 太郎君と家

ちゅんちゅん、憎憎しい晴天の青空を小鳥が飛びまわる。

ああ、生きてる、よね

服がズタボロだフェアナの攻撃は直撃しなかったものの、完全に避けるまでの戦闘センスはユイには無かったようだ。

「あれ？」

体が白く光の結晶になり大気に溶け込んでいく

「ユイ　　！！」

トリユーと委員長とルニソーラだ。こちらに向かって走ってきている。

うわあ、ラストっばいなあ

駄目だよ、だつてアタシ……生きないと駄目なんだよ  
約束、したから

「若草さん！大丈夫？」

委員長がアタシの手に触れたとたん委員長の体にもアタシと似たようなものがうつった。

「きゃ！？」

どす

痛い。委員長酷い人の腕落とすなんて

「あ、ゴメンナサイ……でもどうして？」

「大丈夫大丈夫、たぶん大丈夫」

だって 死 の気配感じないし

「ユイ！」

トリユーに抱きしめられた。

「行くな、……ずっとココにいてくれ」

素敵なプロポーズ

ああそっか、むかしにも体験したな。

「委員長、手」

手を差し出す

「え？」

不思議そうにしながらも委員長はアタシの手を取った。うん。やっぱり

「委員長帰れるよ」

元の世界に、その証拠にトリユーからは光が出ていない。

「そ、そんないきなり……あいさつもしてないのに」

「あつはっは！大丈夫それぐらいでみんな怒ったりしないよ！」

「ユイ！」

トリユーが怒ったように叫んだ

まあ、無視されたら誰だって怒りますよね

「うん、ゴメンね帰るよ……約束、したから」

「だったらオレとも約束しろ、やること終わったら、またココに来るって」

もう透き通りすぎてからだの向こう側の風景まで見えるようになってた。

そろそろ帰るな

「そうだね、考えとくよ」

「おい！」

「あはは！大丈夫、これだけは守るよ、忘れない」

ソレが丁度、最後の言葉となった。

結晶が完全に消え去ったときトリユーは大地を叩いた。

「お前はっいつも！」

「若人よ、待つのもまた愛じゃよ」

「……」

あいからわず、おじいちゃんは空気が読めなかった。

太郎君と委員長を腕に掴んだままユイは戻ってきた。

「ただいま」

誰も返事の無い空間。これが本当に家なのか

「委員長、頑張れ！」

「人事のように……そうね、なんていいましょうか、悩むわ」

委員長はユイの手を離して真っ直ぐ瞳を見た。

「ねえ、私あなたとお友達になれないかしら？」

「へ？」

委員長の頬が赤く染まった。

「改めて言うわよ？私と……友達になってください」

手が差し伸べられる。

「……うん、こちらこそありがとう」

傷つくのが嫌で人と離れていたけど、傷つかない生き方なんて無いなら

もっと積極的になろう

「あ、ありがとう……じゃあ、その……貴女も頑張ってるね」

「うん、真菜も」

「！……ええ、ユイも」



## 愛と別れ

「ユーちゃん……もう、私達友達じゃないから」  
「でも、そうだね」

昔、友達だった二人をアタシは何年かぶりに呼び出し、話し合った。もつと仲がこじれるかと思ったが、月日が二人を慰め、大人にしていた。

「ありがとう、ゆうちゃんズツトもやもやして生きたくなかったから良かった」

「ごめんねユーちゃん、ありがとう……それから」

二人はすっきりした顔で微笑んだ

「さようなら」

アタシが言葉を繋いで歩き出した。振り向かずとも分かる、あの二人も歩き出しただろう……お互いの人生に向かって  
アタシは早歩きで家に向かう

昨日メールしたから全員集合しただろう。

ちなみにメール内容は

『話したいことがあります。家に至急帰ってきてください。全員帰ってこないならアタシは自身を可哀想な少女としてマスコミに売ります。貴方達のこと、もちろん』

という脅し文句

これで帰って無かったらどうしよう……



がちや、鍵は開けてきた、鍵捨ててるかもしれないから。  
リビングに入る……いつもの言葉を言いながら

「ただいま……」

「……………」

つい、啞然としてしまった。

若草家集合

父、巖夫いわお 母、松子まつこ 姉、夏海なつみ 兄、秋治あきはる  
問題一家

全員不機嫌そうな顔でそれぞれ距離を置いて座っている。

「ご無沙汰しています。みなさん」

皮肉でそういうとまず最初に兄が口を開いた。

「こっちはもうすぐ大学卒業で、就職ちかいんだよ、こんなくたらないことと呼びやがって」

奨学金で寮生の大学を選び家から避難していた兄からのまず最初が  
これか……

「まあ、少しぐらい話し合おうよ」

「なあに？男でもできたの？妊娠でもしちゃったならいい病院紹介  
しましょうか？」

この姉、腐ってるな

「お姉ちゃんじゃないんだから有り得ません、テレビ消して」

誰がつけたのかテレビを消す

「アタシ達、家族だよね？」

「なによ、今更みんなで仲良くとでも言うの？」

「そうだね、そうなれたらいいと思う」

昔のようにもう一度、でももう手遅れかな

「無理だ、もう私はこの家の者を愛していない」

「この家の者？女はでしょう？あなたは男に走ったものね？」

「お前は兄妹に走ったくせに！」

「どっちもどっちだっつーの、気持悪い」

「化粧けばいお前のが気持悪いよ」

「なによ！」

どん！！

「!?!?」

机がちよっとヒビ入ったけど、まあいいや

「アタシは、みんなが仲悪いままだと嫌なの！」

「偽善だろ！一人だけいい子ぶった顔して」

「そう思うなら思えばいい！でも違うの！アタシは、ずっと待って  
たんだ」

誰も帰ってこない家で、ひとりずっと……ずっと

「みんなを待ってたんだ」

「だからどうした！同情でも誘いたいのか?!」

「慰謝料でも欲しいのならいくらでも上げるわよ?」

「違う!!違う」

どうして分かってくれないの?

「アタシは、みんなの愛が欲しかったんだよ」

得られない愛を太郎君に注ぐことで、自分と置き換えて心慰めていた。でも

「偽りの愛は……虚しいだけだよ」

太郎君に愛情をいくら注いでも帰ってはこない。一人芝居

「お願いよ、この家に戻れないなら戻らなくてもいいから、お互い、憎しみ合わないで」

辛すぎるよ、そんなの……血の繋がった家族じゃないか……愛し合ってた家族じゃないの

顔が熱くなっていくのは分かるが、枯れてしまった涙は出なかった。

「せめて、聞かせて……昔は愛してくれてた?」

家族を若草家を……せめてソレだけを

「愛してたわ」

母が小さい声で呟くようにいった。

「だから9年前、貴女がいなくなったとき、みんな必至で探したわ」  
「遺跡旅行……皆嫌がったけど、お前だけが賛成して、嬉しそうに走り回っていたなあ」

「……」  
「……」

懐かしそうに両親は目を細めた。

「もちろん、秋治と夏海のことも愛していた。両手いっぱいにな」  
「……父さん、そういつていつも私達三人を抱きしめてくれたよね」  
「……温かかった」

「オレ、お父さんみたいに大きい男になろうと思ってた……本当は」  
「秋治……」

皆涙を気がついたら流していた。  
はじめてみる、皆の涙……。

本当はみんなも、寂しかったんだ……だから、集まってくれたんだよね？

例え、もう戻らない家族だとしても、もういいみんなが分かってくれたなら、みんなが昔愛してくれていたという事実があるなら……

アタシはもう、過去に縋らずに生きていける……

「ありがとう、みんな……集まってくれて。愛していたことを思い出してくれて……」

もう、それ以上は……望まない。

「ありがとう」

前に進もう。

アタシには、まだやることがある……。

「おめでとう」

## 太郎君と停止

「太郎君                    ! !」

太郎君人形を抱きしめる。

嬉しさで抱きしめたわけじゃない

「どうやって向こうの世界に帰ればいいのか、おおおおお! !?」

焦りからだった。

家族仲完全に和解とまでは行かなくとも、みんなの心のつつかえが取れたなら、それでいい。最後の大事な仕事をしようと思ったのだが、人生上手く行かない。

「どうしよう、行く方法わかんない」

おそらくルートはもうココに来る力は残っていないだろう。と考えオーヴェンの能力を使えばいけるとは思うが、移動する方法が分からなければ意味が無い。

「どうしよおおおおおおおおお! !」

「えーい、五月蠅い」

すばこん

「痛い……」

顔を上げれば真菜がそこにいた。

「い、マナああああ」

「ちよつと、いま委員長と言おうとしたでしょう？言っとくけど、高校では委員長やってないわよ」

視界に太郎君が入ったらしい、太郎君をつかんで地面に叩きつけた。

「あああ！ヒドい！」

どうしてそこまで拒絶するのか

「昔、私の誕生日に仕事で忙しくてめったに家に帰ってこないパパに、やっと会えて貰ったプレゼントがこれっぽかったの」

「……へー、それどうしたの？」  
「捨てた」

まさかの真菜との太郎君つながり

しかし、ゴミあさってこれ手に入れましたとは言いがたい。

「まあ、いろいろあって、これ見るとイラつく」

何故

「あ、それよりマナ大丈夫だった？家？」

「ンなわけないじゃない、世間体気になっている家だから警察には言  
つてなかったみただけど、怒られたわよ。ものすごく」

「いいじゃん、愛されてる証拠じゃない」

アタシなんて、いなかったことすらきづかれなかった。

「愛があれば大丈夫、生きていけるよね」  
「なに、悟ったみたいに言ってるのよ」

マナにデコピンされた

「まだまだこれからでしょうが」  
「そうだね」

これから

「どうしよう」

「あ、そうそうまた忘れるところだったわ」

真菜は薄いセーターにロングスカートというシンプルな格好だったが、その服装にポケットらしきものは見当たらないが何処からとも無く紙を取り出した。

「うわ、読めない何語？」

「向こうの言葉よ、クナちゃんが書いてくれたの、最後のページ」

「え、なんかびっしり書いてるよ？上のほうとか絶対涙で字が滲んだ後があるよ?!泣いてるよねえ!?!これ!」

自分を追い込んだクナの努力の結晶

「うるさいったら、読むわよ?」

最後のページ

必ず万物には終わりが来るが、ソレがもし何らかの手によって歪められ、続くようなことがあった場合には、世界は再び変革の時を迎えるだろう。



ま、結局はどう転んでも変わるといことだ。  
それが、死という終焉か生という進化かの違いだな。

「くな、……こんな文章のために……」  
「何の役にも立たないわね……あら？」

真菜が紙の後ろを見た。

「あら……なにか書いてるわね」  
「何？」

移動するなら水曜がいいな、そのほうが流れが分かる

「今日は日曜日……だね」  
「そうね……」  
「なんか意味あるのかな？」  
「さあ？」

今は待つしかないようだった。

## 太郎君と停止（後書き）

これから早くて1週間までは更新出来ないと思います  
もしかしたら忙しい中でも時間つくって更新するかも知れませんが  
ご了承下さい

友よ、さようなら

学校のチャイムが耳に響く。今は一時間目終了のチャイムだろう。久振りの学校はどこか余所余所しく感じた。

「……………」

がら、教室の扉を開ける。

少人数が振り返る、そして「あ」という顔をした。

「！、……………若草か」

「すみません、遅刻しました」

久振りに見た気のある教師に落ち着かない。

「ちよつと職員室にきなさい」

「はい」

素直に教師の背中を追ってついでいく。職員室に入れば懐かしい匂いがした。

本当、なつかしい。

もうすぐ卒業だと思つと少し寂しい

「若草」

職員室の学生が悪い子としたときに書かされる反省文よりの席に座らせられる。

他の先生も驚いた顔をしていた。

「若草」

「はい」

「何故、学校に来た？」

「はい？」

ナゼガツコウニキタ？

その質問の意味も分からずアタシは放心した。

「お前が来なくなつて二日目ぐらいに、先生お前の家に連絡したんだが出なくてな」

「はあ、家に誰もいませんから」

「それでな、今度はお前の両親に電話かけたんだが、でなくて。そうこうしていたら君の姉さんが出てきてな……そしたら」

『 雪衣？あぁ～あの子なら学校辞めるってさ～退学届けだしといて』

「って、確かめようにも本人がいないから……」

「そう、ですか」

そんなこと、あつたんだ

って、そんなことで学校って辞めさせれるの？

「じゃあ、アタシは」

「退学者だ」

先生はあんまり残念そうではない声で顔だけそのような表現して  
「私の力不足ですまない」

と短く言った。

めんどくさい生徒がいなくなって、せいせいした声だ

「……………いえ」

アタシは下げている顔を上げた。

「ありがとうございました」

とぼとぼ、

悲しいはずだけど全く何の気持もわいてこない……………その方が悲しい。  
あはははっ……………

「ユイー」

「あ、真菜」

二人並んで歩く

「気がついたら退学……………ふ、不憫ね」

「うーん、あと少しだったんだけどなああはは……………」

沈黙が流れる。

向こうの世界が夢ならココは正しく現実だ。しっかりと地に足がついている感触がする。

「それでもいいよね、うん」

「よくないでしょう！これからどうするの？就職とか考えたの？」  
「全く」

平手で叩かれた。

「明日水曜日じゃない」

「うん」

「アタシ、向こうの世界に行くけど……真菜は？」

「ん？」

「真菜は行く？」

そしてアタシは帰らないつもりでいる。この考えはきっとは彼女にも届いていると思う

誰も知らないところでたった一人でひっそりと死のう

そう思っていたあたしだけど、これまでに沢山の仲間ができた。沢山の踏ん切りがついた。

アタシにとって本当の友達となってくれた真菜に

「ユイ、……私」

「うん」

「私はこの世界からはなれることはできない。ごめんなさい」

ハッキリした別れがしたかった。

「うん」

アタシは最後に微笑んだ。

さようなら。

アタシの親友ともだち

「アタシはあたしの道に行く。真菜も……頑張って」

「ええ、……ユイ」

抱き合う。

女の子と真剣に抱き合うのって照れるなあ

「さようなら」

「うん」

肩が涙で濡れる感触がした。

お別れは悲しい、でも……大事なものがあつたのだと全身で感じられて、嬉しかった

ありがとう、真菜

あたしは行くよ

友よ、さようなら（後書き）

なかなか忙しく復帰できそうにありませんがどうか心広くお待ちしててください。

祝 お気に入り件数30件突破！  
嬉しい限りです^^



## 太郎君と離別

いよいよ、水曜日になった。

「感じる」

オーヴェンの力の流れを掴むことができた。

大丈夫、いける

でも……

「……ごめんね」

太郎君の頬にそっと触れる

アタシは、新しいアタシになりたいから。過去のアタシの象徴である君は連れてはいけない。寂しいけど、お別れね

「今日で太郎君とお別れ」

太郎君を思いつきり抱きしめる。

「ありがとう太郎君、大好きだよ」

愛しい人形を机の上に置きながらアタシは別れを告げた。新しい世界へと、飛びだったのであった……

「つとあつたつたつた！？」

奇声をはなちながらユイはゴミ箱にお尻をはめた。否、はまった。

「……………なつつかしいー」

家と家の隙間から見える風景は今も昔も変わらない。前は夜で綺麗な月が見えていたが、今は朝だから月も見えない。とりあえずゴミから抜け出す

「うっわぁー、ミニズボンはいってくるんじゃんかったなぁー……………生脚にバナナの皮が！」

体にくつつついてきた生ゴミをほうり投げる。ゴミをのけながら家と家の隙間から身体を自由にさせた。  
そして、啞然とした

「……………」

酷いありさま

家はところどころ崩壊し、木々は薙ぎ払われ、人々は怪我人を運んだり戦へ向かったり……………戦争シーンでよく見る風景だった。

「ええ〜ん！ひつくひつく、ええ〜ん〜」

赤ちゃんが乱暴にそこに横たわっていた。

「よしよし！いいいいい」

ユイは動いた。本能的にこの子を一人にしてはいけない気がしたからだ。

泣きじゃくって答えないか弱いこの生命を抱き上げる。

「にげろおー！敵だああああ！！」

その声が上がると村人は一目散に坂の上を上がっていった。

「え？ちよ、なに？！」

とつてもカオス

いきなりの急展開に話がついていけない。分かることは逃げることか

「うん、逃げたほうが良さそうだ！逃げよう！」

でも何処に？！

「あうあうあう〜」

ぐるぐるとあつちらコツチら進路方向を変えていると、泣いていた赤ちゃんも泣き止んで小さく「おえ」といった。

「ああああ！ごめんね！やめるからゲロらないでね」

背中をトントンと軽く叩く。

やれ、どうしようか

「へべの木まで逃げろー、あそこで騎士様が待機しているはずだか

ら

「待機！？騎士なら市民の安全を守るのが先じゃないの！？」

憤慨していると、せつかく泣き止んだ赤ちゃんがくずりだした。やっべー！

「よしよし、へべの木に行こう！ね」

そう微笑むと赤ちゃんが心なしか安心したように思えた。  
この子の親、捜さないと……

到着早々、大変なことになったなとユイは走りながら考えた。  
へべの木までなんとか辿りついたのは良かったが、人が多すぎて前に進まなくなった。どうやらへべの木の、さらに上を行けば貴族の町で……そこに避難するはずだったが、貴族の人たちが拒絶したらしく、話はややこしいほうに動いたらしい。

「あの、すみません。このコの親知りませんか？」

混乱する人の中でなんとか人を捕まえて赤ちゃんの親を探すが見つからない。

そのうちにまた赤ちゃんが泣き出した。

「おおおおおおおお！？」

赤ちゃんの世話なんてしたことも見本を見たこともないから、何をしたらいいのか分からず困り果てる。

「なに！どったの！？おなかすいたの？困ったなあ〜母乳でないよ」

ミルクビンだってもってないしね！

「すみません、あの」

赤ちゃんを抱いた若い女性の肩をつかんでこんなことというのは恥ずかしいけど、言うつきゃない！

「母乳ください！！」

ええ、後悔しましたとも

でも母乳を貰って大満足した赤ちゃんなのでした。

## イチルと出会う

「いて、いたた！」

足！足踏んでますよ！？誰か知らないけど  
べべの木がこんなに人でいっぱいになるのはめったに無いと思う。

「皆大丈夫かなあ」

ミットガウンが劣勢なのだと、聞かなくたって分かる

「ああーんあうばうばう」

赤ちゃんが泣き出す。これだけ人にぶつかっていたら仕方ないか。  
何とか坂の上へ上がったが、オリのような門が進路の邪魔をしていた。

「なにこれ！？」

こんなのあったら通れないじゃん！

「入れるこのやろうー！」

「騎士がなんだ！国民のための騎士じゃないのかー！」  
「助けてくださいー！」

下町の市民は必至に声をかける。  
門を押さえる兵士も苦々しい顔をしていた。

「あそこに見えるわ」

苦々しい顔をして市民を見つめる見知った顔があった

「ゼシル君！」

「ユイ!？」

心底驚いたような声を出してから、眉をひそめた

「何故ココに、その赤子は？貴女の子ですか」

「いつ産む暇あるのよ、違うに決まってるでしょ」

アタシそこまでハイスピードに生きてないし

「お願いみんなを入れてあげて！分かるでしょう？敵が来ているらしいの」

「無理です」

ゼシルはきつぱりとはつきりと容赦なく即答で断った。

こつこつ融通の利かないところに腹が立つ

「どうして…」

「タイミングを逃したのでですよ！貴族のわがままで入れることを拒絶した時点で市民は苛立っている。いまさら中に入れたところで、苛立ちが収まるわけが……」

「入れないほうが苛立つに決まってるでしょう！馬鹿」

「ば!？」

騎士殿はシヨックを受けたらしく、言われた言葉を繰り返していた。  
まあどうでもいい

「お願い、あたし達を……守って」

「……。すみません、混乱さなかココを空けるわけには行きません。ココから先には城もあるのです。我々はまず城守らなければならぬ」

ゼシルはそういつて頭を下げた。

どうしようもない怒りが心の中をめぐりまわった。

「……………っゼシルの分からず屋！おたんこなす！！」

国民の苛立ちと恐怖は募りに募り、爆発寸前だった

「あけるよ！見殺しにする気か！」

「ふざけるなー！」

「散々人を見殺しにしてー！」

ずどーん

「うわあああああああああ！！！」

地震のように大地が揺れ動いた。

「敵だあああああああああ」

その声が響き市民の緊張がピークに達した

後ろの人構えの人を押し、前の人しがぎゅうぎゅうに押し付けられる。

「……………っ！いった！うぐぐぐ」



赤ちゃんだけは守らなければ

「ユイ！」

「この子を……お願いゼシル」

力を使って門に穴を開けた。そこから赤ちゃんをくぐらせゼシルの腕に抱かせた。

「くう、う……駄目だ、苦しすぎて力が使えなっ」

使えたとしても、こんなに混乱しては何処に移動させても無駄なようだ……とにかく落ち着かせないと……オーヴェン力を貸して！

薄いシエルダーのような膜がユイから放たれ、人々の頭上をこえて困んでいく、人々はソレにきがつき不思議な顔で眺めた。

（よし、押す力が緩んだ！）

力を使いユイは空を飛んだ。ソレを見た人々はおおつと声を上げた。敵を追い返せばなんとか落ち着くはず

戦車に乗った敵軍がベベの木の坂の前までやってくるのが見えた。

「ベベの木に近寄らないで！」

戦車を動けないようにする、すると異変に気がつき戦車から降りた兵士がこちらを確認すると、住を発砲してきた。

「わわ！」

避けたのはいいものの、バランスを崩してベベの木の上に落ちた。

なかなか落ちる速度をとめることができず、結局ベベの木の根元にまで落ちた

「だらしのないなあ〜アタシ」

しかも今ので能力が途切れたらしく戦車がまた動き出した。

「やばいやばいやばい!」

ユイはまだ能力を自分のモノにできていないのであった。戦車の銃口がこちらにセットされた。うん、これは言われなくとも分かる。

ターゲットはアタシですね!?

「きゃあああああ!?!?!」

変わるって決めたのに〜!!

「邪魔だ」

目の前にスレンダーな女性が立った。女性だがその短い髪に大きなゴーグルに啜えた煙草で男性のようなワイルドのイメージを持ってしまった。

「だ、だれ?」

声をかける頃には彼女はそこにはいなかった。

どっごおおおおおおおおん

戦車が一つ潰れた。

炎だけが戦車を燃えあげさせる。

しゅと、  
いつの間にか横に彼女は戻ってきていた。汚れ一つ全くついていない。

「はやっ……え？あのー」

煙草だけが轟轟と燃え、灰と化して口から零れ落ちた。

「ちっ煙草が……最後の一本だったのに」

悔しそうに声を出した彼女がやっと（たぶん）こちらを見た。

瞳は深いゴーグルの色に隠されていて、彼女の表情を汲み取るのは難しい。

「あんだよ？」

かっこいい女性のイメージから粗忽な女性のイメージに早や変わり。

「あの、誰？」

「ソレばっかだなお前」

じゃあ答えてくださいよ

「俺は『イチル』だ」

ソレが彼女とアタシの出会いだった……

赤ちゃんとアタシ

『俺は『イチル』だ』

つて、かつこいー

女だけど

「お前……」

彼女が腕をつかんだ

え？

「弱いならスッコンデロ……」

ぶん……！

「ええ！」

ビュー　　ん！

「うきやあああああああ……！……？……？」

投げられタアアア　　！……？

力を使って空中で踏ん張る。てか人をココまで飛ばすほどの腕力を持つてるっていったい何者……！……？

前方の戦車をやられた



れを直視した騎士達のあの驚いた顔は凄かった……

オリが壊されると国民は城へと我先にという感じで向かっていった。

残されたあたしとイチルとゼシル

「あ、ゼシル君赤ちゃんありがとう」

大切な赤ちゃんを返してもらおう、と同時に赤ちゃんにまかれていた布が落ちた。

「この赤ちゃん……綺麗な銀色だ」

「あん？そこにいたのか」

イチルが横から覗いてきた。

「え？貴女の子！？」

「んなわけあるかよ、連れだ……良く言えばな」

イチルが取り上げようとすると赤ちゃんが急におお泣きし始めた。

「……………」

「びええん」

「ああ！よしよし」

イチルの傍はいやと泣くかのようにアタシに必至にしがみつくと赤ちゃん。

「何したの？」

そういつてイチルを見れば彼女は口だけ笑った。

「お前には関係ねえな、ま、欲しいならやるよソイツ」  
「赤ちゃんなのよ!」

物扱いするなんて

「じゃあお前が母になってやれ。俺は何も知らん」

城のほうへと足を向けたイチルの腕をつかんだ。

「アタシ、赤ちゃんの世話の仕方なんて知らないんだけど!？」

「俺もしらねえし」

二人でゼシルのほうを見た。

「……え?! いや私も知りませんよ!」

「そうだな、城に行っても給食にはありつけられないだろうし……ソイツのところでは厄介になるか」

「なっ!」

「アーそれいいかも」

「ユイまで!」

お願いコールをしていると折れた。

よっし

そして案内された場所はお城に近いすごい豪華な豪邸だった。

庭とか広いし、そこにまた一軒家を建てれそうな広さだ。一言で言えばスゲーって感じ

「ゼシルヴァン帰ったのか」

お髭のスゴイおじ様が姿を現した。

「全く平民どもの声の五月蠅さには参らされる。ワシも足さえ良ければ再び戦場を駆け回ったというのに……不甲斐無い」

若い執事に渡された杖でこちらに歩いてきた。

「ん？誰だ貴様ら」

初老にはいろつかとする年齢らしく、目が少し見えなかったらしい。ユイたちの姿が見えなかったようだ。それから、彼の凝視するものはアタシたちではなく、アタシの腕の中にいる赤ちゃんだった。

「……」

あたしを見た

「……」

もう一度赤ちゃんを見て

「ゼシルヴァン」

ア、なんかこの後言うせりふ分かったかも

「どちらがお前の妾だ？」

そっちか

「どちらも違いますよ！彼女は友人です」



イチルとは他人だけど彼女もそうなんだよね、と一応言ってみた。

「勝手にワシの家に招きいれよって！誰の了見を得て動くんだ」

「父上、いいではありませんか、彼女は……」

「漆黒の色なんぞ、見たくもなかったわ！出て行け」

杖を投げつけられた。

アタシはともかく赤ちゃんが！庇うために背を向けたが、痛みは感じなかった。

「!?!」

ゼシルが目の前で守っていた。

「いい加減にしてください、貴方に人の情というものが無いのですか」

「オメーも無かったけどな」

ぼそつといったイチルにシーと指で口を押さえた。

「何だ貴様、この父に逆らうのか」

「おい坊ちゃん、言っつてやれ」この老いばれ爺」

アタシはとりあえずイチルの口を押さえた。赤ちゃんですえも泣かずに静かなのに

イチルはその行為に不満げに口を尖らせた

「でていえ」

「まあ、アナタ……何を騒いでいるの？」

老いた父親に似つかわしくない若い妻が現れた、腕には大量の美しい花が摘まれていた。静かに夫に近寄るとその肩にそつと触れる。

「気持を昂ぶらせては駄目、お医者様にも言われたでしょう？ 聞こえてらして、アナタ」

若い婦人がそういうと、彼はうめくように頷いた。

「レイナーさん」

「ゼシルヴァンさん、お父上はアナタが騎士となられてそれはお喜びになさったの分かってらして？」

「分かってます、ですが私は」

「アナタは何一つ分かってませんわ！ なら何故、戦場に向かわれないの」

ゼシルは拳を握り締めた

「女のワタクシが言うのは図々しいと思いますわ、でもお父様の気持も分かってください！……さあ、アナタもう行きましょうお身体に障りますわ」

ゆっくりと歩いていく二人を見ながらゼシルは何も言わず、握り締めていた拳を開いた。

「私は駄目な存在だ……亡くなった兄上や母上の言ったような強い者にもなれず、父上を落胆させてばかりだ」

「ゼシル君……」

ユイはゼシルの腕をそつと握った。

「大丈夫だよ、いつかきつと強くなれるよ」  
「根拠あんのかよ」

後ろから痛い指摘がやってきた。

「よく言うじゃない、念ずれば花開くって」  
「知らねーよ、祈って強くなれりゃ苦勞はねーし」

イチルの言うことは最もだが、空気は読んでもらいたかったな！

「いいんだ、私は私なりのペースで行くから」  
「それこそ、何を根拠に言ってるんだよ」  
「イチルさん！空気読もうよ！」  
「あんな」

二歩後方に下がっていたイチルが前にやってくるとユイの頭をデコピンした。

良く見ると、あたしとそう変わらない身長だなぁ〜にしてもこのデコピンかなり痛い

「強くなるのに、時は関係ねんだよ」  
「はい？」

イチルは溜息ついた。

「おい、坊ちゃんそもそもオメー、なんで他人に合わせる必要が何故あるんだ」

「！」  
「望まれてるからそうなりますじゃネーだろ、自分の得意分野で上

目指すのが男ってもんじゃないのか？ああ？」

「イチルさん、言うことまともなのに言い方ぶりよ……いた！」

デコピン二発目

「……すまないが私には、君のいいたいことがわからない」

「あっそ、もういい俺には関係ねーしな」

興味なくしたように腕を組む

「で？俺らの部屋何処だよ」

彼女はビククリするほど凶々しかった。

与えられた部屋は三人で一部屋だった。赤ちゃんと同じ部屋なのは嫌そうだったイチルだけど赤ちゃんが静かにしてたからか、何も言わなかった。

「ねえ、イチルさん」

彼女はめったに話しかけても返事が返ってこないことがカレコレ一時間の間で判明した。

窓際に座ったまま一言も発さない。

「この子なんて名前なの？」

「……………」

はい、無視

「あ、そういえばアタシの名前言ってなかったね。アタシユイです」

「・・・・・・・・・・。」

はい、無視

「えーつと、イチルさんどこ出身かな？」

「・・・・・・・・・・。」

とことん無視

「イチルさん、帽子とらないの？ぼんぼん帽子」

「ヘルメット帽だボケ」

はい、む……し、じゃなかったけど酷い。

「なんで無視するの!?!」

はい、死・化・戸！！

話しかけるのを諦める。ワンルームにしているシャワールームを見て感激をする。ベットもふかふか絨毯だつてふかふか、天井はシヤンデリアがぶら下がっている  
まさしく

「びば・成金!?!」

「うるせえ!?!」

「ごす!」

イチルにヘルメット帽子を投げつけられた。  
危ない危ない、今ので赤ちゃん落とすところでした……（汗

「あれ？つてあああああ！?!?!?!」

イチルの短い髪が風に靡いていた。

「な、なんで？」

彼女の髪の色は……

アタシと同じ、『漆黒<sup>クロ</sup>』だった……

赤ちゃんとアタシ（後書き）

太郎君卒業、そして赤ちゃん^^

## 泥棒と女官

「い、イチルさん」

「ああん？」

窓際から立ち上がるとベットに入り込んだ。

「ゴーグルのけないの?! じゃなっくつて」

イチルの上に乗った

「ぐえ!？」

「アナタも漆黒の使者なの?!」

「んだそれ? しらね! …… つよ! ……」

蹴飛ばされた。おおわ!?! 隣のベットに落下、すごいコントロール

「俺は寝る、邪魔するな。邪魔したら殺す」

そっいつて静かになった。なんとという横暴な人でしょう。

「……ん？」

赤ちゃんがよだれたらして放心してる

「あ、お腹すいたの？」

ていうか、大丈夫?



キッチンへと移動した。

どうやらこの赤ちゃんはイチルがいるときは泣くのを我慢していたらしく、部屋を出たとたん到大泣きした。

「よしよし、あのーすみません」

ひょいっと顔を出せば給仕さんが一人。若い女性で隅っこでしくしく泣いている。

今夕暮れだからスツゴイホラー

「あ、のー？人間ですよね？生きてますよね？」

「は！？ああ、はい？」

涙を手で払いながら笑顔で振り向いた。ピンクの髪が桃に見えて、桃食べたくなっちゃった。

「どうか、したんですか？」

目の下に、クマできてますよ？……怖い

「ええええん」

赤ちゃんも更なる恐怖に涙する、じゃなくてお腹すいたのかな？

「あら、まア大変オムツですね」

彼女はそそくさと出て行くとさつと戻ってきた。手には布オムツ赤ちゃんを机の上に乗せると手早くオムツを取り替えた。

「手、手馴れてますね」

「ええ、私こうみえて7人姉妹の次女なんですの」

何歳ですか？というより、そこは長女じゃないんですね

「どうして、泣いていたんですか？」

「ええ、……ぐすん。私の妹達は各国に奉仕に出てるんですが、戦争で連絡がつかなくなっていて……」

「大丈夫ですよ、きっと」

「そうでしょうか？」

「はい」

そう微笑むと、給仕らしき女性が三人ほど出てきた。そこで一人の中年女性が驚いた声を上げた。

「ま！カーミル様！何故このようなところに?!」

「ええ?! 宮廷女官長様まじすごいんですけどー!？」

「うそおー！会えるとか超嬉しいです」

二人の若い給仕さん、なんだか今時風な会話だね

「ああ、すみません。貴族の方々に穀物を分けていただくという方針が決まったので……黙っていたいただきます」

「いやいや、駄目なんじゃないの?!」

あれ?!この布オムツどこから!?

「国王陛下の勅命ですから。ちなみに、ゼシルヴァン殿を御呼びびしていただきましたよ?」

「わ、わかりました!」

給仕たちが走り去っていく

「……………国王陛下?」

「ええ、レイモンド国王……………最近政権交代なされたのに、こんな風に戦争ばかりでお可哀想に」

カーミルは立ち上がるとサンタクロースが持つてきそうな袋を泥棒のように持ち上げた。

「……………女官長つて大変ですね」

「え? ああ、ふふ……………国王直属ですからね、いろんな仕事をするだけですよ」

「あの、アタシも城に連れて行ってくれませんか?」

「はい?」

国王なら、話し合えば戦争をやめてくれるはずだから……………あたし話し合いたい!

真に迫る表情でカーミルを眺めていれば、彼女は微笑んだ

「では、明朝ゼシルヴァン殿とご一緒に同行してください。陛下には、私が言っておきましょう」

「ありがとうございます、カーミルさん!」

「いえ、そついえばお名前は?」

「ユイです」

彼女はもう一度微笑むと窓から去っていった。

うん、この世界の女性って、本当……パワフルだよね！

結局イチルが黒髪で『漆黒』がどうか聞けなかったけど、どうゆうことなんだろう。コノ世界に黒髪が一人もないわけじゃなかったとしたら……

各場所にて『漆黒』の続きが違うというのも頷ける

アタシと彼女……どちらが『漆黒の毒婦』なんだろう

それとも、全くの無関係なんだろうか  
分からない

気がついたらアタシは……ベットから落ちていた。

## 赤ちゃんと脱出劇

皆戦ってる。アタシはどうしたらいいんだろっ

「ユイ黙ってきたけど良いのかい？」

「ん？イチルさんのこと？」

オニギリをほおばりながらアタシたちは城へと向かう。いやー並木道ならぬ金持ちハウス道ですなーむしろ道が狭く感じるよ

「大丈夫大丈夫、どうせお城とか興味ないと思う」

知らないけど

腰につけていたポーチから哺乳瓶を取り出す。このポーチは向こうから持ってきたものだ。それにしてもこの世界の絶対の掟が知らないけど、女性の服は絶対肌を出さない、なのか……用意される服は絶対長袖ロングスカートだ

イチルさんは露出激しい服と思う。そのかわりブーツは足の膝上まであったけど。この国ではあまり見かけないミニズボン……デニムっぽいのはいてたなあゝあたしもほしいなゝ

「ユイ？」

「ん？」

哺乳瓶を飲ませた後背中をトントンと軽く叩いてげっぷさせる。手探り状態だが赤ちゃんの世話も慣れてきた。名前どうしようかなゝ

「ユイ、ここからは城だから」

「ああ、うん。奇声発するな、でしよう？分かってるよ」

でも感動したらいつちゃうと思うけど。

赤い絨毯の上を歩いて渡り、謁見の間へと通された。

「あれ？」

王座には誰も座ってなかった。

いないじゃーん

「あ、すみません。お早いおつきですね。少々お待ちください」

そうカーミルがいうと笑顔で去っていった後、ばっしいいいいい  
いんと何かが思いつきり叩かれる音が響いた。アタシとゼシル君は  
苦笑いするしかなかった。

「いたったった」

金髪のロン毛がよれよれの状態で出てきた。思ったよりも、若い

「よう、来たなゼシル」

そしてフレンドリー

「陛下が御呼びとのことでは……何用でございますか」

「おう！前線で戦っているウォーレンをちょっと呼び戻してきて欲  
しい」

「私が、ですか」

「お前だ」

何この二人の会話

突っ込みたい……我慢我慢

「ところで、お前の隣にいる女……お前のこれか？」

小指立てる

「ち、違います！」

「オーオー、照れちゃって〜」

ニマニマ喜ぶ王様、北帝国の王様とは大違いだな。向こうは落ち着いてキザだったけど、こっちはチャラっぽくて野暮

「あの、アタシ王様とお話したいのですが、いいですか？」

こうゆうのって、勝手に喋っちゃいけないかった気がするけど……まあいつか

「お前がユイか、カミルから聞いている。なんだ？話せ」

面白いものを見るような目で品定めしてくる。恐らく試しているのだろう

でもアタシはそんなに高貴なものじゃないから、気にしないで言いたいことだけ言おう

「戦争をやめてくれませんか」

「無理」

ココの人たちってムカつくぐらい即答するよね

「まあ、そう睨むなって〜わけがあるんだよ〜」

へらへらと嗤う陛下

「国王は君臨するけど統治はせずってな」

あれ？どっかの世界史で聞いたことあるような〜？

「なんでか政権は導師ストネット＝アルバージンにある」

わー本当に不思議ですね〜ふざけんなー

「つーわけよ」

「え？今ので説明終了!？」

全く訳分らないよー

「それより、俺が気になるのはお前の髪の色だな」

「?」

「『漆黒の毒婦』だろ？ソレに会いしだい『殺せ』と俺は命令しなくちゃいけないんだが」

「……殺しますか？あたしを」

真っ直ぐに見つめれば陛下は八重歯を見せて嗤った。

「『規則』<sup>ルール</sup>だからな」

指をアタシに向けて鳴らした。その場に居た兵士全員がアタシに刃を向ける



「……つて、またなの！？ゼシル君」

君何回アタシ裏切るよ！？

「えええん」

「ああ、ほら赤ちゃんも泣き出した！」

ゼシルを見れば

「すまない」

またかーい

その悔やみ顔いらなから！ある意味君清々しいから！  
絶体絶命のピーンチ！！

「陛下」

カーミルが間にはいった

「ん？」

「ユイ殿が持つている赤子、もしかしたら大三帝国のうち一つ、  
デズヘイムール大国』の王族ではないでしょうか」

「マジで?!」

アタシが一番ビツクリだよ！

「6番目の妹の情報によりますと、最近王国の末姫が攫われたと」  
「ひ、人違いですよ！きつと！だってアタシそんな国しらな

「……」

『あん？そこにいたのか』

『んなわけあるかよ、連れだ……良く言えばな』

い、イチルさん                   ！？

「おいおい、そんな可能性のアル子どもがうちにいたら、ますます三国ややこしくなるじゃねーか」

陛下が困ったような顔をした。でも困った顔になる。

「大三帝国全ての戦いになりそうですわね、題するなら『大三帝国戦争』でしょうか」

「カーミル、まんまだぞー」

ああ、アタシって、アタシって……本当に災いを呼ぶ『毒婦』

がっしやああああああん

天井のガラスが破られ上からガラスの破片が落ちてくる、ユイはとつさに能力でガードした。

「何奴！」

どん、上から何か落ちてきた。

「俺か？俺はな                   ……『イチル』だ」

赤ちゃんが泣き出した。

イチルさん、空気読めないにもほどがあるよ？

アンコウ大きいな

「面白いことになってきたな」

「いやいや面白く無いからね！」

ぐい

「うわ」

同じ身長ほどのイチルに身体を持ち上げられた。  
スゴイ腕力、そして、すごい足腰だ

「ちょ、イチルさん、何処に行く気!？」

「しらね」

「ええええええええええええ!?! ちょおおおおおおお」

兵士を蹴倒し扉を破壊

完璧贖罪の猶予無しだよねええ!?! これ

気がついたら、森の中でした。

「はっつ」

赤ちゃんが人の顔をべたべたと泥のついたで触っていた。

「……やめて〜」

抱っこすればきゅっきゅと喜ぶ

身体を起こせば湖を見つめるイチルが居た。

「イチルさん、なんで赤ちゃん攫ったの？この子には罪が無いはずだよ」

「俺にも、罪は無かった」

え？

イチルさんは恐らくゼシル家で盗んだと思われる煙草をふかしながら静かにそういった。

「お前も身に覚えあるだろ、『漆黒』だから呪われてるってな」

「赤ちゃんには関係ないと思うよ」

「……ふ、そうだな。そいつ自身には無いな、そいつも俺と一緒にだ」

「あのー、浸ってるどころ悪いけど、全く意味わかんない」

イチルが煙草を湖に放り投げるとデニムっぽいズボンのポケットから紙切れを取り出した。

「……」

「え？イチルさんもしかして説明終わり！？」

変なところで寡黙な人だ。もう言いようが無い

「はあ」

がさ

「ん？」

イチルが紙をポケットに突っ込みながら立ち上がった、ポケットからキセルを取り出し火をつけた。  
あなたベビースモーカーですか？

「って、何処行くのオオ!？」

さっさと歩いていこうとするイチルの腕をつかむが気にせずスタスタと歩かれる。

「うつせえなあ、俺は俺の道に行く。どの道、俺とお前じゃ何の縁もないしな」

「そんな今更困るよー!？」

「お前変な力あるならそれで国の一つや二つぶっ飛ばして恐怖制裁くだしゃあいいじゃねえか」

「それじゃ駄目なんだよ!!」

アタシの大声にビツクリて赤ちゃんが泣き出してしまった。  
しかしイチルも立ち止まった

「駄目だよ、力だけじゃ……アタシ達は『心』があるんだから、話し合えば分かるはずだよ」

イチルが振り向いた。見下しポジション

「阿呆か」

そして歩き出す

「ああああああ」

「寝言は寝て言え、せめて俺のいないところで勝手に言ってる、むしろ永久に喋るな。それがいいそうしろ、できないなら永眠してる。なんかめっちゃくちゃ酷いこといわれてる。」

「じゃあイチルさんは、何処に向かって生きてるの？」  
「……………」

はい、シカト

「イチルさんは、戦争を望んでいるの？」  
「あのさあ」

もう一度立ち止まり、座り込んだ。背中しか見えない

「俺がいつ戦争の話したよ」  
「え？あ、本とだ」

戦争の話なんて一回もしてなかったわ、あははー恥ずかしい

「……………きれいごとだけじゃ、国は守れないんだよ」  
「え？」

イチルは煙草の煙を口から吐いた。空に向かって出された煙は大気と化して消えた。

「口だけならどうとも言える。お前は言葉だけで人を救えるか？そんなわけないだろ……………だからお前は変な力もってるんだろ。その力、お前は何のために使う」

「分からない」

即答すると、彼女の手が止まった。

「正直分からない、あたしが何をしたいのかどうしたらいいのか。でも分かっていることは一つ。『挑みたい』の、もう……逃げたくないの」

「何に挑戦すんだよ、ばーか」

後ろ頭にズツキされた。

「ようは、強くなりたいんだな」

「え？あー、うん多分」

わかんないけど

「じゃあーそうだな、よし」

立ち上がった

「俺が、鍛えてやるよ。武術は習っておいて損はないぜ」

「え？ああ、うんありがとう」

手を差し出されその手を取る

うん、なんでそうゆう流れになったんだろう……イチルさんって……  
…聞き取り能力無い？

「とりあえず、この国出るぞ」

「ええ!？」

なんですと

「どうせ追われるのには慣れてるしな」

「いやいや、わけがわからな……」

湖からアンコウが出て来た。

ありえないぐらいでかいおっきなお魚

「えー」

もう、ホント

ばっくん!!!

何かなにやら……え!? 喰われた!



## アンコウ大きいな（後書き）

お気に入り件数40件突破！ぱふーぱふー（効果音）

愛されて五十話きました。

はい、まったく戦争に關与できてません！

せつかくできた仲間と出会えない、やっぱり不幸な主人公ですが、

みなさん絶えず応援してください^^

なにか（はやく元キャラ出せ・戦争終わらせる・ギャグないぞー等）

コメントがあればドウゾ！

## 赤ちゃんの名前

「アンコウの口の中って息できるんだね、っていつか……洞窟みた  
い」

「うえええん」

「え？何で泣くの？！お腹すいたの！？ああ、痛い！こけた」

薄暗くていまいち周りが見えない。いや、見ないほうがいいのかも  
しれないけど

「お前等、うるさい」

不機嫌そうないチルの声だけが聞こえた。

「明かり」

「ちっ」

小さな煙草の明かりが灯る

「……うわあ、安心〜こつゆづの、なんてゆんだっけ？」

赤ちゃんもきやつきやと泣き止んだ

「あ、風前の灯！」

「死ぬのか？」

あれ？

ぷうつつ！

うわぁー、吐き出された……

「なんかシヨック」

さぁぁぁ

少しだけ強い風を感じ顔を上げた。

「わぁ」

山の上

「え？」

さつき水の中移動中のアンコウの口の中にいたよね！？

「ええええええええええ！？」

「うるさい」

ごん、と頭を殴られしゃがみこんだ。駄目だ、今は痛い

「きゃつきゃじゃないからね、赤ちゃん、あ、ねえイチルさん」

「イチルでいい、気持悪い」

「ええ今更!？」

本当に酷いなこの人

「じゃあ、いひる……ごほん！イチル」

あ、でも返事しないんだ

「このコ、なんて名なの？」

「しらねー」

知ってようよ〜

「ん？」

花が、綺麗な色の花びらが舞うように横に流れていった。まるで桜吹雪のように優しく美しく儂げなその温かさ  
花びらは止まることなく山の下まで飛んでいった

「綺麗〜ここなんていうの？」

「ノルン神山……『ヴェルザンデイ』」

「すごい、立派な名前……立派過ぎて聞き取れなかった」

すごいあほを見るような目で見られた。といってもゴーグルで分からないけど

「そうだ、あかちゃんの名前……ヴェルザン……デイ？からちなんで『ヴェルザ』って呼ぼう」

「ちなんでねえし、まんまじゃないか」

「い、いいんだよ！だってこの子には本名あるはずだし、いずれは本当の親のところに戻さないと」

きつと、この子のこと待ってるはずだから

「好きにすればいい、しっかし、あんま跳ばなかったな」

跳ぶ？

「ここミットガウン帝国とヴィルエールフ北帝の境だ」

「へー」

「お前、とことんあほだな」

「へえ？」

殴られそうなので口を閉じる

「つまり、ココらへんで戦争の摩擦がおきるってこつたるうが」

「？」

「ここが、戦場になる」

「！」

戦争

「今はお互い休戦中だな、よしユイ」

イチルがそこらへんの木に垂れている鳶を器用に集めると、繭のよ  
うなゆりかごを作った。

「ここに餓鬼おけ」

「？うん」

置くとウトウトとしてすぐさま眠った。うんうん子どもは良く寝た  
ほうがいいんだよ  
多分

「ほい」

木の棒を渡される。

うん、意外としっかりしてる

「イチルこれなーにいいいいいい!!??」

クー ポコじゃないけど変な甲高い声が出ちゃった。  
だって

「いいいい!!? ななな」

木の棒を狙い攻撃を絶えず加えてくるイチル、動きが早すぎて追いつかず、力も技が重過ぎて返すことすらできない。

「おら、特訓だ」

いきなりのスパルタスタートだった。

えー

## 何でも屋アリア

筋肉痛です。

動けない、しかしチルは運動し足りないといって山の中を探索ついでの散歩へと出かけていった。

「うー、昨日は散々だったなあ」

死ぬ気の運動の後、野宿……木の上で寝るのは怖かったなあなんて、遠い目をしていると大地を震わせるような音が響いた。

「え？なに」

音に驚いたヴェルザが泣き出した。

山のふもとのほうではいろんな色や形の旗が風に揺られなびいていた。幾多もの人々が鎧をまとい一触即発の雰囲気をかもし出していた。

え、この音……戦争開始音？……大きな音楽会みたい……

「って、やばくない!？」

まだコッチは心の準備もできていないのに!

白と青を光と象徴とした赤薔薇の国旗VS緑色と青色が入り混じるような模様入りの国旗

ヴェルエルフ北帝国VSミッドガウン

「戦争」

心臓がときどき言っているのが分かる。

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうすれば

「お困りのようすな」

「え？誰？」

いつの間にそこにいたのか、ヨーロッパ紳士の服装を着た12歳ぐ  
らいの少女が居た。

帽子で目元が良く見えなかったがニツとだけ口元が緩んだのだけは  
分かった。

「中層町『スリーライトタウン』でお店を出している『何でも屋ア  
リア』店長ですな」

「そ、そうですな？」

よくわかんないけど

「店長さんこんな所で販売？」

「そうですなあ、販売といえば販売ですな」

しかし、全くの手ぶらに見える。

「何をうつてるの？」

「はっはっは、面白いことをいいますな。先ほども述べましたでし  
よう『何でも屋アリア』と」

「あーアリアって名前？」

「店の名ですな、meの名ではないですな」



帽子をかぶったまま頭を垂れた。

「テュルフィングと申します」

「……はあ」

「ってそうじゃなくて」

「戦争！」

人々が交じり合って刃をぶつけ合う  
止めないと

「おや、貴女は戦争をお止めになると仰るのですな」

「そりゃそうだよ」

「何故ですかな」

疑問系で返されたほうが不思議

「どつゆつこと」

「いえ、meも戦争を望んでいるわけではないのですよ、ただ貴女のなさろうとしている、その心に興味ございましてな」

「？」

ココロ？

「それは偽善のために動くのか、愛のために動くのか、契約のために動くのか、興味がございまして、支障がなければ教えていただきたい。どれですかな？」

微笑んだまま真っ直ぐに身体を向けていた、まったくの微動だにせ

ずに

「アタシが動くのは……」

約束、だから契約になるし、アタシのせいだから贖罪というものもあるし、責任感みたいなものを感じたりしているけど、実際関係ないし……戦争を止めようと思うのは……  
止める理由は

「そんなの、ないよ」

きつと、そう

「人が争うのは見たくないからとか、そんなきれいごとじゃないよ……ただなんとなく」

そう、なんとなく

「止めたいから」

戦争があつて喜ぶものは居ないのなら終わらせたほうがいい。それだけだと思う

「そうですか」

店長さんは微笑んだ口元を消した

「商売しようと思いましたが、できそうもございませんので今回は消えましよう」

「え？」

彼女は帽子をかぶったまま頭を下げた

「御機嫌よう」

.....

「え?!」

なんだったの?!

わんわん

「おい、ユイ戦争だそろそろココもヤバイかも知れねえ」

「なんで？」

「戦場地だからだよ阿呆」

わああああああああ

兵士達の鏑迫り合いの波が迫ってきてアタシたちは巻き込まれた。予想していただけに困り果てた

アタシって



## 赤ちゃんと騎士

「あ！ヴェルザ！」

赤ちゃんだけは守らなければ  
彼女の身体を抱きしめる。

「う、い、イチル……」

声が響かない、雄叫びと剣の交じり合う音のほうが大きすぎてどんな声を出しても全くの無意味、その上人が多すぎてイチルとはぐれてしまった

「うああああああああ」

敵味方の区別もついていない雑兵が剣を振り回してコツチにやってきた

「う、嘘!?!」

なんとという不運！

「うあああああ」

「きゃああああ!?!」

剣が弾き飛ばされる音がした。

そっと目を開け前を見れば白と青の薔薇の紋のはいったマントを身にまとった40代ぐらいの男性だった。

「大丈夫ですか！？さあ、あちらに」

しかも紳士！

「あ、ありがとうございます！？」

再び敵が現れたが難なく彼は敵を薙ぎ払った。……かつこいー  
口笛を吹くと敵味方の間をくぐり抜けるように白い馬が駆けて来た

(は、白馬)

彼は素早く馬に乗ると手を差し出した

「さあ、早く」

王子様 キタ ……！？

手をためらうように伸ばせばその手を取られ持ち上げられ前に乗せられた。

赤ちゃん持ったちんくしゃじゃ、絵にならないけどね

「落ちないようにシツカリ私に捕まっています！？」

そう言うや否や馬が駆け出した

馬に乗った人はその速さをジェットコースターと同じぐらい怖いっ

て言っただけど……

「きゃあああああああ」

そんなの私的に比にならないくらい恐ろしかったです

人々の喧騒がだいぶ遠く聞こえるようになった頃馬の脚のスピードもだんだんと緩やかになった。

彼は周りに敵がいまいか確認した後馬から降り立ち、足を折った

「アナタのように弱い女性が戦場にいたのに気がつきませんでした」

「そ、そんなアタシが勝手にいただけです！頭を下げなくても……」  
照れる、生で頭下げられるって……あんまりいい気持ではない。なんとというか、痒い

「お許しただけですか」

「勿論ですハイ」

彼は微笑むと立ち上がった

いやーこの世界の男性は紳士が多いな〜ビックリしたなあもう

「ありがとうございます、私は騎士をしているウォーレンというものです」

ドクン

「え？」

「この戦場で指揮を執っていたのですが、気づきませんでした」

ドクン

「アナタはココらへんで住んでいるのですか？」

ドクン

ウォーレン……？

「アナタは思ったよりも清らかそうだ……お会いできて光栄です」

偉大な……騎士

ドクン

「漆黒の『毒婦』」

アタシを……殺す者



## 再会したけど

逃げなきゃ……

殺される！？

「それでは」

え

いま、それでは……っていった？

「あ、あの」

「はい」

「アタシ、殺さないんですか？」

「ははは！まさか、我々騎士は国と王と女性を守るためにいるのですよ」

優しい笑顔でそういわれれば本当のように見える  
でも

（ア……もしかして、前線にいきすぎて伝令届いてないとか？！ラッキー）

あれ？でも漆黒の毒婦は殺すのが規則じゃなかったっけ？  
なんで？なんで？

「あの」

「私がアナタを殺さない理由ですか？」

「はい」

察しのいい人だなあと感心する。

「私の良心と勘がですね、殺してはいけないと言ってます」

うそ臭い

「ははは、では私はコレで」

馬にまたがり去っていった。なんだったんだろう

「え」

白いような無色のような七色のような色の光が舞い降りてきた

「神さま!?!」

その形はだんだんと定まっていき、白馬になった。

やーやっぱりさっき見た本物とはなんかオーラーが違っねえ

「どうしたの？」

『・・・・・・・・』

力が弱ったままなのか、何かを言っているのを少しも聞き取れなかった。そのうち形がおぼろげに崩れてきた

「神さま！」

『エ・レ・レ・ボス』

偉れえーボス？何ソレ

『こ……ままで……はエ……レボ……スに……繋がる』

「繋がるって、どこに!？」

それだけ言つと神様は消えてしまった

「ちょ、神さま!?!？」

結局何一つ分からなかった

「あれ？」

紳士服に身をまとつた子どもの背中が見えた

「あ!えつと何でも屋さん!」

少女は振り返つた

「テュルフィング……もしくは頭領と呼んでもらいたいものですか」

「え、じゃあ頭領」

「なんですかな」

えつと、何で呼びかけたんだっけ

「あーつとそのお」

頭領は怒ることも不思議がることもせずただ頷いた

「お困りのようですね」

「ああうん。困ってる」

いろんな意味で

「では、アナタのお困りを対処するに値するお手伝いさん呼びましょうかな」

「あ、でもお金もってな……」

聞いていないらしく杖を振り回した。杖の先が赤い光を帯び、赤いワツカを作った

「さあ、おいで」

ワツカから何かが飛び出てきた

「ごす

それは物凄い勢いで転がり木にぶつかった

「いつてえ!?!」

「相変わらず受身の下手なことですね」

「て、手伝い人って……」

「!、ユイ」

まさかこんな形で再会になるとは……

「ん？知り合いだったのですかな『トリユーティテス』君」  
嬉しいような悲しいような

「うーばうばうー」

「!?!」

あ、赤ちゃん見て固まった

「その赤ん坊は？」

「トリユーが冷静でよかった……」

説明する前になんだか身体以上を上回る影が……

「？」

後ろを振り返って見上げた

がるるるるる

ドラゴンが一匹

「どうやらヴィルエルフ北帝国はマヤ族の武器も手に入れたらしいな」

「え？トリユーマヤ族長が捕まってるの知ってたの？」

「聖女が向こうをだいぶ破壊してから戻ってきたからな、お前の言う男二人もいまコッチの国に入る……といってもマヤ族からしてみれば囚われる場所が変わっただけかも知れないけどな」



「な!?!」

トリューはアタシの手を掴むとそのまま走り出した

「大丈夫じゃなかったのー!?!」

「わからねえ、ケド逃げたほうが良さそうだ!」

トリューの阿呆~~~~!!!!

赤ちゃんと吃驚

今アタシたちは必死に

逃げてます。

「うあああああああ」

コケそうこけそうこけそうだってばあ

「トリュー！お願いがあるの」

「なんだ!?!」

走りながらお願いを言うアタシは最早お願いというより叫びになってしまふ。

「助けてえええええ」

もう駄目、だってアタシ小・中・高オール帰宅部だったんだもん。むしろココまで走ったということが奇跡だよ。良く頑張ったんだよアタシ偉いよあたし

「ユイ、こつちだ」

腕をつかまれた。



「わ

ドスンドすんどスン……ドラゴンは走り去っていった。

「ふー、ココらへん岩が多くて助かったな」

「あのおー、トリユー？」

「ん？」

受身取れないアタシを庇ってくれたのは分かるけど……そのさ

「なんでアタシの下にいるの？」

聞くのも愚問だけどさ

「なんだ、ユイが押し倒したんだろ？」

「ええ！？違うよ馬鹿」

「冗談だよ」

久振りにトリユーと会話した気がする。

相変わらずトリユーは時々意地悪な冗談を言う……。

「ユイ」

「ん」

頬をそつとなでられる、わがままを言うなら頬より頭が良かったな

……久振りの再会、そして二人っきりの空間

「あああああああああああ！！！」  
「どろした！？」

びくつとしたトリユーの上からどいた

「ヴェルザがヴェルザが……赤ちゃんがいないいいいいいいいいいい！！」

二人きりに喜んでる場合じゃないよ！？ラブコメじゃね？とか思っている場合じゃないよアタシ！？  
アタシの赤ちゃんどこおおおおおおお！？

「落ちつけユイ！」

「だってトリユーいたいけな赤ちゃん……」

「抱いてるじゃないか、腕に」

「え？」

なんか前回は似たようなことしたような気がする……デ・ジャ・ビユ？

「お前はもう少し周りを見たほうがいいと思うぞ」  
「ご、ごめんなさい」

イチルに散々空気読めないって思ってたけど、アタシもそうでした。

「といより、頭領は？」

食べられちゃったけど、あの人

「ああ、多分大丈夫　！？」

キインー！

金属がぶつかった音が響いた

「ああ〜んええ〜ん」

音にビックリしたヴェルザが泣き出した

「え？ちよ……」

襲ってきたものに抗戦するトリユー、それよりユイの目に映った人物は

「イチル！？何してるの！？」

なぜ丸腰で剣に立ち向かえるのか教えて欲しい……

ソレよりも気になるのはきりつけられても傷つくことすらしない服が気になる

じゃなくって

「イチル！トリユー！戦うのをやめてっばー！！聞いてる？」

聞いてませんね、はい

「はっっー！」

イチルの蹴りをトリユーはしゃがんで避けると、後ろにあった岩が粉砕した。

「前から思ってたけど、イチルの身体何でできてるの？」

人間ですか？

一向に止まない戦いにそろそろイラってしてきた。

「いい加減にしないと怒るよ？」

体中にみなぎるオーヴェンの力の流れを掴む……この能力難しいから使いたくないんだけどね……止まらないなら仕方ない能力を使おうとしたら二人の動きが止まった。え？防衛本能とかいう奴？

「「ユイ！」」

あれ？違う？

「後ろ！」

後ろ？

そこには大きな口を開けたドラゴンが居た……

「うきゃあああああああああ！！？？」

どっかあああああああああ  
能力が不発した

移動しましょうかな

「けほ」

口の中では砂と焦げの味がする。  
不発した能力はアタシ自身が爆発することで終わった。

「大丈夫かユイ？」

トリユウが恐る恐る訊ねた。

「ウン……ドラゴンは？」

「驚いて逃げてったぜ、つかオメーさそんな能力あるんならドラゴン如きさっさと退けるよ」

「いや駄目なんだって、コレが例なんだけど……」

アタシの服、真っ黒だ……

「アタシ、チャージして溜めてからじゃないと能力発動できないっていうか、しないから……さっきので吃驚して思いつきり波長逃した……」

とりあえず水欲しい

「ヴェルザは？」

アタシの手の中にいない



杖を持ち上げ先端に赤い光を帯びラセ丸い円を描いた。

「さあ、行こう」

赤いワツカに吸引される

ぷつと、吐き出されるような感じがした。

「わあ!?!」

「ユイ」

こうなることを予想していたトリユーがまたもや下敷きになってくれた。

「じめん」

「.....」

イチルや頭領は身軽にワツカから通り抜けてきた。

「え、こいつて」

屋根瓦で立派な門構えに煙突からもくもくと煙が上がる.....「ここは

「銭湯?」

「風呂といたら温泉ですな」

通ですね頭領

「さあ、みんなで入りましようかな」

暖簾をくぐり中に入っていた。

っというか、ココ何処？



## 赤ちゃんとお風呂

「なんで？」

「かっぱーん」

真昼間にお風呂もいいけど、戦争でみんなてんてこ舞いなのに……  
銭湯になんて入ってていいのだろうか？

「きゃきゃ」

ヴェルザは嬉しそうに桶の中ではしゃいでいた。  
いや、確かにいいお湯ですけど〜

岩の向こうのほうで一人で落ち着くイチルの片手にはおこちよが握られていた。

きっとお酒のんでいるんだろうな

「ねえ、イチル〜」

どうしてこっちこないの？って聞いても『一人が好きだから』って  
いって適当にあしらわれるだろうから聞かない  
だから

「頭領知らない？」

「あいつなら、男子湯だ」

「え？」

堂々と覗き？

「それとも離れがたいぐらいトリューが好きとか？」

師弟関係らしいし……あれ？関係ない気がする

「meは男に惚れる趣味はないですな」

「え」？！「」

じゃあ

「レス予備軍？」

「話は最後まで聞いてほしいものですな」

「ユイ、師匠は本当は43で男だ」

「え？」

43のオッサンで男？

ソレが今や12歳ぐらいのか弱い少女？

「……………」

沈黙がその場を支配する。

でも正しくはヴェルザが水を叩いて喜んでいる音が響いているけど。

「もしかして、ロリコンとか……そついう類で」

「はないですな」

「ですよね」

好き好んでそんな姿になる人ごく一部しかないよね

「頭領ってなんでそんな姿なの？」

「そうですね、語るも涙、聞くも涙なのですが、ルニソーラをご存知ですか？」

「うん知ってるよ」

あの恐らく世界で一番お茶目なおじいちゃん。

「あれもmeと同じ年齢なのですが」

「えええ！？嘘」

「実はアレとmeは同じ、『デズヘイムール大国』にある小さな村の出身者なのですが、ここでは皆が皆、修行しただいでは移動魔法が使えるのですな」

『デズヘイムール大国』の国の人だったんだ、気がつかなかった。じゃあ全く脱がない帽子の下は銀色なのかな？

「そして、彼とmeは腐れ縁であると共に強敵<sup>ライバル</sup>同士で……ある日魔法対決をしたのですな」

スケール大きいなあ

「そしてこの姿」

いきなり話をはしられた！？

「え？何？何が起きたの！？」

「ですから、魔法勝負をしているうちにこのような姿になったのですな」

つまり？

「よくわからないうちにこの姿になっちまったってこと」

トリユーの声が補足したが、全く分からない

一人でまったりしていたイチルの呆れた溜息のつく音だけは聞こえた。

「まあ、結果この姿をかなり嫌がったmeの負けで勝負は決まったのですけどな」

「おじいちゃん確かに気にしてなかったね」

むしろ性格と姿が一致しているかも……

「あちー」

イチルの温泉から出る気配がした。湯気が一気に立ち込める

「もうでるの？」

「短気ですからね」

「うつるっせえ！」

ばきー！！

女子と男子湯を囲んでいた竹の柵が横に倒れていく……



## 疑問符

空に響くような金属音が響き渡る

「うわ、つと、あた！」

そしてアタシは今日で14回目の尻餅をつくことになった

「弱え」

イチルの容赦ない一言

木の棒を片手に溜息つく、運動神経云々よりも、異常的な強さを誇るイチルが全くの手加減無用で攻撃してくるから仕方のないことだと思う、むしろ受身を取れるようになったアタシって凄くないですか？

「雑魚」

この人前々から思ってたけど、酷い

「だってイチル！アタシそもそも素人……」

「知らん」

即答

口を尖らせていると、木の陰に座り落ち着いていた頭領は微笑ましそうにあたし達を見つめて呟いた



「はっはっは、おやヴェルゼが泣き出しましたな」

そういつて赤ちゃんを渡される

「ところでいい加減、戦場はその怒り火を大きくさせるばかりですな」

「うん」

カーミルが言ったのを真似するつもりはないけど、大三帝国戦争にまで事は大きくなっていった……小国も大国に巻き込まれ、どんどん植民地化され始め、戦争は収まる気配をいつそう無くしていった戦乱の世、なのかも知れない……

「ルート達、大丈夫かな……」

太郎君のお腹の中に黄金の葉を入れたまま置いてきたから、呼ぶ手立てはないし、会ったところでどうすることもできはしないだろう

「そういえば、ね頭領」

「なんですかな」

「エレボスって何？」

神さまが言ってた、エレボスに繋がるって

「この世と地獄の間にあると言われる、暗黒界ですな」

「暗黒界……？」

「今が丁度その様なときですな、ソレが何か？」

「え？あ、ううん何でも」

暗黒界が繋がる……つまり、戦場は拍車かかるってこと？



「ユイ、一人で悩むな、俺らがいるだろ」

トリユウに頭を撫でられ意識を戻した。

「うん、そうだね」

大丈夫、あたしは一人じゃないはず

「でも」

赤ちゃんの頬をそつと撫でる

「アタシ、何が出来るかな……何もかも中途半端で、無力で、何も無いのに」

力があってもコントロールできていないし、変わると決めたのに、何一つ変わってはいないし、戦争を止めるといっておいて、こうして今もダラダラと時を過ごしている

アタシは、人の不幸しか呼べない、毒婦だね

「お前、見てるとイライラするなおいコラ」

イチルに頭をつかまれた、あの痛いっす、力込めすぎっすっていうか、ぎりぎりいってます。

「ギャー　！？痛い痛い！ミシミシいってるよ！コレって絶対骨だよねえ！！？」

「ハッキリしろよお前、じわりじわり成長してんなよコラあ？ああ？」

「ねえそこつてさ、『ゆっくりでもいいから前に進もう』じゃないの！？ねえ！！」

「はああああ？」

心底呆れた声出された……だーかーらー！ピキピキいつてるから！？ねえ！泣いちゃうよ！つていうか死んじゃちゃうよアタシ！

「だから甘ちゃん坊ちゃん時にも言ったろ？『強くなるのに、時は関係なんだよ』成長も然り、お前がそこで変わると決めたそんなときに、前には進んでんだよ」

「あの、わけが分からない痛い！？」

メキっていったよ！？

「ようは、『行動にうつれ』と言いたいのですな」

頭領がそういうとイチルはやっと手を離した。あー頭が軽い

「そつだよ、とやかくゴタゴタいつてる暇があるんなら、さつさとやればいいんだよ」

「イチルつて、考え方が単細胞」

「す

「いたーい」

ヴェルザみたいに泣きそつ

「ユイ」

トリユーはあたしの肩を掴むと真面目な表情で目を真っ直ぐに見つめた

「何？」

「お前の人生、お前で決めていいんだ。でもな、俺のことも考えといてくれ」

「なんのこと？」

「言っただろ『ずっとココにいてくれ』って、俺はお前にずっとここにいてもらいたいんだ」

「え？何？なんでこんな空気になってるの！？」

なんでいきなりシリアスからラブコメに変わったの！？基本真面目嫌いなあたし困るよ！？

「お前は俺を守る、だから俺の傍に居てくれ」

なんでこんな雰囲気になったのおおおおおお！！？？

ああもう顔から火が出るぐらい照れる！恥ずかしい！どうしよう！どうしたら言いのかな！？ああもうもういいや！

「アタシ、この世界に居るつもりだよ！」

今言うセリフじゃないよね！でももういいや！

「ずっと、……だからアタシねトリユーの傍に居てもいいかなあ？」

「勿論だ」

きゃあああああ

抱きしめられタアああああいやー照れる~~~~飛んでいきそうだよ〜ツバサを下さいだよ本当に〜

あう、目の前が揺らめく

「あ、ユイ!!」

ってあらあら、本当に意識が飛んじゃった〜お休み……

## 赤ちゃんと一年後

あれから一年後

温泉のある町、中層町『スリーライトタウン』……つまりアタシたちは場所は違えどまたミッドタウンへと戻っていた。しかし指名手配は出ていないらしくだれもアタシたちに関心を寄せていなかった。

「よく眠れましたかな？」

「頭領おはよう、ヴェルザも静かで良く寝れたよ」

そしてあの日からアタシたちがお世話になっているのは頭領の家兼仕事場『何でも屋アリア』だ

「頭領ありがとうございます？衣食住用意してもらって」

「いえいえ、トリューティテス君はmeの息子も当然、然らば貴女は嫁同然。家族当然ですからな」

目深に帽子を被りながら頭領は微笑みながらそういった。アタシは机の上に食事を並べながら一人赤面していた。

嫁って……

「とりあえず孫はこの子で」

机の上で座っていたヴェルザを抱き上げると彼女はきゅっきゅっと喜んだ。うーんどうみてもおねえちゃんと妹の図にしか見えない。しかしヴェルザも大きくなった

「ふぁあ〜おはようさん」

「あ、トリユールおはよう」

長い灰色の髪の毛を一つに束ねながら眠たそうに椅子に腰をかけた。そしてあの人は今日も起きてくるのが遅い

「イチル！ごはんだよ」

低血圧ってわけでもなさそうだけど、彼女は起きてくるのが遅い。しかも関係ないけどゴーグルをつけたまま寝ているし

「ユイは最近イチルと鍛えても、へとへとになるのなくなったな」

「うん、逆に目が覚めて、それでも頭領のほう起きるの早いけど」  
「当然ですな。寝ていないのですから」

「ええ！？なんで？」

寝なよ！

それはともかく全員席に着いたので食事にすることにした。

「はあ」

「どうしたユイ元気ないな」

「ユイ〜ニコ〜」

元気出してというようにヴェルザがユイの膝の上でユイに抱きついたり。  
可愛い  
可愛い

「そうだね、笑顔笑顔、にっこ」

一才にもなれば歩けるし表情豊かになった。こちらが笑いかければ可愛い笑顔が戻ってきた

「……………」

しかしすぐに曇ってしまっ

「このままじゃ駄目だよね」

「何がだ？」

「戦争だよ」

何もしない時間を長くしすぎた

アタシは平和を取り戻してきたのではないか……最近過去のアタシが今のアタシを責める夢を見る。

多分そろそろ危ないっていう信号なのかもしれない

「いまは休戦状態だけどいつまた戦争になるか分かりませんからな」

「うん」

「……止めるってどうやって止めるのか考えてるのかよ」

「……………一応」

いたってシンプル、でも成功する可能性はない。

「ミッドガウンは非戦闘的だから恐らくヴィルエールフ北帝国の攻撃が止んだら収まると思うんだ」

「デズヘイムール大国は？」

「……………」

ヴェルザの頭をなでる

「この子を……帰せば何とかナルト思う」

「こ都合主義な話だな」

攫った張本人が食事のパンを齧りながら即答した。

男二人（？）は何も言わない。

何も分からないヴェルザは抱っこされて機嫌がいいのか教えてあげた日本の歌を歌っている。

「アタシだって別れたくないけど、本来居るべき場所はここじゃないんだよ」

王族ならばそれに相応しい生き方をして欲しい。彼女の幸せにもなるはず

「本当はもっと早くこうするべきだったんだよ」

きつと

「城の暮らしがいいとはかぎらねえだろ」

「でもこの子が居るべきなのは城だよ」

たぶん

「ユイは……それでいいのか」

トリューが口を開いた

「……うん」

寂しいけど、別れはもう慣れてる

「俺は、……ヴェルザは、ユイと一緒にいたいと思っていると思う」



「ぜ」

「うん」

「それでもか」

「うん……ごめんねヴェルザ」

無責任な女でゴメンね

「？」

何も分からず『手のひらを太陽に』を楽しげに歌っている。  
ごめん

## 王様とイチル

「王国に近づきたいのならmeに任せてくださいな」

頭領は杖を取り出してそういった。

「自国に帰れぬほど弱い魔力持ち者ではないですからな」

「ルニソーラは帰れないらしいぜ」

「へ、へえ……」

杖が赤い色の光を帯円を描いた。

「さあ、行くっ」

吸い込まれる感覚が体中に満ちた

ごめんねヴェルザ……

「……………」

。。。

「痛い！」

「つて！」

相変わらず師匠ズは着地が上手かった。知り持ちついたあたしにヴ

エルザは大丈夫？と心配そうな顔で覗き込んできた。  
うん、良心が痛む

どうやら頭領はお城の中に入ったらしい

「なんでまた堂々と……」

「コソコソ行くよりかはまじだと思つのですがな」

「……そうだね」

彼（？）に勝てる気がしません。師匠に似たのかもトリュー……口  
喧嘩強くなってるし

「何で俺を見るんだ」

「別に」

兵士を三人連れた神官一人がこちらを見た。そして周りに居た兵士  
達も敬礼した

え？敬礼？

「テュルフィング・ジエンガー宰相、今までどちらに？」

「ええ？ええええええ！？」

さ、宰相！！？

「そうですね、末姫様の救出とでも言っておきましょうかな」

「末姫様！？」

ヴェルザは知らない人に顔を見られ怯えた顔をした。

「ユイ」  
「大丈夫だよ」

多分

「立派なお城だね」

白い壁に赤い絨毯の敷き詰めれた床  
さすがお城

兵士も廊下で黙って陳列してるし……うん、怖い

「王の謁見の間です」

兵士に扉を開けられ中に入れば、二階に丸っこい白髭の長い王様が  
居た。

今までで一番王様らしい

「おおジェンガー……よくぞ帰還した」

「はい、陛下にご心配をおかけして申し訳ありません」

王様の前でも帽子脱がないんだ頭領……ある意味大物

「で、余の娘というのは」

「この方でございます」

アタシのほうに手を向けた。正しくはアタシが抱っこしている少女  
だけだね

ヴェルザは嫌そうにあたしの体に顔をこすり付けた。

かゆい……

「そちは誰だ」

「アタシは……」

「末姫様を救出なさった方ですな。攫ったものの正体は大国ではありませんぞ」

「何？では姫を攫ったものは誰だ？」

「俺だよ」

後ろを振り向けばいつの間にも居たのかイチルがそこにいた。

「貴様は……っ、『クオン！』」

クオン？

ゴーグルをのければこの国独特の瞳……赤い色の瞳が見えた

え？

え？え？え？

ええ？

「ど……どゆこと？」

さっぱりなんですけど



王様は兵士に周りを守られながら忌々しげな顔を見せた

「貴様が漆黒の毒婦だから貴様の国と一族は滅んだのだ！余はそれをココまで再建させたのを、今更貴様に邪魔させてたまるか！」

「！」

漆黒の……毒婦！？

「殺せ！」

イチルは取り囲まれたがあっさり撃退した

「さすが最強装備と謳われる『イチル』ですな」

「って感心している場合じゃないよ！」

「師匠、イチルが漆黒ってどうゆうことだ？」

師匠は口元を微笑んだ

「ただ漆黒の髪をもって生まれてしまった、それだけですな」

『俺にも、罪は無かった』

イチル！

「やめてください！ヴェルザ……末姫様はこうして無事なんだから、イチルを殺さないで！」

ヴェルザ、アナタを売るようで心苦しいけど……ごめんね

「お願いですから、争いをやめてください」

「うるせえ」

イチルの足が目の前にあった  
うわお

「ユイ」

トリユーに服を後ろに引つ張られてなかったと思うとぞっとした

「び、びびった」

「ユイーイチルと喧嘩？」

「ち、ちがうよ」

あーびびったびびった

「やめてクオン！」

「！」

イチルの身体の動きが止まった、二階をみれば王様の横に気の弱そ  
うな女性がたった

「姉上っ……………」

「もうやめてクオン……………争うなんて嫌よ、妾はアナタともう一度暮  
らしたいのよあの頃のように」

「反吐が出る！お前の偽善者ぶった言葉なんて聞き飽きたんだよ！」

「クオン」

「俺はイチルだ！」

「……………」



なんだろう、こんなときにあれだけど……別のストーリーに突入してませんか？

それから……アタシ、どうすればいいのかなあ

トリユーも同じことを考えている顔をしていた

「さあさ若いお二人さん」

頭領がアタシからヴェルザを取り上げると杖を向けた

「次の国に行かないと、こちらは此方でお任せくださいな」

「え、う、うん」

最後にヴェルザの頬を撫でた

「ゴメンねヴェルザ……楽しかったよ」

「ユイー？」

「さようなら」

「やーやあ〜ゆい〜やあああ」

涙見せるヴェルザに胸がちくりと痛んだけど、ゴメンね……また、会いに来るから

「アナタを愛してたよ」

コレだけは絶対だから……

「やあああああ、びええええん」

またあおしね

## 会議

「痛い」

ゴロンゴロンと転がるアタシ  
受身って難しいですな〜あ、頭領の口癖がうつった……

「ユイ……さんですか」

「え？」

久しぶりに聞いたこの声  
確か

「ストネット……アルバージン」

え？ここミットガウン？

「これはこれは、神姫殿」

「あれれ？ジヨルナン・デイダ……国王」

え？じゃあヴィルエルフ北帝国？  
どっちなの？

二人の似非紳士は笑って地面に座り込んだままのアタシに手を差し  
伸べたが、二人同時に手を出したからどちらも引いてしまった。(  
おいー)

かわりにトリユーがアタシを持ち上げた(おお)

「なんで導師が敵国に居るんだ？今は戦争中だろ」  
「ええ、事実上では」

？

「新たな敵、強いて言うなら第三者とでもいいでしょうか」

ジオルナンが楽しそうに続けた

「この世界に醜い魔物というものが現れ始めてね」

「ま、魔物？」

「そうだ、今までのような人畜無害な精霊モンスターの類ではなく、人を殺し生ける者を否定する魔物だよ」

なんとというファンタジーでしょう……おっかなびっくりしすぎてまた頭フリーズしそうだな

「ユイ、力を貸してくれませんか？」

「え？」

「神を殺すことのできる力を持つ貴女ならきつと穢れを消し去ることがができるはず」

「えええ！？」

何好き勝手言ってくれちゃってるのこの人！  
人のこと散々いたぶ振ってくれたくせに

「貴女しかいないのです」

「う、うーん」

「おい」

トリューがアタシとストネットの間にはいった

「さすがにそれは都合がいいんじゃないかねえか」

アタシもそう思う。あ、違うかー

「我々を見捨てるというのですか？ソレすなわち、己が『毒婦』である、認めるということですか」

「！」

そんな言い方って卑怯じゃないか

素直に謝って頼んでくれたらあたしだって、できるかどうかわからないけどなんとかガンバッテ努める気にもなるものなのに

「貴女が手伝ってくださるなら、我々も協力は惜しみません、そういう話で丁度話はついていたのですよ」

なんとという勝手な

人がいないうちにアタシが動く限定で話が進んでいたなんて

「お前ら！」

「トリュー！」

彼の腕をつかんだ

「いいよ、自分勝手なの……彼らだけじゃないし」

アタシも、そうだから……

二人の権力者のほうを見る

「どついたらいいの」

二人は笑った

同じ野望を持った自信家は、コレだからいけ好かない……あまり信じないほうがいいと思う。でもそれじゃあやりにくいから

「信じるよ、貴方達のこと」

そして自分の行き先が平和であることを祈る……

どの生き物も居ないだろうこの荒野に、彼女はトリューと僅かな兵士を連れてやってきていた。

崖の下を覗けば大きく黒く禍々しい穴が開いていた。

「地獄の世界は何もないんだって、ストネットが言ってたぜ」

「……じゃあ、魔物は……何処から来たんだろうね」

後ろの兵士はアタシたちが逃げないように監視を言いつかってココにいるが、今すぐに逃げたい衝動に駆られているのだろう、足がすくんでいるものも居れば、決して崖の下を見ようとしないものも居た。

「……はつくしゅん！」

空気が止まった

「ばつくしゅん！はくしゅ！うゝはつくしゅん」

「ユイ大丈夫か？」

「う、うん。はあ……くしゅん！」

何故かくしゃみが止まらない

「誰かアタシの噂してるのかなあ？」

「まさか」

「あの、偵察はもう済みましたか」

若い兵士が堪え切れず話しかけてきた

「あ、はい終わったといえそうです」

なんのいい案も思いつかなかった。

「では戻りましょう。その……「コ」は異様に……寒いので、風邪をひいてしまわぬように」

寒い？

「確かに、少し冷えてるね空気」

それにくしゃみが止まらなかったのか

納得

「うん、戻ろうか」

しゅるん

「！」

足が何かにつかまれたと思ったのとほぼ同時に身体が空に投げ飛ばされていた。

頭の上を見ればアタシのいた場所に魔物が居た。

「うわああああああ」

逃げ出した兵士の前にも魔物が現れた。どつやら囲まれていたらしい



「伏せて！」

すぐさま能力をチャージして放った。

ドオオオン

威力はまだまだ弱かったが襲われかけていた兵士が逃げるには十分だった。

「って、わわ、わ、わあああ!？」

アタシまだ受身取れないのよ〜!

地面が近くなってきた

「ユイ！」

ドサ!

「いったった〜」

「大丈夫か？」

手を差し伸べられて起き上がる。魔物はまだアタシ達を囲んだままだ  
本当、ファンタジー要素増えてきたよねこの世界

「勇者とか現れたらいいのに」

「何言ってるんだ……危ない」

ゴリラとライオンを練り合わせたような魔物が突進してきた。トリ  
ユイはアタシを押すと剣で魔物の攻撃を防御した。

「くっ！」

重いその攻撃に耐え切れず後ろに足が後退していく

「トリュー！避けて」

「！」

トリューが声に反応して横に飛びのいた

ドオオオオオオン

今度は直撃したので魔物も体中煙を上げて動かなくなった。

「やばいかもナ」

「大変だね」

「人事だな」

さあ、どうしようか……

## 鳥合

作戦もなければ討つ術もなし

困まれたあたしたちはただじっと息を潜めるのみ

「……うーん、どうしようっか」

「援軍は期待できそうにないな」

傷ついた兵士の手当てをしながらトリユーに相談を持ちかけたが、あっさり案はないと切り捨てられた。森の中まで逃げたが魔物は思ったよりもしつこく、今だ執拗に探していた。はつきりいつて身動きできない最悪の状況といえる。

「エレボスから出てくる魔物を追い返せば、どうにかなるかな」

「今の俺達じゃ追い返すのも一苦労だろうよ」

「そうだよねえ、追い返しても穴を塞がなきゃ駄目だし……かといって方法があるかといえば、ないしねえ」

お手上げ状態だ

「本当、役ただずだよね、アタシ」

膝を抱え込むように座りこむ、

「できることをしようってやるおって決めても、結局何もできないんだもん」

「ユイが悲観することは無いさ、ただあれだ」

トリユーも隣に座り、そつと肩に触れた

「奇天烈すぎるんだ、世の中が」

「うん、まあそうだけど」

奇天烈って言うか、もはやレベルが天変地異な気がするんですが

「太郎君……」

「そういえば、持ってないな」

久振りに恋しくなった彼の名を呼べば意外そうな顔をしたトリユーが何も持っていないアタシの手を見つめた。

「よし、ユイ」

「ん？」

なんか気合の入ったトリユーが立ち上がった。

そして何故か楽しそうにアタシにその手を差し伸べる

「いろいろ試そうぜ！」

「試すって何を？」

「お前の力でみんなを呼んでみるんだ」

「ええ？」

呼ぶ？みんなを？みんな？

つて

「無理だよ！だってこの能力……役に立たないし」

「ユイがそう決め付けているだけかも知れねえぜ？もしかしたらずつげえ力が秘めてるかもな」

「有り得ないよ」  
「やるっぜ」

腕を引き上げられ立ち上がった。

「できるさ、ユイなら」

「そついうのってなんていうか知ってる？」

「さあな」

「無茶振りって言っただよ！」

兵士の皆さんも期待した目でコツチを見始めたし、うう………痛いっすツライっす、期待しないで〜

できるかどうかわからないけど、やってみようかな

………みんな、来て！

身体中の力が光と変わり、強く光り輝くと天に向かって発光した光っている自分自身も目を開けられず強く瞼を閉じる。

「………うー！」

光が消え去ると同時に、身体中の力が抜けへたり込んだ。けっこう体力を消耗したが、一体………

「ユイ？」

「！」

そこにいたのは、懐かしい面々

「マリミア、クロクナ、ルニソーラ、マルクム、ムイト……みんな  
！？」

皆

本当に、皆

「皆すぎるでしょう！？」

アタシ呼びすぎた！？

サアヤやらイチルやら……っていつか、王様まで呼んじゃったよ！？  
どんだけ節操無しなのアタシ！！

365

「……みんなを危険区域に呼んだだけかもね」

てへって感じで言ったら、マリミアの渾身の一撃を喰らった。

あえたのは嬉しいけど……

だからどうした、状態になった……

## 烏合（後書き）

終わりたいようで終われない、終わりがたくないようで終わらせなくてはならない、そんな矛盾と葛藤が、話を意味不明にしているのが悩みです（汗）  
とりあえず、頑張りたいと思います

## 鬼女様

一つの頭より、二つの頭

……っ てよくいうけど、コレだけ集まっても何にもならないものはない

「ユイー」

「ヴェルザ」

別れたばかりの少女が泣きついてきたので抱き上げる。それを見たマリミア親子

……またアタシの子どもとかいうんじゃないでしょうね

「マナ姉！小さくなった」

上には上が居た

「違うよクロ、どうみても違うでしょうホラ」

ヴェルザを近寄らせて見せると

「やっ！」

っとヴェルザがクロの頬を殴った。  
パーじゃなくて拳で



「うわー！ごめんね大丈夫？クロ」

妹兄の後ろで大爆笑中、最近思ってきたけどこの兄弟仲悪いのかな？まあ、兄妹ってそうゆうものだよな？

うん、そうゆうことにしておこう

「で、どうにかなりそうなのかい」

「ううん、全く」

マリミアは赤ちゃんはスルーの方向で進めるようだ

「わー喧嘩だ！」

イチルかと思っただが、暴れていたのはルニソーラと頭領だった。そういうば仲悪いんだったね

「魔法対決だ」

「おう、こいや」

二人一緒に同時に魔法の詠唱を唱えると光を放った。  
ぼぶん

「なんだこれー！？」

ルニソーラが今度はフードを目深に被った少女になり、頭領が正しく老紳士になった。

つまり入れ替わっただけ

「な、なにしてるの？」

今深刻な状況なのであまり愉快なことしないで欲しいんだけど？

「可愛いでしょう？ルニちゃんです」

「おのれー！ルニソーラー！！」

今回の勝負もルニソーラの勝利のようだ、精神的に、はだけど……  
コレだけ人がいたら一種のお祭り状態だ

「ユイ」

「マルクム」

「巫女が呼んでいる」

「ああ、うん」

サアヤのところに行くまでにムイトとトリユーがにらみ合っているが、一々間にはいるのももうメンドクサイので無視することにした。

369

「現人神様」

「えっと、いい加減違っただけどなあ」

もう駄目かな

「エレボスの穴を閉じることができるのは、神様だけです」

「そうなんだ」

「はい、ですが今は神様が弱っているので恐らく閉じることには不可能です」

「そうなんだ」

「神様以外で閉じれるものは居ないと思われます」

「そうなんだ」

「なので、現人神様が代わってください」

「そうなの……なの？」

なんで？

「現人神様は神様を凌ぐほどのお力の持ち主、できるはずですよ」

分からないのにできるって、それは穴開いた林檎を握りつぶして潰してやったぜって威勢はつてる人みたいじゃん  
無理無理、できっこないよ

「貴女しかいないのです」

落とし文句みたいに言われても

「できるならとっくにやってるってば」

簡単に言うけど、人間が本来持つてはいけない能力は、使った後僅かながら反動が来る。

「貴女しか、いないのです」

純粹無垢な少女に真っ直ぐに見つめられれば断りにくい……  
でもコレって押すな状態だよな

「お願い、あなたしか……」

何回言うの！？

「異常な力を持っていないの」

酷いコメント最後にキター  
なんかぶっちゃけたよね！

！！！？？

「うん、断る」

「ち」

いま舌うちした？

巫女様がそんなんでいいの！？

「ユイ」

巫女ならぬ、聖女が現れた。何故だろうこの人見ただけでアタシの死亡フラグ決定した気がする。

「逝って来い」

まさかの！？

ありがとう

。。。

「グルグル巻きの簀巻きにして東京湾に沈めてやる！って……よく聞くけど……」

下は地獄に繋がっているとエレボスへの穴  
アタシは今、……吊られています

「エレボスの穴に沈められそう!?」

嫌だよ!? 下のほうからなんかオイデって聞こえるよ!? (幻聴)  
いやあああああああ?!

「なんでアタシがこんな目に!？」  
「えつとお〜……うふ」

聖女との会話終了

酷すぎる!

横に居た巫女サアヤは叫んだ

「大丈夫です! 現人神様が媒介となってくれば、我々も力を出し、完全とはいえないまでもエレボスの穴を防ぐことができるかもしれないのです!」

「『かも』とか『完全じゃない』とか! 信憑性ゼロなんですけど!

「？」

巫女サアヤが微笑んだ

「OKです！皆さんスタンバイしてください！」

「そうゆうキャラだっけ君　！？」

二人の神官オトメが此方を向いた

「いくわよ、ユイ……貴女に懸かってるんだから」

「うう、嫌なプレッシャー」

「では、……はじめます！」

二人の力の形が炎として浮き上がり、その身を上回った……お互い色の違う炎だが反発しあいつつも最後には交じり合い、強い炎の色となり、また再び天に向かって燃え上がった。普通に思った

綺麗って

「ユイ！」

って、名前呼ばれても……

良く見ればみんなも祈るような形でアタシに力を送ってくれていた  
温かいチカラの波動が身体の中でめぐるのが分かる……でも

「……駄目だよ」

実際にエレボスの穴を対峙したら分かる

「エレボスの穴を塞ぐには……弱すぎる」

圧倒的な、この差

「みんなツライならもうやめたほうが……」

「いや、大丈夫だ」

マルクムが膝をつきながら言い切った

「ココでやめたら、恐らく次はない」

「おいアホ女！もつと本気出せ！」

「あ、アホ女じゃないもん！ムイトのバーカ！」

って、喧嘩している場合じゃないよね。うん  
でも、無理だよ

「諦めよう、次の手を……捜そうよ」

この差は、埋まらないから

「また、そうやって逃げんのかよ」  
「！」

トリユウ？

「変わるんじゃないのかよ！頑張るんじゃないのかよ！できること、するんじゃないのかよ！？」  
「だって……」  
「そうやって、さっさと諦めて、いいことあったのか！」  
「！……」

トリユウは一度大きく息を吐いた後、もう一度大きく叫んだ

「太郎君と別れた意味は……なんなんだ！」

……太郎君

『ごめんね』



アタシは、新しいアタシになりたいから。過去のアタシの象徴である君は連れてはいけない。寂しいけど、お別れね』

何も無い家の中での独り言

「私は、何のために生まれてるんだろう」

生まれたから

「私はどうするべきかね」

知らない

「私は、死ぬべきかなあ？」

できるならね

「……はあ」

自問自答でこんな自分に対して冷たい反応しかできないのだろうか。自分なんだからやさしくてもいいのに……

「自分が嫌いなのかな」

アタシだけじゃない、みんなも嫌いなんだ……だってアタシは『漆黒の毒婦』だから

「だって、アタシにはなんの力もないんだよ、……みてよ、ほら」

それでも最大出力の力を放出しているが駄目なのだ

「空っぽなんだよ、もう」

もう、アタシはなんの力も持っていないの  
ただの無力な女なんだよ

「駄目なんだって」

「それ以上言ったら、殺すぞ！」

イチルが拳を握った手で立ち上がった。

「泣言ほざいて何が出来るんだよ！綺麗ごとだけじゃ……口先だけ  
じゃ何にも出来ねーんだよ！」

「ユイ、笑うゝヴェルザも頑張るから」

「全く、アンタは相変わらず仕方のない泣き虫だよ」

「ネーネ泣き虫」

「泣き虫だな！」

マリミアも、クロモクナも……ヴェルザもみんなみんな、立ち上がった

動くのもつらいはずなのに立ち上がる

「「おおらあ　　！ちゃんとしなさいよ！いつまでぐじぐじして  
るのよ！」

「えー！マナ？！」

「そうよ、アンタが呼んだんでしょうが……呼んだなら、責任もって帰してよね！」

委員長の腕の中には太郎君がいた  
懐かしい

心なしか、微笑んでいるように見えた

「ユイ」

トリユーが手を伸ばした、届くはずのない手のひら

「空っぽなんかじゃない、俺達が居るだろ」

「……うん」

光の強さが増した

「!?!」

「お手伝いします〜エレボスなんかには神様の世界滅ぼされたらたまりませんし〜」

「フェアナ」

「ユイ」

神様が身体の中から強い光を放った

『わずかですが、使ってください』

力が一気にみなぎる、これならいけそう！

「若草雪衣！いつきまあああああああす！！」

力を一気に穴に向かってたたきつけた。

光が一切の音と景色を遮断する。

全てが視界に見えるようになった頃、穴は……塞がって跡形もなくなっていた

「いやったあああああああ！！」

みんなが歓喜に飛び上がり吊るしから解放されたあたしのもとへと駆け寄ってきた

「アンタはやつぱり毒婦なんかじゃないよ！」

「ユイサマ、ありがとうございます！」

「よくやったなー！」

「ユイ」

遠くからトリユウが駆け寄ってきた。

「わ」

おもむろにアタシを抱き上げると皆が笑った。  
マナの抱いている太郎君と眼が合った

モウ、ダイジヨウブダネ

うん、ありがとう太郎君

アタシはもう空っぽじゃない、みんなが、大切なみんながいるんだ

……

だからもう、大丈夫

アタシは不幸で可哀想な、『漆黒の毒婦』なんかじゃないよ

ありがとう(後書き)

長い長い拝読ありがとうございます^^

また短編を出すかもしれないと思うので、そのときにもまたお会いしましょう

GOOD LUCK TO YOU !!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2789j/>

---

空っぽの手のひら

2010年10月9日07時08分発行